彼は決して己の包藏を吐露して、他人の參考に資し、世を裨益せんとする積極的態度を取ること恐らくはあらじ。何となれば、彼は獨自一個の人なるが故なり。

斯の如きは、我輩の彼に對する觀察の要點なり。果して的中し居るや否やは、我輩自らに於ても保障し能はず。況んや世に對してをや。若し不幸にして見當外れなりとの公評を得ば、我輩彼に對して深く妄評の罪を謝すると共に、社會に對しては後日更めて精確の觀察を再表し、今次の不明を謝するに吝ならず。

一見茨木に似て其實全然異なるものは、吉岡鄉甫なり。彼は山口の人、茨木と同期の卒業生にして、國文科出身の文學士なり。初め第二高等學校教授に任じ、次で文部省圖書審査官に轉ず。三十六年視學官に任じ、復た審査官に歸り、四十一年更に視學官を本官として審査官を兼ね、又帝大文科の講師を兼任す。

沈默寡言なる點は、茨木によく似たりと雖も、吉岡の沈默寡言は、獨自一己の性格より來らずして、謹愼自重より來る。頭腦明晰にして、學生時代の秀才、恩賜の銀時計を拜領したる點に於ては、兩者全く同一なりと雖も、溫厚篤實の點に於ては、茨木よりも寧ろ吉岡に優る所あるを見る。

吉岡は寡言にして論客にあらず。他人と議論を鬪はすが如きは、彼の長所にあらず又、自ら好む所にあらず。然れども當さに意見を述ぶべき所に於ても、尙且つ故意に沈默を守る人には斷じてあらず。

奇拔と痛快とは彼に於て、之を求むべからず。然れども穩健と中正とは、彼の全言動を一貫する大精神なり。彼は才氣と覇氣とに於て、針塚に及ばず。快活と愛嬌とに於ても、針塚の敵にあらざる也。然れども、愼重にして綿密、事を執つて遺算なからんことを期する周到の注意に至りては、彼れ或は針塚の上にあらんか。豪放の分子も彼に於て、見ること能はず。處世の通才も彼の長所にはあらず。されど堅實にして誠實、醇々として己の職分を遂行し、一過もなからんと努むる忠實は之を有す。

融通豁達も、奇略縱橫も、圖々しき手腕も、喰へざる才幹も、凡て此等のものは全然彼の關り知らざる所なり。天才の人にあらざるが故に軌道を外れたる所なく、世才の人にあらざるが故に、複雜の心術を有せず。天眞爛漫にあらざるが故に、愛嬌タップリの方にもあらず。

小心翼々といふほどにはあらざれども、斷じて放膽敢爲の人にはあらず。小膽內

氣の人にはあらざれども、斷じて斷行果決の人にはあらざれども、斷じて押しの強き人にはあらず。隱順卑屈の人にはあらず。若し我輩の言を疑はゞ、一日行きて彼と語り、其の話し振りに注意せよ。彼の人と語るや、必ず己の視線を對者の顏面より約三十度の外に注ぎ決して之を正視せざるを常となす。其狀恰かも妙齡の處女が年若き男子と對座して嬌羞を感じたる時の如し。押しの強き人に於て斷じて見ること能はざる姿表なり。

快活ならざれども、沈鬱ならず。開放的ならざれども隱險ならず。積極的ならざれども、消極姑息にあらず。修養努力に全力を悉くす人にあらざれども放縱疏大の人にもあらず。要するに總ての點に於て中正中和の人なりといふを適評なりとせん。

瀨戸虎記に會ひて、霜氣を感じたるものは、小泉又一に會ひて壓痛を感ぜん。轉じて幣原坦に會へば薰風を感じ、針塚長太郎に會へば快男兒を聯想す。而して吉岡鄕甫の許に來つて、終に處女味を感ず。

吉岡は決して脫俗の仙人にあらず。獨善の禪僧にあらず。實社會を知らざる道學先生にもあらず。されど全身の何處かに尙ほ未だ世故馴れざる一種の臭味を殘存す。然れども其臭味は青年の有する稚氣臭にあらず。黃嘴の乳臭にあらず。要するに處女味といふを恰適なりとせん。

吉岡は年齡未だ若し。世故馴れざる所殘存すればとて、毫末も彼の人物を輕重する材とはならず。否な、之が殘存は、尙ほ彼に將來發達の資質あるを示すもの、彼に取つては寧ろ祝すべきことどもとなす。

想ふに彼は、所謂手腕家と稱する人物型の人にあらず。俗流に棹して、變轉自在に己の舟舵を繰り、或時は直進、或時は旋回、機變に應じて、奇手百出、巧みに己れの運命を支へて彼岸に到達するの怪腕は、今後幾年努むるとも、恐らくは彼の修得し得る所にあらざらん。自らに於ても、亦斯の如き方面に進むことの太だ有望ならざるを知了せん。然らば彼の標的は之を揣摩するに難からず。何ぞや曰く、學者たること是れなり。

彼の專門は國語なり。國語は、我教育界の過去に於ける大問題なりしのみならず、現在及將來に於ける最大問題なり。將來の吉岡鄕甫は適さに此問題の有力なる解

決者の一人として、我教育界に現はれ來らざるべからず。

純國語學者は、現時の本邦に於て、其數決して少しとせず。然れども、國語と教育との關係に於て、深大の研究と多大の經驗とを有する人に至りては、其數決して多しとせず。之を元老株に求めば、上田萬年、芳賀矢一、伊澤修二、大槻文彦其他一二あり。之を中年の人に求むれば、保科孝一、佐々政一、其他三四あるのみにして、これより後進の人にありては、未だ殆んど屈指するに足らざる始末、我教育界の一大恨事なり。然るに今吉岡を見る、彼は圖書審査官の經歴あり、讀本練纂の經驗あり、而して今は視學官の職にあり。國語を教育と連結して研究し、方面の部將たるには誂へ向きの地位にあり。彼にして若し之に向つて進まば、數年の後必ず造詣あり、邦家を益する、こと蓋し尠少にあらず。

一口に國文科出身といふ中にも、其專攻部面は種々にして一ならず。國史と國文學史とは著しく違ひ、國語と國文學とは非常の相違あり。我輩は今異國にあり、彼の專攻科部面が何れなるやを問はず、國語を教育と連結して研究するには十分の素養と實力あることれなるやを確むると能はざるを憾む。然れども其專攻科部面が何

を信じて疑はざるなり。

佐々政一は、德川文學が專攻なりと聞く。然れども、彼のいふ所を聞き、彼の論ずる所を聞いて、誰か彼を一學究の腐儒と思ふものあらん。彼は知識以外に智見を有し、專門の學識以外に經世家的識量を有す。其趣味は廣汎にして、教育界、思想界、文學界に亙り、此等諸界の時事を論ずれば、概して適確、穩健にして大人の面影あり。殊に國語問題に至りて最も光彩を放ち、其論殆んど靈あるを覺ゆ。世は彼を稱して教育界の不遇兒なりといふ。我輩は彼が果して不遇兒なるや否やを知らず。然れども若し不遇兒なりとせば、そは彼の識見の足らざるが爲にはあらずして、識見の有り過ぎるが爲なり。

今の教育界殊に高等師範學校に在りて優待せらるゝには、彼の人物は少しく高尚に出來過ぎ、時事問題が餘りによく解り過ぐ。過ぎたるは猶足らざるが如しとの諺は、適さに彼の場合に當てはめて最も妙味あり。

佐々は斯の如き人物なり。而して其專攻が德川文學といふ一事を聞くに至りて、殆んどいふべからざる味あるを覺えずんばあらず。德川文學と時事問題とは、一見

何等の關係を有せず。國語の知識と經世的識見とは、一見何等の關係を有せず。然れども其實は決して然るものにあらず。

凡そ人の智見と識量とは其人の天賦に因ること大なりと雖も、然かも亦學問の研究と修養とに依りて啓發擴大せらるゝものなること論を俟たず。智見養成の學問としては、哲學を推して第一となし、文學と歴史とを第二とす。第三は倫理、教育、社會學にして、法律經濟は第四位に居る。自然科學は純知識の學問なりと雖も、研究者其人に哲學的思想ある場合に限りて人の智見と識量とを涵養す。

如何に熱心に哲學を研究すとも、啻に哲學的知識のみを取つて、哲學的天才の思想を取らざる人は、智見の人たる事能はず。文學や歴史の研究に熱注すとも、啻に文字と事實のみを詮索するに止まりて、それが所藏する大精神大思想に觸るゝことを努めざる人は、識量の人たること能はざるなり。

政治學とは或意味に於て歴史なり。歴史とは或意味に於て英雄偉人傳なり。而して英雄偉人は取りも直さず、大思想、大精神なり。大思想、大精神が人間化したる者を英雄偉人といひ、學問化したるものを哲學、文學、歴史といふ。故に古今の英雄偉人にして哲學的、大思想を有せざるものなく、大哲學者、大文學者にして英雄偉人の襟懐大度を有せざるものなし。ジョン、スチワート、ミルは十九世の頭腦なりと稱せらる。而して其然る所以は、彼が政治經濟學に於て、科學的卓越の知識を有したるが爲にあらずして、寧ろ彼の哲學的、文學的大思想が、政治經濟學の根柢を一貫したるが故なり。グラッドストンは古今に冠絶せる大政治家也。然れども彼は法律經濟學の研究者に非ずして文學の研究者なりき。ヂスレリーも、ローズベリーも、熱心なる文學の研究者なりき。マコーレも詩人と歴史家とを兼ねたる人なりき。現代のジョン、モレーも文學者にして史傳記者を兼ねたる人なり。而して此等の人は皆な入つては宰相大臣、出でゝは政黨の首領、國家の運命を雙肩に擔へる偉人なり。斯の如きは眞個少數の例舉に過ぎず。我輩の淺學を以てするも、此外尚數十の多きを數へ得るを疑はざるなり。

筆は圖らずも岐路に入れり。然れどもこれ固より我輩の好奇の致す所にあらず。我輩は唯だ哲學、文學、歴史等の諸學が、著しく世人に其性質を誤解せられ居ることを一言し、偉人傑士とは切つても切られざる深緣あるものなることを一言せんが爲に、

遂に玆に說き及べるものに外ならず。

邦人動もすれば說をなして曰ふ。上田萬年は、國文學者なり。然るに彼は政治家的識見を有し、行政的手腕を有す。蓋し天下の奇蹟なりと。然れども我輩を以て見れば、斯の如き說をなす者こそ、實に天下の無識なり。その理由は以上述ぶる所に依りて明なりといふを以て足れりとせん。

上田に次で所謂天下の奇蹟に屬する人物は、芳賀矢一也。芳賀に次げるものは先づ頃物故せる藤岡作太郎なり。而して之に次げるものは、我輩の知れる範圍に於て、先づ指を醒雪佐々政一に屈せざるべからず。

此等の數者は、國語、國文の知識を有する以外に、文學的思想を有し、文學的思想を有するが故に、事物を總括して觀察し大局を打算する智見を有し、大局を見るの明を有するが故に、一度び言を發すれば、必ず經世家的色彩を帶び、專門の知識と相結合した る時に於て、靈氣を含む。

吉岡は頭腦明晰にして、大學時代の秀才なるが故に、知識としての國語を研究するには、十分の資格あり。然れども、國語を敎育に結び附けて研究し、此方面に於ける一流の大家とならんには、知識以外に智見あるを要し、今後の國民は如何に導くべきやといふ大問題に關して、政治家的一流の識見あることを要す。吉岡の今後最も修養努力を要すべき點は、前者よりも寧ろ後者にあるとを知らざるべからず。蓋し前者は絕えざる讀書に依りて、必ず或點迄到達し得るものなるに反し、後者は必ずしも讀書に依りてのみ修得し得らるゝものにあらざるが故なり。

若し夫れ、彼の進まんと思ふ所、我輩の勸むる所と全然反するものなりとせば、我輩の上來述べたる所は半ば無意味の空言に歸す。空言に歸するは我輩寸毫も厭はずと雖も、我敎育界に國語問題の一大家を加へ能はざる一事は、誠に痛惜に堪へざる所となす。

我輩曾て新聞記者たりし時、偶々國語問題に遭遇して、彌次馬の眞骨頂を演出す。何等の研究あるにあらず。何等の自信、定見あるにあらず。唯だ人が騷ぐ故に、自分も之に追ひて騷ぎたるに過ぎず。今より懷へば、寔に慚愧忸恥の念に堪へざるを覺ゆ。今西洋に來り、身親しく先進國の國語敎育を實察し、名家の言說を聞くに及んで、國語問題は『ソンナ物ジャーナイ』といふことを覺ると共に、愈々以て將來の大問題なる

ことに想到す。

一國の國語を人爲を以て急速に改良せんとするは根本的謬見なり。然れども之を全然自然の儘に放任するも亦非なり。慣用より來れる幾多の許容を是認するは非にあらずと雖も、許容を本體とするは斷じて許すべからず。殊に行政の力を以て新に許容を作り出すが如きは以ての外の不埒なり。

一國の國語は其國の文明と離るべからず。其國特有の國語を有せざることは、取りも直さず其國に特殊の文明なきの證左なり。特殊の文明なき國家は、人格なき個人の如く、人類社會に存在の必要なきものなり。國語は一國文明の標尺にして、之が複雜、豐富、優秀なると否とは、直ちに一國文明の程度を指示す。己の國語を重んぜざる國民は繁榮すること能はず。己の國語を卑しんで外國語を尊ぶ國民は、亡國の前兆を示す國民なり。これ歴史の教ゆる所なり。

國民教育に於ける國語は、諸教科の首位にあることを要するのみならず、又諸教科の中心たることを要す。國語教育さへ完全に施すことを得ば、修身科の如きは之を廢するも不可なし。教育上に於ける國語は、文字及言語としての教科たるを以て滿

足すべきにあらず。寧ろ其本體は精神科たるにあらざるべからず。國民思想も、道德も、歴史の眞髓も、國體の精華も、皆な擧つて此國語科に含蓄せられ、一國の有らゆる文明を歌へる崇高なる文學たるの性質を帶有せざるべからず。生硬未熟なる修身科の如きを以てして、何ぞ國民思想の根本を涵養することを得んや。形式的お談義風の教訓を以て、何すれぞ青年の思想感情に血と肉とを與へ得るものならんや。

是を以て我輩は敢て曰ふ。修身科は之を廢するも不可なし。其代り國語科をして生命ある教科たらしめよ。文學的性質を帶びたる精神教科たらしめよ。而して之に向つて全力を注ぎ、完全の效果を擧ぐることに努力せよと。

學習に困難なりといふが如き、浮薄の理由を以て、國語を變改せんとするは、大なる謬見なり。ローマ字を以て國語を綴らんとするは、更に〳〵根本的謬見なり。我輩曾てローマ字會に入會したることあり。今に至りて其淺見なりしを自白せずんばあらず。

國語問題は、決して區々たる教育上の一問題として見るべきに非ず。邦家及人類の文明的大問題なり。之が論議には彌次馬の關與するを許さず。研究なきもの、

論議を許さず。文明の何物たるを知らざるものゝ容喙を許さゞるなり。我輩は唯だ斯の如く確信す。然れども慨むらくは、己れに國語の專門知識を有せず、今後も亦永遠に之を有せざるべきが故に、將來如何に大問題湧起することあるも、己れ自ら之に發言すること能はざるとを。

茲に於てか、我輩は切に權威ある國語學者輩出の急務を感ず。これ吉岡に向つて此方面の大成を望んで已まざる所以なり。

若し我輩をして假りに彼の地位に在らしむれば、我輩は必ず國語學者にならん。將來に於ける國語問題解決者の一人たらんことを理想として進まん。國語の知識以外に、識量を有する人たらんことを目的として進まん。而して若し抽象の理想以外に、具體的標的を描くことの必要を感じたりとせば、我輩は恐らく芳賀矢一を標的に取らん。蓋し、上田は吉岡の性格よりすれば、餘りに飛び放れたる人物型に屬し、殆んど到達の見込なきを以てなり。

(六) 槇山榮次と生駒萬次

次に論ずべきは槇山榮次なり。彼は羽前の人、二十四年高等師範學校文科を卒業す。初め地方の師範學校、中學校等に歷任し、次で女子高等師範學校教授に轉じ、附屬小學校主事を兼ぬ。三十八年獨逸に留學し、歸朝後文部省視學官に任じて女子高等師範學教授を兼ぬ。

彼は天才にあらざるが故に、創思の人にあらず。經驗努力の人にして寡言溫厚の善人なり。親切なる先生なり。滿々たる覇氣も、縱橫の才略も、彼に於ては、毛頭之を求むべからず。されど教育に對する深大の趣味と兒童に對する豐富の同情とは之を有す。親切なる先生たる所以なり。

彼を以て瀨戸に比すれば、其性格思想は根本的別種の人物型に屬して、少しも類似の所を有せず。轉じて之を小泉、針塚に比するも、其人物型は著しく異なりて月鼈も啻ならず。更に之を幣原、吉岡に比す。固より全然同一の型に屬せずと雖も、然かも、亦多少の近似點あるを認めずんばあらず。

幣原は修養努力の人なり。槇山は經驗努力の人なり。吉岡は寡言謹愼の人なり。槇山は寡言溫厚の人也。幣原には君子の面影あり、槇山には善人の態度あり。吉岡には中正中和の美德あり、槇山には親切なる先生の風神あり。其性格は和平純良に

して、進擊的、奮鬪的の人にあらざる點に於て、三者は全く同一なり。其思想は健全にして醇美なれども、剛健の氣象と一種の氣魄とに乏しき點に於ても、三者略ぼ同一線上にあり。其人に接するや春風駘蕩草木の董ずるが如きものありと雖も、未だ氣焰萬丈懦夫をして起たしむるの概あらず。諄々として己の意見を反覆說明すれども、博辯滔々、時弊を痛說するの趣きを缺ける點に於ても、三者は稍々相似たる所あり。才子の型にあらず、手腕の人にあらず、氣才俊敏の人にあらざる點に於ても、三者は酷似の體相を具へたりと謂ふべし。然りと雖も、此三者は決して全然同一模型の人物にはあらず。差異點を求むる、固より難きにあらざるなり。

幣原の努力は、學問の研究以外、性格言動の鍛錬にも及ぶ。故に努力の上に修養の二字を附して形容す。横山は己の性行鍛錬を等閑に附する人に非ざるは勿論なりと雖も、其努力の主要部は擧げて之を學說の研究と實務の修得とに集注す。彼は教育上の學理を如何にして實際に行ふべきやを研究すると共に、多年の豐富なる經驗より歸納して、教育の實際行爲に學理的說明を加へんことに主力を傾注す。故に彼の努力は經驗と連結して形容せらるべき性質を帶ぶ。幣原は修養に努力して、今やりたりと雖も、其天分に於ては、多少の主角を有し、才氣に於ても、恐らくは横山以上ならん。横山は外貌頗る無愛嬌にして常に立腹し居れるが如き、表象を有すと雖も、其内心は全然反對にして柔和なり。故に主角を有せざるなり。

横山は平素鍼默に加ふるに、無愛相の外貌を以てするが故に、一見沈鬱なるが如しと雖も、宴席に於ては案外快活にして、思掛けなき氣焰を吐くことあり。少くとも吉岡以上なること疑ふべからず。是に由つて見れば、彼は天分に於ては、吉岡以上の快活を有するにはあらざるか。然れども斷じて隱險の人にあらざることは兩者全く同一なるを認めずんばあらず。

吉岡は明治九年の生にして、當年取つて三十四歳、何處かに世故馴れざる處女味を有するは奇しむに足らず。横山は慶應三年の生にして、當年は四十四歳、吉岡に比して十年の年長なり。處女味を通り越して、先生臭を帶ぶるは當然なり。殊に彼が多年地方の師範及中學等に教諭及校長たりしは、彼をして一層先生らしき人たらしめたるものと謂ふべきなり。

槇山は教育學が專攻なりと雖も、教育の原理を說くは彼の長所にあらず。彼の得意の壇場は教授法なり。殊に學理と實際とを照合し、自己の經驗に基いて、之が適用法を論ずる所に於て、最も光彩を放つ。彼は講演に於ても、著書に於ても極言せず、酷論せず、常に眞理を中間に求めんとして左右を顧慮す。誇張を斥け、矯激を避け、情理併せ行りて急迫ならざらんとする所、其見地の常識の上にあるを認むと雖も、其歸納は豐富の經驗複雜の前提より來るが故に、其說述の極めて懇切精密なるに拘はらず決論は往々にして朦朧に陷ることあるを免れず。

然りと雖も兎も角、教授法に於ては、本邦有數の學者なり。初等教育に關しては、文部省内のオーソリチーなり。此點に於ては流石の小泉又一も、槇山に對して一歩を讓らざること能はざるなり。

小泉が高等師範學校を卒業したるは、二十年にして槇山に先つこと四年なり。其年齡に於ても槇山に比すれば、二年の年長にして當年四十六歲なり。其經歷に於ても、小泉は槇山の上にあり。普通教育全體に亙りて豐富なる經驗を有する點に於ても、其總量に於ては、決して槇山に讓らず。然れ共單に初等教育に就てのみいへば、其研究の分量に於て、小泉は到底槇山に及ばず。況んや教授法の知識に於てをや。小泉の長所と本領とは此に非ずして自ら他にあり。此點に於て彼が槇山に及ばざることは、毫末も彼の人物價値を上下する資とはならざるなり。

小泉既に此點に於て槇山に及ばずとせば、他に匹敵すべきものなきは言はずして明かなり。これ槇山が此方面のオーソリチーたる所以なり。

然り、彼は初等教育と教授法の知識とに於ては、省内切つての大家なり。然れども、これ以上のことに就て、彼に多くを望まんとするは大なる誤りなり。國家教育の全般に亙りて總括的意見を立て、行政家的見地に立ちて大綱を論じ、部門の精透以外に、大局を洞觀する智見に至りては、槇山に於て遂に多くを望むべからざるなり。此に至れば、舞臺は一轉して、小泉又一の壇場となる。造物主配合の妙按を察すべきなり。

槇山は師範學校時代に於て、今の宮城縣知事森正、及佛國大使館一等書記官法學博士安達峯一郎と同窓なりしといふ。森は槇山より少し先輩、安達は槇山より少し後輩にして、師範學校卒業後司法省法律學校に入學し、遂に今日に至れるものなりと聞く。當時安達は槇山に勸むるに、己れと同一の進程を取るべきを以てしたりと雖も、

槇山は之に應ぜずして決然教育界に留まりしなりといふ。彼が友人の勸誘に應ぜざりしは、當時既に教育といふことに對して、確乎たる信念と崇高なる道念とを有し居たるが爲なるや否やは頗る疑はしと雖も、兎も角、當時に於ても教育といふものに對して、十分の趣味を感じ居たるべきことだけは、今より見て之を認むるに難からざるなり。

若し道學的眼を以て批判せば、教育を以て自己の天職なりと覺り、教育を人生無上の榮職なりとする信念を以て從事するものにあらざれば、未だ眞の理想的教育家とするに足らざるべし。然れども、眞に教育に熱注し、實際に當りて工夫を凝らし、最もよく教育の效果を收むるものは、趣味に依りて從事する教育家を以て第一となし、所謂道念教育家も三舍をさくること比々。想ふに槇山は趣味の教育家なり。趣味の教育家なるが故に、利祿名聞を離れて教育を觀、愉快を以て教育に從事するの態度を有す。今や彼の同窓、森、安達の數者は、世間的意義に於て、彼れ以上に榮達すること數等なりと雖も、彼は此等同窓の發展を見て少しも羨しとは思はざるべし。當時安達の勸誘に應じ居たりせば、自分も今はアノ位の地位になり居るものを、惜しきことしてけりとは、夢にも思はざるべし。何となれば、彼は己の榮達を計らんが爲に、教育家となりしにあらずして、己の趣味を滿足せしめん爲に教育家となりたるものなるが故なり。

均しく教育といふ中にありても、初等教育と中等教育とは大に違ひ、中等教育と高等教育とは大々的に違ふ。而して總べての教育中にありて最も興味あるもの、換言すれば教育中の教育たる所は、初等教育を措いて他に求むべからざるなり。故に教育に趣味を有するものは、他級の教育よりも寧ろ初等教育を選ぶ、これ必然の理數なり。而して槇山榮次は初等教育の研究者なり、有數の大家なり。彼が趣味の教育家たるは益々明かなり。

彼は高等師範學校に在りては、今の東京市教育課長戸野周二郎と同級たりき。頭腦の明晰なる點よりいへば戸野は槇山の上にあり。然れども教育に對する趣味の濃厚なる點に於ては、戸野は固より槇山の敵にあらず。

戸野は何れかといへば、小泉型に屬する人物にして手腕の人なり。度胸据わりて他評に動かず、圖々しくて喰へざる點は寧ろ小泉以上なり。小泉は強よさうに見え

ても割合神經質の所あり。圖々しき中にも何處かに可愛らしき所あり。戸野には可愛らしき分子は殆んどなし。

槇山は此兩者に比すれば全然別種の模型なり。彼は徹頭徹尾親切なる先生にして、先生以外の人には斷じてあらず。彼れ若し師範時代に安達の勸誘に應じ居たりとするも、其達する所は多寡の知れたるものにして、恐らくは森安達等に雁行する地位にはなり居らざらん。單に官等と俸給の點のみよりいへば、或は今日の彼れ以上の地位に昇り居るやも知れず。然れども其地位たるや、彼に取つて決して安定のものにあらず、幸福のものにあらず。恐らくは不遇を伴へる逆境の地位たらん。彼の今日の地位は、官等と俸給の點より云へば、殆んど御話しにならず。然れども其地位には安定ありて幸福を伴ひ、法律上の待遇以外に無形の名聲を有す。槇山榮次といへば全國の教育家中、一人として之を知らざるものなく、殊に初等教育界の或部に於ては、殆んど偶像の如く彼を崇拜す。物質上の地位高からずとするも、亦大に心を安んずるに足る　而して斯の如き名聲と斯の如き無形上の成功とは、彼が他社會に身を投じて、終に贏ち得る所にあらざるなり。

啻に他社會に身を投じて贏ち得る所にあらざるのみならず、教育界の中にありても、初等教育以外に身を委ね居たらんには、彼は決して今日の如くなり能はざりしは殆んど疑を容れざる所なり。何となれば、彼は創見の大學者たる天分の大頭腦を有せざるが故に、專門學校以上に於ける第一流の教授たること能はず。統率の手腕を有せざるが故に、明校長たること能はず。縱横の策略と谿達の融通とを有せざるが故に教育行政家たること能はざるが故なり。

凡そ一口に教育家と稱する中にも、自ら二種の模型あることを知らざるべからず。即ち其一は先天的の教育家とも稱すべきものにして、天生同情に富み、兒童を愛し、其渾身は熱誠と親切とを以て充滿し、唯だ教育あることを知りて、其他を知らず、教育の爲には己の身命を犧牲に供するも敢て厭はざる底の人、我國の現在に著名の例を求むれば、小西信八の如きは此タイプに屬するものなり。

其二は才幹もあり、識見機略もあり。天生の教育家には非ざれども教育の尊貴を知り、教育以外の社會に出づるも必ず相當の成功を收むべき確信と素質とを有すと雖も、より多く教育に愉快を感じ、相當に野心と功名心とを有し、風雲の氣も多少なき

にあらずと雖も、然かも之が爲に教育界を去る程に教育に冷淡ならず、一生の部分を教育に捧ぐと雖も其眼は常に教育以外の社會にも及び、一方に善良なる教育家の態度を有する外に、一般社會に對しても識者たるの地位勢力を有し、己の學校の改善進歩に熱注する以外、常に國家教育の全般に亙りて眼を注き、大體の傾向を捕へて全國の教育界を提撕する底の人、即ち是れなり。二者共に緊要不可缺の教育家にして、一を取りて他を捨つべきにあらず。前者は之を親切なる先生と謂ひ、後者は之を經世家的又は政治家的教育家と謂ふ。

而して槇山榮次は親切なる先生なり。後者の型に篏まる人にあらずして、前者のタイプに屬する人なり。

彼の衣貌の質素なるを見よ、其風神の溫厚なるを見よ。其態度の平和なるを見よ。當さにこれ天生の教育家が有する心理の表現にあらずや。而して其言語の平坦渾然たる間に、何となく惻然として慟むが如き音響を聞くことあるは、是れ豈胸中の奥祕に於て同情の琴線を彈ずるが爲にあらずや。我輩は彼を見る毎に、我が文部省に一個得易からざる天生の教育家あるを喜ぶと共に、彼が他の誘惑に陷らずして、自己本然の天分を全うし得たるは、彼の爲に無上の幸福なりしを祝して止まざるなり。

槇山の次に論ずべきは、生駒萬次なれども、我輩彼を知らず。茲に論じ能はざるを憾みとなす。若し内地に在つて此一篇を起草するものたらしめば、我輩は、如何なる方法を取るとも、必ず相當の評論を加へ得ん。然れども今は萬事休す。知らざるを正直に知らずと告白して冑を脱ぎ、茲に彼の略歴を記して敬意を表す。

彼は紀伊の人、三十五年の高等師範學校卒業にして理化學が專門なり。卒業後は母校に殘りて附屬中學に數學科を擔任し、三十一年數學及其教授法研究の爲め獨逸に留學し三十五年歸朝す。直ちに教授に進み、四十一年文部視學官に轉じ以て現今に至る。

(七) 服部教一と吉武榮之助

然らば服部教一は如何。彼は奈良縣の人、三十二年高等師範學校理學科を卒業し、直ちに福岡縣師範學校教諭となり、翌年高等師範學校の研究科に入り主として法制經濟を研究し、卒業後高等文官試驗に合格す。暫く普通學務局第三課長の職にあり、三十七年教育行政研究の爲に歐米に留學し、四十一年歸朝して、視學官となり、現今に

至る。

彼は熱進、奮進、猛進の人にして、猪武者なり。馬車馬的突進の人にして、側に溝あり、前に橋あることを寸毫も頓着せざる人なり。曲線美は彼に於て寸分も之を認むることと能ず、全身悉くこれ直線の集合なり。

如何に險阻急勾の坂峙と雖も、一度び彼をして之に向はしむれば、麓下より絶頂を望んで、假想の一直線を描き、此一直線に沿うて遮二無二攀登す。而かも其傍に一の通路あり、旋回、屈曲の煩はこれありとするも、兎も角、安全、靜平に身體を保ちて絶頂に達する行路なり。常人は之を選びて徐々進行す。服部は然らず、彼は斯の如き通路あるや否やを眼中に置かず。驀直に荆棘林中を突進す。人見て之を暴となし、彼を諫むるに、權道の危險なるを以てし、勞多くして却つて其效少きを以てす。然れども彼は之を聞くこと風馬牛の如く、唯だ己れの信ずるが儘に行動す。又一個の奇男兒なり。

彼は高等師範時代に於て、乙竹岩造と同期なり。乙竹は首席の優等を以て卒業し、彼は確か三席か四席の成績を以て卒業したりと記憶す。乙竹は卒業後本校に殘り、彼は地方に出づ。乙竹は間もなく西洋に留學し、歸朝して視學官となり、次で母校の教授に轉ず。其間何等の奇なく、何等の變なく、平々坦々として常人の通路を進み來れるに過ぎず。彼は稍々之と趣きを異にする行程を有す。彼は理科の出身なるが故に、教育行政とは餘程緣遠き出發點を有す。然るに彼が卒業して福岡縣の師範學校に職を奉ずるや、俄かに心機一轉して、法制研究の志を起し、職を辭して母校の研究科に入る。研究科に在るの時、私かに行政官に轉ずるの志を起し、高等文官試驗通過を目標として突進す。而して遂に之を贏得して文部屬となる。次で教育行政研究の任を以て西洋に留學を命ぜらるゝや、三年の留學費を以て四年と四箇月を支へ、歸朝して視學官となり、多年の志初めて成る。然れども、退いて其行程を見れば、初めと終りとの間に何等の連絡なきのみならず、其中途に於ては、奇峭峻巖、兀々として聳ゆるものあり。到底萬人向きの道にあらざるは論を俟たず。

彼の今日の地位は、疑もなく彼の馬車馬的猛進に原因するものなりと雖も、然かも今日以上の發展の頗る困難なることも、亦彼の馬車的猪勇の性格に基因することを認めずんばあらず。馬車馬は小距離の前方は之を見ること得と雖も、左右及後部は

少しも見ること能はず。左右及後部を見ること能はざるものは、人の長となり、部下を統率すること能ふものにあらず。一生御者の手綱に制御せられて、右に行き左に曲り、營々として勞役に服すと雖も、其結果は唯だ、長い間、人間樣に御奉公をなしたりといふ一事に過ぎず。よしや、如何程の駿馬なりとするも、馬は何處迄も馬にして、遂に人間樣の階級に進むこと能はざるを如何せん。若し御者をして馬と角鬪せしめんか、一騎打の力量に於て、御者は到底馬に及ばず。一蹴の下に半死半生の憂目に會はん。

是を以て馬は私かに己れの力量強きに誇り、御者の力量遙かに己れに劣れるを笑ひ、高慢顏に高臺に座を占めて、己を使役せんとする態度を矛循の甚だしきものなりと思惟するやも知れず。

然れども、御者は力量以外に、智慧を有し、左右前後の關係や、通路の障害有無を察して、巧みに馬車を前進せしむるの智見を有す。是を以て己れ自らは、馬車を引曳するだけの力量を有せずと雖も、馬をして之を引曳せしむるの任に堪ふ。御者の後ろの車室内に泰然座を占めて、シガーを吹かしつゝある主人公は、硝子窓を透かして此兩者を眺め、『馬は力量あれども、二頭にても四頭六頭にても、優に之を縱横し得るの識量を有す。一騎打には負けても矢張り御者の方が上は手なり』と思惟せん。斯の如きは極端の例、我輩固より服部を認めて馬車の馬なりと斷言するものにあらず。我輩は唯だ人は奮進といふ勇氣以外に或物を有し、知るといふこと以上に或物を有せざれば、到底大なる成功を收むべきものにあらざることを說かんが爲に、言遂に茲に至れるものに外ならざるなり。

服部は、三四席の所にて卒業したるが故に、成績は決して惡しき方にはあらず。寧ろ上の部に入るべきこと論を俟たず。而して其出身の理科なるにも拘はらず、一度志を起すや、間もなく高等文官試驗に及第し得たるほどなれば、其頭腦も亦決して不透明の方にはあらず。然れども亦決して明晰といふほどにもあらざるなり。少くとも乙竹に比すれば大に劣る。而して其才氣に於ては、殆んど比較の限りにあらず。

乙竹は何といつても才物なり。彼の人格は未だ固まつて居らずといふが如き、評を聞くことありと雖も、兎も角、高師出身者中の優物なり。得易からざる秀才なり。頭腦明晰なる上に、人一倍の熱心あり。殊に才氣に於て最も長ず。彼に憂ふべきは、

才氣有り餘つて、常に之を使ひ過ぎる傾きあるにあり。彼にして若し將來大成することを能はずとせば、そは彼の頭腦の惡しきが爲にはあらで、彼が己の才に負けたるが爲なり。

服部は稍々之と趣を異にす。彼は頭腦明晰といふ方にあらざると共に、才子といふ程の才氣も有し居らず。彼は徹頭徹尾奮進の人にして、友人の勸告も、他人との附き合も、周圍の事情も、此等のもの一切を閑却して、唯だ己れの思ふ儘に行動し、突進して今日に至れる人なり。彼が高等師範學校を上の部で卒業したるも奮進の結果なり。高等文官試驗に及第したるも奮進の結果なり。歐米の教育行政及社會教育に關する事項を殆んど無盡藏の如くに知り居れるも奮進の結果なり。彼は實に奮進の權化なり。

我輩嘗て文官岡田に向つて『文部省中社會教育をよく調査し居れる人は何人なりや』と問ふ。岡田言下に答へて『服部なり』といふ。我輩當時未だ服部に對して十分の注意を拂ひ居らざりしが故に、彼の人物をよく知らず、從つて其調査に關しても多くの敬意を拂ふに至らず。心中密かに『多寡の知れたものならん』位に思ひ居たり。然るに其後彼の人物性格を注意するに至りて大に興味を感じ、更に彼の演說及雜誌に出でたる文章を數次見聞するに及びて、其調査の精密なるに驚き、自ら西洋に來りて其の實際を見るに及んで、彼の調査の愈々只物ならざるに敬服し、今日に於ては、彼を認めて日本開闢以來の留學生(教育の方面に於て)となすも、決して過賞にあらざるを信じ居れり。其精しきこと、細かきこと殆んど形容以上にして唯だ『よくもアー迄調べたものだ』と感嘆するの外はなし。例へば大英博物館には書籍數が幾何あつて、總面積が幾坪あり、書棚の數は幾個で、其の配置法と書籍の出入保存法はこれ〳〵、經費は幾何、年々の購入書數は大凡幾冊にして日々の閲覽者は平均幾百人、維持法は如何、利用法は如何、臺帳の作り方はこれ〳〵、索引の體裁は斯く〳〵、係員が幾人居つて其中一人は禿頭の老人で、入口の開き戸には指頭大の破損所が二ヶ所ありしといふが如き類なり。

然らば彼は如何にして、斯の如く精細に調査を遂げたるや。之が尋究は卽がて彼の人物を想見する所以たらずんばあらず。

彼は三年の留學費を以て四年と四ヶ月を支へたることは、前既に述べたるが如し。

此一事最も興味あることゝなす。彼は日本を去る時、獨逸船の三等に乘りて二等に乘らざりき。此時彼の胸中には既に三年にして歸朝せざるの決心ありしを疑はず。既にして彼れ歐洲に到るや、殆んど家根裏に頭の衝かへるやうな、最上階の穢しき一室を借りて、自炊生活を營み、讀書と實地視察とに全力を集注して他を知らず。酒も飲まず、煙草も喫はず、其他の娯樂も一切取らず。在留邦人との往來も固より爲さず。唯だ營々として、己の思ふ所に勞役す。食事の如きも、パンと水とのみにて堪へ忍びしこと敢て珍らしからざるべし。一年經つても文部省に報告書一篇だも送らず、二年經ても何等の報告をなさず。留學期將に終へんとする時に至りては、報告はさて措き、友人知己に對する消息さへも殆どなさず。滿三年を經過するも歸朝の模樣は更に見えず。文部省一書を飛ばして、歸朝の命令を彼に嚴達するも何等の返事だになし。文部省聊か持て餘まし、大使館に依囑して『一日も早く歸朝すべき樣御諭し相成度』といふ。大使館之に答へて『貴省留學生服部敎一の居所は如何に探索するも判明せず、故に貴命を傳ふるに由なく候』といふ。此回答に接せる文部省は大に服部の所爲を不興に思ひたりと雖も、さればとて如何ともすること能はず、遂に其

儘放任す。而かも四年餘を經過したる時、居所不明なりし服部敎一は米國を廻はりてキヨロリと歸朝す。文部省命令違犯を咎めて其理由を質す。服部卽ち之に答へて曰く『當時小官疾病に罹り、當に歸朝すること能はざりしのみならず、居所屆出をなすことすら能はず、不本意の儘に時日を過ごす。爾來快復を見るに至りたりと雖も、尙ほ轉地療養をなすの必要あり。醫師の勸告に從ひて諸所を轉々す。故に一定の居所を有せず、從つて歸朝の時迄屆出をなすこと能はざりしなり』と。文部省固より其口實に過ぎざることを知ると雖も、『病氣なりき』と言ひ張るものを罰することも出來ず、其儘寬恕して視學官に任ず。

彼の行動の常人の軌道外なること、概ね斯の如し。文部省の都合が如何あらうが、他人が如何に評しやうが、そんなことはテンデ、彼の眼中に存せざる所なり。彼は唯だ己れの思ふやうに奮進し、欲する儘に行動すれば、それにて彼の滿足は充されたるなり。彼の調査の精密なるも、材料豐富にして、殆んど無盡藏なるも、畢竟、留學中に彼の固有の性格を極度迄發揮したるが爲に外ならず。

我輩の將に西洋に來らんとする時、偶々文部省祕書官室に於て彼と會す。我輩彼

に問ふに、『眞劍懸價なき所、歐羅巴の生活費は略ぼ幾何にて宜しきや』を以てす。彼れ之に對して、『獨逸ならば月五十圓、英國ならば月百圓、自炊すれば今少し廉くて濟む』と答へ、其『自炊すれば』の一語を頗る無造作にいふ。數日の後、同所に於て、針塚に遭ひ、服部に尋ねたると同一の問を以て彼の意見を聞く、針塚卽ち之に答へて『最低級の書生々活を營むとして獨逸ならば月百圓、英國ならば月百五十圓、孰れにしても稅關研究は一度も出來ず』といひて破顏一笑す。我輩之を聞いて、兩者の留學中に於ける生活狀態を油然として腦裡に浮べたると共に、此短き談片の中に、兩者の性格人物が、躍然として活現せることを想はずんばあらざりき。

服部は斯の如き人物なり。尊大自ら高うする性癖は寸分も之を有せずと雖も、自分の思ひ通りに行動し、他との調和等を眼中に置かざる點は、疑もなく獨自一己なり。獨自一己なるが故に、己れの志す所に奮進し唯だ『知る』といふ一事に於て、從來の留學生のレコードを突破し得たるなり。

然り、彼は實にレコード破りなり。敎育行政と社會敎育とに關する歐米の實際事情に精通する點に於ては、恐らくは彼れ本邦の第一者ならん。然れども彼は唯だ『知る』だけの人物なり。『知る』といふこと以上には何物も有せざる人なり。經世の識見も、行政的の智見も、統括の手腕も、彼に於ては寸分も見ること能はざるなり。

想ふに彼は善良なる調査委員なり。調査委員としては殆んど理想的人物なり。然れども調査委員以上の人物には斷じてあらざるなり。調査委員の提供せる材料に依りて、事を計畫し、天下の大勢を達觀しつゝ、施政をなすの人には斷じてあらざるなり。少くとも現在の性格と修養方法とを根柢より革新し、全然生れ代つた人物たらんことに努力すること、凡そ二十年を經ざれば、調査委員以上の人が有する或物を具ふる人物となり能はざる人なるを認めずんばあらず。

それにしても、天の配劑は寔に妙中の妙を極む。若し小泉又一をして服部ほどの材料を持たしめんか、彼は恐らく省內の上下を振憾させん。而して若し服部敎一をして、小泉ほどの才幹手腕を持たしめんか、彼は實に鬼に鐵棒の人とならん。然れども天は遂に之を一身に具有せしめず、兩分して其一半宛を二人に享有せしむ。憾まずんばあらず。

服部は高等文官免狀を有すと雖も、其前途は決して樂觀すべきにあらず。視學官

より轉じて書記官參事官となるは恐らくは難からん。況んや局長たるに於てをや。然れども是を以て直ちに省内に學閥あるが爲なりといふこと勿れ。學閥の有無は我輩之を知らず。假りに多少これありとするも、之が爲に人材の昇進を阻止するほど强力のものには斷じてあらず。陋劣の情實に驅られて、有爲の人材を見殺しにするほど、今の文部省は頑冥固陋のものには斷じてあらず。要は本人の實力にあり、實價にあり。本人に實力才幹あらば、出身校の如何に拘らず、上司は決して之を見棄つるものにあらざるなり。

書記官、參事官は、法制上よりいへば、單純なる事務官に過ぎず。然れども其上位にある少數のものには、單純なる事務官の才以外に、計畫の才を要し、事物を打算するの識見を要す。而して局長になれば此等のもの以外に、更に包括的識力と政治家的手腕とを要す。次官は法制の如何に拘はらず、事實に於ては、純然たる政務官なれば、茲に說明の要なし。

然るに今服部を見る。彼は此等の諸點に於て、頗る不充分の素質を有す。我輩彼の爲に痛嘆三番せざるを得ざるなり。

彼れ今にして大に、頓悟、方向を一轉し、人物を根本より改築するに努めずんば、彼の一生は恐らくは調査委員を以て終らん。啻に書記官、參事官たり得ざるのみならず、視學官としても恐らくは、第一流たること不可能ならん。視學官は法制上よりいへば、地位低し。然れども此不條理は早晩矯救せられて參事官と同等のものとなるべきは殆んど疑を容れず。假りに萬一其事なかりしとするも、精神的意義に於ては、其地位極めて高く、茲に人材を有すると否とは、直ちに一國教育の盛衰に關係し、其責任の重大なるとは、書記官、參事官のそれに比するも、決して劣る者にあらざるなり。見よ、英國のマッシュー、アーノルドを、彼が千八百五十二年より同八十二年に亙りて、英蘭及ウエルスの教育を視察考覈し、其都度一冊の報告書をも綴て Royal Commission（後には文部省）に提出するや、英國の有力階級は、愕然として其睡りより醒め、今更の如くに自國國民教育の不完全なるに驚きたると共に、如何なる困難を排しても之を改善進歩せしめざるべからずとの輿論を生じ、樞密院の問題となり、政府の政綱となり、遂に國民的大問題となりて、教育上に一大革命を惹き起せり。而して其間又彼が佛蘭西、和蘭陀、スキッツランド、伊太利等の教育視察に派遣せらるゝや、歸つて一大報告書

を綴り、其卷頭第一に於て『汝の中等教育を組織せよ』(Organize your Secondary Education)と喝破せり。茲に於てか、英國の輿論は又彼のいふが儘に形成せられ、曾に中等教育に於てのみならず、普通教育の全般に亙りて、制度、內容共大々的の進歩改善を遂ぐるに至れりき。英國は先進國なりと雖も、普通教育が稍々組織的の體系を具ふるに至りたるは、今より約四十年前のことにして、本邦のそれと相距ること遠からず。四十年前の英國教育は、所謂寺小屋式の教育にして、現代的意義に於ける國民教育は未だ存在する所にあらざりき。斯の時に當りて、マッシュー、アーノルド忽焉として天下に現出し、透徹の觀察眼を以て、英國教育の缺陷短所を爬羅剔抉し、警々駭々の筆鋒を用ゐて、堂々の論を立つ。經世に志あるもの、爭で之に耳を藉さゞらんや。

果せるかな、彼の言ふ所は着々として實現せられ、彼の立言は多大の敬意を以て當路に採用せられ、遂に今日の英國教育の基礎を置くに至れりき。勿論、天下の事は、如何なる場合と雖も、功を一人に歸すべきにあらず。英國今日の普通教育を認めて、之を一人のマッシュー、アーノルドの賜なりと斷定するの不當なるは、固より論を俟たず。然りと雖も、國民の多數が未だ之を覺らず、政治家も未だ心附かざる時に當りて、彼れ一人敢然起つて天下に呼號す。局面展開、機運促進の功ありしは、何人も否認し能はざる所、近代英國教育の恩人なりといはるゝも、決して過當の賞辭にあらず。彼れ死して以來、今や既に二十二年、其肉體は夙くに土灰に化したりと雖も、彼の精神は永へに英國の教育界に承繼せられ、彼の名は兒童走卒の口頭にも上るのみならず、殆んど全世界の教育界に喧傳せらる。

斯の如き偉大の人物は抑も如何なる地位にありたるや。彼は實に一個の視學官に過ぎざりしなり。彼は死する迄文部省視學官の地位にありて、一方には大臣以下の施政者に立言し、獻策し、他方には絶えず、英蘭及ウエルスの教育家を指導提撕することに努めたり。彼の地位經歷は唯だこれのみ。これ以外、何物も有せざるなり。然れども、彼の英國教育に遺せる功勞は卽ち大、大臣のそれを以てするも及ばず。況んやそれ以下をや。

我輩彼の報告書を讀みて、其人物を想見するに、彼は疑もなく、一個の大詩人なり。其觀察の精到にして、微細の點迄眼光の透徹し居るのみならず、其等を總括して更に一大鐵案を下し、輕微の事實に基いて、異常の大眞理を推論し、斷定し居るあたりは、確

かに詩人の面影を有する人物なり。彼が詩を作りたるや否やは、文學の門外漢たる我輩の確知する所にあらず。然れども若し彼をして詩人文學者たらしめたらんには、彼れ必ずや成功し居たりしならん。加之、彼は又驚くべき經世眼を具へたり。彼の教育を視察するや、唯だ有りの儘の事實を知るのみにて滿足せず、必ず斯くあらざるべからずとの結論を附す。而して其結論たるや、必ず經世的、警世的經綸の音調を帶びて、大政治家が國務を談ずるの態度を有す。詩人的觀察眼と政治的識見とを結合し、更に教育上の特別知識を點綴したるもの、これ卽ちマッシュー、アーノルドの本體にして、英國教育を一新せしめたる所以ならん。

斯の如きは、我輩のアーノルド觀なり。當らずと雖も、遠からずと信ず。少くとも彼は調査委員的の人物には斷じてあらざりき。調査委員的の人物にあらざるが故に、徒らに人に使役せられたる痕跡微塵ほども存せず。身は視學官の微職にありと雖も、精神的の意義に於ては、却つて大臣以下の上司を使役するの實を擧げたりき。上司を使役するほどの大人物なるが故に、大臣の命令を誤つて下に傳ふるが如きこと曾て一度もあらざりき。英國には所謂勅語なるもの存せざるが故に、彼が視學官たりし當時、教育勅語の奉讀を學校兒童に屬行せしめよといふが如き命令を大臣より受領したることあらざるは明白なり。然れども彼が陛下の視學官（Her Majesty's Inspector）として數次地方に出張したる間には、或は詔勅の旨趣を學校に傳へよといふが如き命令を受領したることなしとも限らず。受領したることありしとするも、彼は直ちに大臣の命令を其儘鸚鵡がへしに下に傳へて、到る所勅語の諳誦を皷吹して廻るが如き滑稽は演ぜざりき。彼が大臣の命令を受くるや、其精神を吸みて、其言語を取らず。大臣が假令如何なる言語を使用して命令を下すとも、其口吻に拘泥して命令の精神を沒却するが如き頓馬は曾て演じたることあらざりき。

我輩は服部が勅語の諳誦を奬勵したりといふ事實を聞かず。從つて上來述べたる所は、寸毫も彼に對する諷刺を意味するものにはあらざるなり。然れども、罷り違へば、斯の如き滑稽をやり兼ねまじき素質を有す。此點に於ては吉岡もまた多少の危險を有す。吉岡は天品大に麗しく、將來十分に發達する素質を有すると雖も、現在に於ては年齡未だ若く、世故馴れざる所あるに加へて、天生餘りに忠實の念に富むが故に、ヒョットすると大臣の命令を履き違ふることなしとも限らざるなり。

服部が將來書記官、參事官になり能はずとするも、我輩は決して之を彼の爲に惜しまず。何となれば視學官の職責は決して書記官、參事官のそれに劣らず、本人の識見手腕の如何に依りてはアーノルドの如き、大勳功を遺すことも出來得るものなるが故なり。而して我輩は又服部に對してアーノルドの如き世界的大視學官たれとはいはず。何となれば斯の如きは天才にあらざるものゝ企及し能ふ所にあらざるが故なり。然れども、彼が、少くとも本邦第一流の良視學官たらんとして努力せんことは、我輩の切に望んで已まざる所なり。

第一流の良視學官たるには、唯だ『知る』といふこと以外に或物を有するを要す。調査委員的才幹以上に、或物を有するを要す。然るに現在の服部は、此等の或物を有すること餘りに貧弱なり。これ我輩が彼を認めて、調査委員を以て一生を終る人にあらずやと憂ふる所以なり。

調査委員は、材料の供給者なり。材料の供給者は、人に使はるゝものなり。人に使はるゝものは、個人の利害より云へば、決して幸福のものにあらず。然れども之を國家よりいへば、實に緊要不可缺のものなり。

凡そ近代の國家は、其性質純然たる有機團體にして、行政組織は科學的なり。而して其施設は精確なる統計と精密なる調査より成る。故に如何なる大人物と雖も、事務に精通せずして施政をなすこと能はず。統計を無視して大勢を打算すること能はず。調査を遂げずして行政をなすこと能はざるなり。茲に於てか、普通の政治家以外に、專門の事務官を要し、一般的行政官以外に、テクニックの調査委員を要す。調査委員なくしては、近代の國家は一日も統治權の運用を全ふすること能はざるなり。

而して今服部を見る、彼は行政官としても缺點あり、視學官として第一流たることは頗る難し。然れども調査委員としては、殆んど天下無雙の人物にして、理想的素質を有す。此意味に於て彼は、文部省に缺ぐべからざる人物なり。然ひに大勢を云爲する牛熟の似而非政治家よりも有要なること遙に勝る。彼に大局を見るの明なしとするも、之が爲に彼の存在價値は寸分たも影響せらる者にあらず。彼が一個有能の缺ぐべからざる人材たることは、何人と雖も之を認むるに躊躇せざるなり。漫りに野心を起すこと勿れ、純行政官に轉ぜんことを望むこと勿れ、唯だ己れ天賦の長所を他く迄發揮し盡くさんとに向つて、奮進せよ。一般行政官たるべき人は他に幾何もあ

り。されど天下無雙の調査委員は他に懸け代へあらざるなり。

最後に評すべきは吉武榮之助なれども、慨らくは我輩は未だ彼を知らず。知らざるに於ては生駒以上なり。茲に略歴を記して敬意を表すること生駒の例に倣はん。彼は長野縣松本の人、『明治十七年化學科を卒業せる理學士なり。初め中學校、師範學校等の教諭に歴任し、次で東京工業學校教授に任ず。三十二年獨英に留學し、三年の後歸朝して、原職に復し、更に視學官に任命せらる。

(八) 結論

之を要するに、今の文部省視學官は、大體に於て其人を得たりといふを憚らず。少くとも五年前のそれに比すれば、遙かに優るものあるを疑はず。以前の視學官は知識技能よりも寧ろ其人の經歴に重きを置きたるもの〻如く、今の視學官は經歴よりも寧ろ才能を標準として人選したるやの觀あるを認めずんばあらず。故に以前の視學官は、多くは頭が禿げて、何處となく勿體らしき所ありし代りに新知識に乏しく地方教育家を指導する實力に遺憾を感じたり。今の視學官は多くは新進氣鋭の人材なるが故に、莊重威嚴の德に乏しき感ある代りに、新知識に富み、其に若干の未來を有す。唯だ慨むらくは、稍々專門に偏し過ぎて、一般を觀る明に富まざるやの觀あると是れなり。針塚は農業教育に於ては有數の人材なれ共、農業以外に於ては多くを知らず。茨木は英語教育には精しけれども、其他に於ては多くを知らず。吉岡の國語、槇山の小學教育、生駒の數學、吉武の工業等皆な多くは此類なり。瀨戸、小泉、磐原、服部の四者は、なるべく教育全般に亙らんとする熱心と態度とを有することは、十分に識認することを得れども、然かも尙ほテクニック臭き所あるを免れず。勿論、視學官なる官職其物が、既にテクニックのものなるが故に、此に職を奉ずるものが、テクニック臭き所あるは、數の免れざる所なりと雖も、然かも眞の大視學官たらんには、テクニック以外に行政的識見あるを要し、國家教育の全般に亙りて、透徹せる一家の見を具へずんばあらず。彼等尙ほ春秋に富む、我輩唯だ刮目して其の將來を見ん。

（予が曩きに「文部省高等官總評」として局長、參事官、書記官の人物評を「教育界」に掲載するや、人あり予に問ふに、視學官は高等官にあらざるなきかの奇言を以てせり。予固より視學官の高等官なるを知らざるにあらず。餘りにふく知るが故に故意に之を除外したるに過ぎず。蓋し今日あることを豫見し居たるが爲なり。曾根金僊君亦予の意を諒とし、視學官は一括して總評するの可なるを慫慂し、横濱解纜後、船中に起草して郵送すべしといへり。予

も快く之を承諾し、必ず貴命に應ずべしと答へたりしが、さて船に乘つて見れば仲々書く氣になれず、幾度も原稿紙を取り出してはみたれど感興湧かず。遂に約束を果すこと能はざりき。着英の上は、早速にもペンを執りて其責を塞がざるべからずとは、船がテームスに入る其時迄の固き決心なりしが、さて愈々上陸して見れば、心氣忽ち一新して、今日も明日も四方の見物、赤毛布着てまごついたことは人一倍なりしも、落付いて人物評を書く氣には何うしてもなれず。遂に一日延びて延びて今日に來れり。頃日漸く感興の湧き來れるを覺えたるが故に、直ちにペンを走らして一氣呵成に此一篇を作る。予は謹んで茲に曾根君に遲延の罪を謝し、視學官各位に妄評の罪を謝す。

新聞紙の傳ふる所に依れば、小西重直氏視學官に任ぜらるべしといふ。されど今は確知する方法を有せざるが故に茲には說かず。

文部省高等官中には、尙ほ此外に技師あり、編輯あれども、此等は後日評論する時あるを信ずるが故に、今はいはず。（四十三年九月十三日倫敦にて藤原生）

第二篇　教育議政界

一、辻　新次

(一)　幕末のハイカラ

辻新次、「アラッグ」と訓ず。幼名は鼎吉、後に理次郎と改め、更に新次郎と改名し、遂に「郎」の一字を削つて現今の名に終決す。別に字あり、「云我」と稱し、又「信松山人」と號す。

信州松本の舊藩士にして、天保十三年正月九日を以て其鄕里に生る。十二歲の時始めて藩の學校崇敎館に入つて朱子學を修め、安政五六年の頃、九州の蘭學者宇田精一郎の松本に來遊するに及んで、就て蘭學を研究す。其後仙臺の蘭學者門間莊菴の松本に來遊する時、又就て蘭學を研修し、文久元年江戸に出で、私塾に入つて蘭學、佛學、英學及び西洋兵學を學習し、翌二年蕃書取調所に入る。同所が製煉所を設くるの時、又入つて化學を學ぶ。

彼の當初の志望は軍人たるにあり。彼が兵學及砲術を研究し、製煉所に入つて化

學及火藥の製造法を研究したるは之が爲に外ならず。元治元年、水戸の正論黨の首領武田耕雲齋、兵を集めて筑波山に據り、田丸眞諒を軍師とし、藤田小四郎、竹内延秀、岩倉信成を總裁として常總地方を騷がす。水戸の所謂奸黨之を持て餘し、幕府に援兵を請うて之を打つ。辻、當年江戸にあり、兵學書生の間に同志を募り、かねて研究せる兵學を實地に試驗するは此時なりと稱し、請うて幕府の援軍に加はり、總州古河迄進達す。然るに事忽ち藩主に聞え、『藩の許可を受けずして猥りに左樣なる不穩の行動をなしたる段重々不屆なり』との故を以て、閉門被仰付、鄕里にある彼の嚴父迄も大に詰責を蒙る。辻の壯心是に於て大に摧る。然れども彼の軍人熱は未だ全く失せやらず、尙ほ依然として兵事を研究す。然るに一日火藥の製造中、過つて之を爆發せしめ、顏面、胸部、四肢等に大火傷を受け、氣絕昏倒す。友人等は到底助かるまじと斷念したる程なりしに、幸ひ治療の效を奏し、一命を取り留めぬ。彼の顏面に瘡痕あるも、手指に曲折して延びざるものあるも、此時の記念に外ならず。天然痘に罹りたるにあらず、關節病を患ひたるにもあらざる也。

辻の軍人熱は、此火傷によりて全く消失し、新に敎育家たらんとする志望漸く起る。蓋し身體甚だ不自由となり、到底軍務に堪へざること判明したるを以てなり。然らば彼れの如きも、デモ敎育家の一人といふべきものならん。

斯くて慶應二年の秋、開成所敎授手傳並出役となり、始めて敎育界の人となる。敎授手傳並とは、今日の助敎授の如きものにして、其上に敎授手傳あり、又其上に敎授職あり。其下には句讀師と稱するものあり、又其下には世話心得といふ者もあり。威望勢力の隆々たること、固より今日の大學敎授の比にあらず。辻が此任を受けたる時、堂々駕籠に乘つて老中の邸宅に御禮參りしたりといふ一事、明かに其地位の重きを示して餘りあり。然れども俸祿は、五人扶持と月手當貳兩貳分にして、外に藩より三人扶持を受けたるに過ぎずといふ。

次で間もなく、德川幕府顚覆し、同時に學校も閉鎖の非運に際會す。彼れは此時同志と共に、『遠近新聞』といふものを發行し、福地源一郎の『江湖新聞』や、柳河春三の『中外新聞』と三又鼎立す。軍人の成り損ねの事業としては、餘りに思付の奇拔なるを免れずと雖も、兎も角、彼が當時既に相當西洋事情に通曉し、文明思想を有する幕末の先覺者たりしことを認めずんばあらず。蓋し新聞事業の如きは、當時にありては、

ハイカラ中のハイカラにあらずんば思付き能はざるものなればなり。

(二) 教育社會の元老

明治元年、新政府の參與小松帶刀、開成所の復興を企て、舊幕臣川勝近江と柳川春三の兩者をして其任に當らしめ、辻等舊開成所教授連一同に、暫らく滯京して各地に離散せざることを求めしむ。同年十二月、神田一ッ橋に於て、内田正雄主任の下に、愈々再興して開成學校と稱す。辻は擧げられて同校の教授試補となる。

明治二年、開成學校を大學南校と改稱せし時、辻は少助授に任ぜられ、次で中助教に昇り、明治四年更に大助授に進む。同年七月、文部省始めて置かる。此時大學東校より岩佐純、佐藤尙中の二人者文部省に入り、南校より加藤弘之、町田久成、箕作麟祥及辻新次の四人者出でゝ文部省出仕となる。此等の數人者は文部省の創立と同時に、大學より轉任せる最初の高等官吏にして、其成望の赫々たりしこと今人の想像し得る所にあらず。

田中不二麿、時の文部大丞たり。海外教育制度取調の爲洋行す。其贈り來れる報告に基いて、明治五年八月始めて學制を施く。辻新次、時に文部省六等出仕兼南校長

たり。學制の編成に參與して功勞少かならず。技倆漸く上司に認めらる。夫れより、學校課長兼會計課長、權大書記官、普通學務局長、内記局長、大臣官房長等を歷任し、元老院や參事院に文部省を代表して議案の說明をなし、年一年に信用と地位とを高めつゝ、明治十九年文部次官となる。爾來勤續六年、數代の大臣に仕へて、明治二十五年致仕野に下り、帝國教育會長となりて盡瘁今日に至る。顧みれば、慶應二年以來今日迄、正に四十七年を數ふ。其間終始一貫して、教育圈内に活動し、教育の爲に粉骨碎身す。出身の古くして、歲月の長きや、當さに教育界第一等の先輩なりといふを憚らず。

現今、教育社會の元老として數へらるゝものに、辻の外、加藤弘之あり、濱尾新あり、久保田讓あり、菊池大麓あり、伊澤修二あり。然れども此等の者加藤を除いては皆悉く辻の後進にして、一人も比肩する者あらず。

加藤の始めて藩書取調所の教官となりしは、萬延元年にして、今を距ること五十餘年前のことなれば、辻より古參なることといふ迄もなし。然れども加藤は此間にあり て、或は會計官權判事となり、或は制度寮出仕となり、或は外務大丞となり、或は宮内省出仕となり、或は元老院議官、若しくは宮中顧問官となり、全く教育に關係せざりし時

もありしが故に、出身の早きに拘らず、教育の爲に働きし純粹の歳月に於ては、辻に比して短くとも長きことなし。

濱尾、久保田に至りては、出身に於ても、辻より若し。乃ち辻が五等出仕兼南校長たりし時、濱尾は漸く南校監事にして、久保田は十二等出仕の微官に過ぎざりき。而して辻が文部次官の地位を占めたる時は、濱尾は專門學務局長にして、久保田は普通學務局長にてありしなり。菊池、伊澤の二人者はズット後進にして、殆んど比較にならず。然らば彼を稱して、教育社會第一の元老なりといふも何の不可かこれあらん。

(三) 屬吏の大成したる巨人

然れども、斯の如き先輩の身を以てして、彼は未だ一度も大臣たらず、濱尾、久保田に比して遂に一籌を輸したる所以のものは何ぞ。我輩を以て見れば、彼は忠實勤勉の權化にして、事務官としては殆んど理想的典型なりと雖も、政治家としては、不幸にして、或資格に乏しきが爲に外ならず。

文部省開設以來、辻が野に下る迄には、長官に數人の交迭あり。即ち江藤新平、大木喬任、木戸孝允、西鄕從道、寺島宗則、河野敏謙、福岡孝悌、森有禮、板本武揚、芳川顯正等是れなり。而して其間一省の勢力家として、省務を切り廻はしたる人にも、幾度の更迭あり。田中不二麿、神田孝平、島田三郎、九鬼隆一等の如き即ち是れなり。斯くして首領の變る毎に、主義方針も變り、主義方針變る毎に、主要なる屬僚も變りたるは勿論なりと雖も、獨り寸毫も變らぬ者は辻及び其一派の屬僚にして、一二年毎に交迭せる此等總べての文部卿及勢力家と調和して、能く時勢と共に推移し、只管事務に勉勵することに努めたり。文部次官になりてより後も、成るべく自己の意見を發表せず、森有禮が尙武主義を皷吹すれば、よくそれに唱和し、板本武揚が儒教主義を發表すれば又能くそれに唱和し、芳川顯正が國粹主義を唱ふれば又能く其說に合致せり。

長官の命に從つてよく勉勵し、其主義方針の指示する處に從つて忠實に働くことは、事務官たる者に最も必要なる資格にして、學識才幹よりも貴重なる要件なり。而して辻は此點に於て殆んど理想的域境にあるもの、修養の結果といふよりも、寧ろ先天的稟性の致す所なり。

惟ふに彼は溫厚篤實、調和的圓滿なる紳士の模型にして、屬吏の大成したる巨人なり。將相に必要なる雄才大略も、政治家に必要なる大膽なる權略も、風雲を叱咤して

群雄を統御する豪傑的覇氣も、總べて此等のものは、全然辻の性格の關知せざる所なり。然れども注意周到にして綿密細心、精力絶倫にして恪勤碎勵、職分に忠實にして一事も苟もせざるの美德は之を有す。

彼は民間の人たるよりも官界の吏僚たるに適し、亂世の將士たるよりも太平の良吏たるに適し、進んで事をなすよりも退いて事を守るに適し、立案立言をなすよりも既定計劃を遂行するに長處を有す。從つて其行動は積極よりも消極に傾き、華々しく一時に功を立てんよりも、寧ろ永く過失なからんことを努むるの傾向を帶ぶ。

彼は閲歴才幹に於て濱尾、久保田に劣らず。然れども、溫容典雅、臺閣の氣韻を偲ばしむる點に於ては濱尾に及ばず。覇氣と辯力と決斷とに於ては久保田に及ばず。唯だ熱心努力精勵恪勤の美德に於て前兩者に優る。これ彼が初め事務官として前兩者を凌駕し得たる所以なれども、又最後の一階に終に兩者に一籌を輸したる所以なり。然れども屬吏の大成したる巨人たる點に於ては三者全く同一なり。

辻は溫良堅實、資性忠忱の人にして、寸毫も鬼氣なく、些の衒氣なし。英雄的氣魄も豪傑的肌合も、天才的破格の霜氣も、叛逆的煽動思想も、直進的蠻勇も、總べて此等のものは、辻に於て毛頭之を求むべからず。故に如何なる紛亂時に遭遇するも、進退を過まりて失脚することなく、敵を作つて怨嗟陷穽せらるゝことなしと雖も、其代り如何なる得意時代に如何に長く處するとも、卓越なる長官あつて之を指導するか、優秀なる參謀あつて之を資輔するにあらざれば、終に大功を立つること能はざる底の人たるを疑はず。

滿々たる覇氣と直往邁進の蠻勇とを有せざることは、辻が今日迄大成して晩節を全うし得たる所以なりと雖も、然かも亦今一段の發展をなし得ざりし所以も亦此點に存せずんばあらず。若し彼をして久保田程の覇氣と辯力と批評眼と果斷力とを有せしめば、或は今日迄大成せざる前、不幸にして蹉跌したるやも知るべからずと雖も、或は又幸運に掉して久保田よりも前に大臣たりしやも未だ知るべからず。所詮『押し』の弱くして、『強み』の足らざるは、辻の大なる缺點にして、又著しき長處たることを認めずんばあらず。

とはいふものゝ、人生れて官吏となり、辻程に成功すれば先づ大抵遺憾なしといふも不可あらず。今一息といふ所迄行きて終に大臣たるを得ざりしは、寔に遺憾なり

といへば遺憾たるに相違なしと雖も、然かも其勳功は恐れ多くも　天聽に聞えて榮爵を授けられ、七十三歳の今日に至る迄、尙ほ敎育社會の一大勢力たる帝國敎育會を提げて邦家の爲に盡瘁し得る信用と勢力とを有するに顧みれば、愁ひに短命大臣となりて何事をもなし得ざりしよりも、遙かによく男子の本懷を遂げたるものといふべく、又一層大なる成功を收めたるものと謂つべし。我輩は彼が徹頭徹尾、事務家として成功したることに敬意を表し、人目に留まらざる地味なる事業に偉大なる貢獻をなして平凡なる巨人となれることに滿腔の尊敬を寄與す。

二、久保田讓

(一)　猛進奮鬪の權化

久保田讓は、但馬豐岡の舊藩士久保田周輔の男にして、弘化四年五月其鄕重に生る。十五歳の頃、池田草庵に就て勤學し、後關東に出でゝ二宮尊德の門に入る。明治二年始めて日光縣權大屬に任ぜられ、四年病を以て職を辭し、東京に出でゝ慶應義塾に入る。翌五年初めて文部省に入り、十二等出仕となる。爾來、權中錄、中錄、少視學、大錄、權少書記官、少書記官、權大書記官、書記官、地方學務局長、會計局長、普通學務局長等を歷任して二十五年文部次官に累進す。其間或は廣島師範學校長となり、或は各種の委員となりて學事に盡瘁し、二十六年致仕して勅選貴族院議員となり、二十六年九月第一次桂內閣に入りて文部大臣となり、所謂七博士事件に責を引いて野に下り、爾來專ら立法事務に鞅掌して今日に至る。

顧みれば、明治五年以來約四十年間の公人生活は、唯だ敎育事務に關する閱歷の連續にして他に一點の奇なく、何等の迂餘曲折なし。

惟ふに彼は經驗閱歷の人にして、辻、濱尾等と均しく、屬吏の大成したる巨人なり。一代に卓出する學識を有せざる代り、獨斷的敎育主義を樹つるの弊に陷らず、哲學的高遠の政治理想を有せざる代り、圓滿に發達せる常識を有し、學閥學派の外に超脫す。

彼は頭腦明斷にして、何事にも一家の意見を立て、如何なる場合にも一流の見解を有す。曖昧模糊や、不得要領や、優柔不斷は、固より彼の性格の許さゞる所なり。彼は無事よりも有事を好み、閑居よりも活動を好み、平穩よりも波瀾を好む。故に彼は朝にある時と野にある時とを問はず、苟も己の領分に對して他人の侵入することを認

容せず、常に武裝的態度を以て事に處す。

彼が文部省の會計局長たるの時、今の貴族院議員江木千之は文部省參事官にして、官歴上久保田の下にありき。然るに會ま普通學務局長に缺員生ずるや、江木拔擢せられて一躍其任に就き、政治的意義に於て久保田の上に出づ。久保田之を見て憤慨一方ならず、直ちに大臣の許に怒鳴り込んで、敍任秩序の紊亂を責む。大臣百方手を盡くして慰撫するも、久保田頑として抗議を撤回せず、殆んど尻マクリ同樣の權幕を示す。大臣遂に如何ともすること能はず、不精無精に江木を膝下に招きて懇々旨を含め、暫く屈辱を忍んで、普通學務局長の地位を久保田の讓らんことを求む。然れども全然辭職し呉れよと勸告するにあらず、唯だ久保田の會計局長と入れ換はりにならんことを勸むるのみと懇諭す。江木、之を聞いて熟考良久、大勢の已むべからざるを知りて、屑く大臣の命を拜承する旨を確答したりと雖も、內心の不平は抑へんに由なし。仍ち急遽普通學務局長室に歸りて、一切の調査書類を悉く自己の風呂敷に包み、辭表を認めて大臣に提出し、風呂敷包を携へてサッサと自宅に歸る。局長在任期間僅かに二日、明智光秀の三日天下よりも一日短し。同僚大に江木に同情し、交々往

訪して、隱忍、會計局長たらんことを勸むるも聽かず、舊の參事官たらん事を求むるも肯んぜず。然らば調査書類を返還せよと懇望すれば、『調査書類は文部省の調査したるものにあらずして、予が個人として調査したるものなれば返還すること能はず』といひて應諾せず、遂に其儘有耶無耶となる。

江木は當時文部省の花形にして、外國教育調査の首腦たり。小學校令も、中學校令も、高等女學校令も、皆悉く江木の調査したるものを基礎として改正せられんとする時なりき。然るに一朝にして調査書類全部を失却す。文部省の困惑想像に餘りありしを疑はず。

江木が近時貴族院に於て教育問題に咆哮するは、往年に於ける上述の經歴を有するが爲にして、全くの素人論をやるにはあらず。然れども其材は悉く當年持ち逃げしたる調査書類に基くが故に、現代には既に業に陳腐に屬する時勢後れの議論たるを免れず。

遮莫、此時以後、久保田と江木は、互に不和となり、今日に至るも解けざること、一部消息通の知る所の如し。

既にして久保田野に下るや、貴族院に於て文部省攻撃の勇將たること、十餘年の久しきに及んで少しも倦まず。

如何なる人物が文部大臣たるも、彼は常に文部省を攻撃して毫も假藉する所あらざりき。彼は文部省を攻撃するに於て實に貴族院の名物なりき。彼は恰かも文部省を破壞せんとするもの〻如き態度を示したりき。故に文部省は彼を一敵國と認むると共に、文部省の施設を喜ばざる在野の敎育家は、彼をして文部省に對する不平の聲を傳播する有力なる喇叭管たらしめき。

彼は斯の如く生氣あり、色彩ある行動を以て世人の耳目を惹けり。然れども其態度は何處迄も武裝的攻撃的たるを免れず。江木に對する態度も、文部省に對する態度も、能く彼の氣性を示して餘りあり。人或は彼の文部省を攻撃したるを見て、彼が一度び文部大臣たらんとする野心の發露したるものに外ならずといひしと雖も、我輩を以て見れば必らずしも然らず。彼は唯だ攻撃を知りて防備を知らず、積極を知りて消極を知らず、健鬪を知りて妥協を知らず、旗幟鮮明を知りて不得要領を知らざるが故に、性格必然の結果として、斯る態度を取りたるに過ぎずとす。江木をして餘儀なく退讓せしめたるも、此性格の發露に外ならず。

次で彼が文部大臣たるや、彼の持論たる學制改革は、種々の事情によりて、全然失敗に歸したりと雖も、其代り敎育豫算は閣議に於て必らず原案通り成立せしめ、從前よりも多くの敎育費を取り來つて、各種の事業を着々遂行し、文部省の屬僚をして强行手腕の非凡なるを驚嘆せしめたり。而して斯の如きは彼が內閣に於て重きをなしたるが爲にはあらず、唯だ彼が侵撃あるを知りて退讓あるを知らず、罷り違へば何時にても辭表をつき附くるが如き氣配を示し、或は喧嘩腰となり、或は尻マクリ同樣の態度を以て、自己の主張を固執したるが爲に外ならず。所謂七博士事件の如きも、彼が自己の主張を株守して動かず、喧嘩腰となりて强行手段に訴へたるが故に、遂に彼の如き大騷動を誘發したるものに外ならず。

思ふに彼は猛進奮鬪の權化たり。彼の修養時代の履歷を點檢するも、一として指摘すべき學歷あらず。維新前後の青年は、皆悉く然らざるはなしといへばそれ迄なれども、それにしても久保田の如く學歷の貧弱なるは甚だ多からずとす。辻、濱尾の如きも、固より學歷に乏しと雖も、久保田に比すれば遙かに富めることといふ迄もなし。

此貧弱の學歴を以てして、兎も角、明治の教育社會に頭角を拔く程の修養を積み、識見を涵養し、終に大臣の榮位に昇る迄の發展を遂げたるは、天品の優秀と機運の助くるものありしに因るは勿論なりと雖も、然かも其反面に於て、人一倍の自學自修と不斷の猛進奮鬪ありしことを想はずんばあらず。彼の如きは眞に立志傳中の光彩ある人物にして、現代の懦弱なる青年に對して活ける教訓を施し居れるものといふべし。

(二) 教育議政界の花形役者

彼が始めて貴族院に入るや、先づ學制改革論を提げて文部省と戰を開きたりき。學制同志會を創立したるも彼なりき。高等教育會議の組織を促したるも彼れなりき。學制研究會の學制改革案なるものは、彼れの私案に多少の修正を加へたるものに過ぎざりき。而して世人は實に彼の學制改革論を歡迎したりき。彼は斯の如くして忽ち時代の流行兒となりたりき。

彼が學制改革を唱道したるは、現行學制を以て我國情に適せずと信じたるが爲なり。彼は小學校の現制を改め、中學校に入らんとするものは、初より其學途を異にし、小學校は單に普通教育を受くるを以て目的とせる最多數の兒童を收容する所たらしむ可しと主張せり。彼れ以爲らく現時の小學校は、一般人民の子弟に普通教育を施す所たるは無論なれも、之と同時に中學校に入るの楷梯たり。故に貧富の兒童混合して、課程も設備も頗る錯雜を極はむ。斯の如きは富者の子弟を益せざるのみならず、又貧者の子弟をも利することなし。故に中學校に入らんとする中等人の子弟の爲には、別種の豫備校を設け、又は私立學校其他に於て特に初等教育の門戸を開かば、公立小學校は最多數の下層人民の子弟を教育する所となるべく、從つて其課程は成るべく實用的にして一般國民に必要なるものたらしむべく、其校舍の建築、器具、器械の如きも、亦質素を旨として費用を節約し、以て學齡兒童入學の便利を謀らざるべからずと。斯くて彼は授業料免除をも主張し、國庫補助の必要をも主張し、英獨に行はるゝ半日學校の設立をも主張せり。

彼は中學校を以て健全なる中等國民を養成する所たらしむると同時に、又大學の豫備校として缺點なからしめんが爲に、最も其設備の完全を期せり。其案に曰く、現時の修業年限五年は改めて八年とし、之を別ちて初等高等の二種となし、初等を五年高等を三年の學年となすべく、大都市には八年を通じたる完全なる中學校を設け、人

口寡少なる地方には、一縣に一校若しくは二三校の高等中學校を設け、初等中學校は適宜の地を定めて數校を分立せしむべしと。而して其課程に關しては、彼は比較的必要を感ぜざるものは成るべく之を削減し、學生の精力を過度に使用せしめざると共に、最も品性陶冶に意を用ゆべしと說けり。

大學は直ちに中學校と連絡するを得べからしめ、以て學生をして競爭試驗の難關を免かれしめんとは彼の考案にして、彼は考案に依りて、大學は必らずしも、法、文、醫、理、工、農の六分科を要せざるのみならず、又一地方に必らず六分科を設立せざるも可なりと主張せり。彼れ曰く獨逸の如きには三分科の大學あり。本邦の大學の如く六分科大學を具備し、且つ病院迄も其構內に設立したるものあるを聞かずと。卽ち彼は目下の急用處分として、第二高等學校を仙臺大學と改めて、理、工及醫の三分科を置き、第一高等學校は東京帝國大學に屬せしめて其豫備校とし、第三高等學校は京都大學に屬せしめて其豫備校とし、札幌農學校は、札幌大學と改めて、理、工、農の三分科を置き、而して東京商業學校は東京商業大學と改めしむべしと說きたり。是れ低程の大學を成るべく多く設立して、人材の速成を謀らんとする考案なれども、彼れは學問の最高機關として現時の帝國大學を學制の正系以外に特立せしめ、專ら學術技藝の蘊奧を窮はむるを主眼とし、以て實用の人材を造るを目的とせる他の大學と併び立ちて各々其特色を發揮せしめんと欲するものゝ如かりき。

其他に關しては、詳細に紹介する遑を有せずと雖も、然かも尙ほ彼が貴族院に於て敎育事業の統一を論じたる一項を概說するの必要あるを認む。彼は曰く、重複なる敎育事業は宜しく之を廢合して冗費を節約せざるべからず。例へば陸軍の幼年學校の如き內務の永樂病院の如きは、斷じて之を廢するを至當とし、傳染病研究所の如きは、內務より大學に移すを可とすべく、農商務の農事試驗所の如きは、文部省の農學校と同性質のものなるが故に、之を文部省に統一するを可とすべしと。授業料問題に關しては曰く、大學、高等學校及中學校の授業料は成るべく之を增額して、實業學校の授業料は成るべく之を減額すべし。これ一方に於ては實業敎育を奬勵するの手段となり、他方に於ては敎育費の一財源を得るの方法なりと。

彼の學制改革論は大要斯の如し。今其組織を通覽するに、着眼概して穩健にして、所說概して實際的なり。其意見は徹頭徹尾事務的にして、一點の空想を雜へず、政略

を混せず、哲學上の主義を加へざるなり。經綸的高遠の理想には乏しと雖も、時代の要求を洞察したる實際的計畫たるの眞價は之を有す。彼は不幸にして文相在任中、此改革案を實行すること能はざりしと雖も、然かも其後の大臣は一歩〳〵改正を施して、遂に今日、久保田の改革案と略ぼ同一の現制度を見るに至れりとす。小學校を二種に分つといふことは、未だ實現せらるゝに至らずと雖も、中學校に關する改革意見は、小松原文部時代に高等中學校令となりて過半採用實現せられ、大學に關する改革意見も、大同小異の程度に、於て既に實現せられたり。然らば彼れ自ら彼の改革案を實行すること能はざりしは遺憾たるに相違なしと雖も、人をして實行せしむることを得たるが故に、結局、邦家に對して大なる貢獻をなしたりといふを得べく、彼の改革論の空論暴議にあらざりしことを事實に於て證明したるものといふを得べし。

彼は、學者にあらず、理想家にあらず、思想家にあらず。故に人心の機微を察して、適宜に精神界に發言し、一定の理想に基いて道德政策を樹立し、斷えず時代思潮を善導するが如き大能力を有せず。彼は又純然たる教育家にもあらず、政治家にもあらず。唯だ教育事務家の大成したる巨人にして、經驗閱歷の優秀を以て人間學校を卒業したる苦勞人なるが故に、教育學藝の內容に立ち入りて滿天下の學者教育家を指揮すること能はず、又國家政務の全體より打算して、教育百年の長計を吐露すること能はずと雖も、然かも教育議政界の一方に屹立して當局の文政方針を監督し、教育界の輿論を議院に代表し、議院の教育に關する言議を適正に指導する丈の能力と威望を有す。彼の如きは眞乎卓越なる文政の監督者にして、教育議政界の花形といふも過言にあらざるなり。

(三) 教育社會の三幅對

今日、教育社會に元老と稱せらるゝ者少しとせず。先づ之を樞密院に求むれば、濱尾、菊池の二人あり。之を貴族院に求むれば、久保田、辻、江原素六、江木千之、山川健次郎、伊澤修二、折田彦一の數人者あり。更に中老株のものをも擧ぐれば、岡田良平、澤柳政太郎、鎌田榮吉の三者あり。然れども、江原と江木とは、純乎たる教育界の人にあらずして、寧ろ政治界の人なり。山川と折田とは純教育界の人なれども、文政に對しては素人なり。伊澤は黑人なれども閱歷年齡に於て久保田、辻に及ばず。岡田、澤柳、鎌田は、伊澤よりも尙ほ新進にして、固より元老を以て目すべきにあらず。然らば貴族院

の久保田、辻と、樞密院の濱尾、菊池とは、教育社會の四大元老にして、就中、久保田、辻、濱尾の三者を以て恰好の三幅對とせずんばあらず。此三人者は皆共に經驗閲歴の人にして、學識能力殆んど甲乙なしといふも可なり。唯だ久保田は剛氣と果斷とを以て勝さり、辻は溫和と勤勉とを以て勝さり、濱尾は篤實重厚と氣品とを以て勝れるの差あるのみ。

久保田は頭腦透明鋭敏にして論理的判斷に富み、辯舌壯快にして光彩ある言論に長ず。然れども雍々溫雅、泰然自若として君士人の高風を偲ばしむる點に於ては到底濱尾に及ばざるなり。秋霜烈日の氣魂と縱横無盡に時事を論評する膽略とは久保田の壇場にして、濱尾、辻等の及ぶ所にあらず。然れども包容力に於ては終に濱尾に及ばず、調和力に於ては終に辻に及ばざるなり。故に此三人者は、人物の總價値に於て殆んど優劣なしと雖も、仕事の部面如何によりては著しき長短あるを免れず。大學總長の如き地位に對しては、濱尾最も適任にして、辻も久保田も遙かに及ばず。議政壇上に立ちて文政を評論する人としては、久保田最も適任にして、濱尾も辻も遙かに及ばず。帝國教育會や何々協會といふが如き、各種の民間團體の會長としては、辻、最も適任として、濱尾も久保田も遙かに及ばざるなり。然れども、明治の文部省が産出せる第一流の珍品たる點に於ては、三者全く異ることなし。我輩は此三者の一に會ふ毎に、他の二者を聯想せざることなく、自ら省みて大に激勵せられざることなし。

三、伊澤修二

(一)

伊澤修二、信州高遠の人、開發主義教授法の創唱者にして現代教育社會の先輩なり。彼は明治三年の秋、藩の貢進生となりて大學南校に入り、明治八年米國に留學し、マサチユセッツ州、ブリユダオートル師範學校に遊び、校長エ、ジ、ボエデンに就いて心理學及び教育學を學び、兼ねて學校管理法、生徒養成法、音樂及び體操等を研究し、愛知及東京師範學校々長となれり。

彼が開發主義を提唱したるは此時代にして、彼の年齢漸く二十歳の時なりき。當時彼の著作せる教育學は、彼の米國留學中に於ける筆記錄にして、今日より見れば幼

稚粗雜のものたるを免れずと雖も、兎も角邦人の著作せる非醨譯教育書の嚆矢にして、世の甚大なる歡迎を受けたるのみならず、伊澤の名をして忽ち全國に知らしめたりき。

伊澤の教育書が出版せらるゝ以前にありては、スコット及びダビッドモーレー等の傭外國人が、文部省雜誌に於て西洋式新教授法を提唱したることありと雖も、未だ一般の教育家を覺醒せしむるに至らず、教師は依然として德川時代の遺習を蹈襲し、教科書の素讀講釋をなすのみに止まりき。然るに伊澤の教育學及び彼の門下生若林、白井等の『改正教授術』一度び出づるに及んで、教育家の自覺漸く起り、教授法研究の風潮勃興す。時運先驅の功あるや疑ふべからざるなり。

明治初年より十年迄は、文化未だ甚だ幼稚にして、人物拂底したるのみならず、西洋崇拜熱も頗る旺んなりしが故に、此當時の洋行者は品質の善惡に拘らず、概ね異數の歡迎を受け、破格に重用せられたるといふ迄もなし。伊澤が二十二三歲の身を以て早く既に師範學校長となり、著書を出し、一廉の先覺者となりて教育社會を提撕し得たるは、卽ち此人物拂底時代の好潮に棹して出でたるが爲にも因るべしと雖も、亦伊澤の頭腦及び手腕が相當秀でたる所ありしが爲にも因らずんばあらず。

伊澤は頭腦明晰、手腕堅剛、學者にも行政家にも成り得る素質を有す。彼が開發主義を唱道し、教育學、新教授法を吹鼓して嘖々の名聲を博したるが如きは、彼が天性學者的素質を相當に有するとの證左なり。邦人が未だ音樂の教育的價値を覺らず、之れを以て一種卑しむべき戲藝の如く心得たる時に方りて、熱心に音樂の教育上、社會風教上必要なることを力說し、終に東京音樂學校を起さしめ、自ら校長となりて畫策經營し、拮据黽勉、多大の困難を排して、同校今日の隆盛を來せる基礎を作りたるが如きも、彼が學者的頭腦と行政的手腕とを具有することの證左なり。一般の教育家が未だ普通教育の原理、方法さへ十分に知らず、特殊教育の如きに至つては殆んど寸毫の知識だも有せざりし時に方りて盲啞教育の必要なることを力說し、終に東京盲啞學校を起さしめて、自ら之を經營し、同校今日の發達を遂げしめたるが如きも其證左なり。文部省書記官又は參事官等を歷任して編輯局長となり、教科書の編纂及び其改良等に貢獻したる如きも其證左なり。國家教育社を創立し、大日本教育會(今の帝國教育會)に對峙して在野教育團體一方の統領となり、教育の進步改良と學制の整理

とに盡力したる如きも其證左なり。臺灣總督府學務局長並に同民政事務官となり同島學制の基礎を据ゑたる如きも其證左なり。東京高等師範學校長となり貴族院議員となり、學制研究會幹部となり、或は育英し、或は教政を監督して、終始教育界重要の地位を占め來れる如きも其證左なり。

（二）

夫れ然り、伊澤は學者的頭腦と行政家的手腕とを稟有す。然れども彼は斷じて政治家の材にあらざるなり。殊に生來偏狹癖癖にして包容變通の才に乏しき一事最も大なる缺點となす。

伊澤の文部省に高官たるや、癖癖の起る毎に、誰れ彼れの別なく、先づ拳骨を喝はして而して後怒喝を肆にす。彼の同僚及部下にして彼の拳骨を頂戴せざりし者甚だ少く、辻新次の如きすら終に其御見舞を免るゝこと能はざりしといふ。

唯だ獨り嘉納治五郎に對してのみは、曾て一度も鐵拳を喝はしたることなく、如何に激怒する時と雖も、陰忍自抑して手を擧ぐるに至らざりしと確聞す。然れども是は決して伊澤が嘉納を衷心より敬重したるが爲にはあらず。嘉納が講道館の創立

者にして、柔道の大先生なるが爲に然るなり。伊澤の如きは醉つても尙ほ本性を違へざるものといふべし。

伊澤の臺灣總督府にある時も屢々、癖癖を起して屬僚に鐵拳を雨下す。屬僚窘窮して伊澤の面前に出づるを嫌ふと雖も、公務あるが故に全く出でざる譯にも行かず、不精々々に面前に行きて先づ右足を前に出し、左足を後に控へて何時にても退却し得るやうの身構をなし、然る後書類を提出し、說明し且つ應答す。伊澤若し赫怒して手を擧ぐれば、屬僚直ちに一歩退いて其難を免る。此珍妙なる身構へ發明せられて以來、伊澤終に一人も屬僚を撲ぐること能はざりしといふ。時人之を稱して伊澤式上申法といへり。

伊澤の癖癖は斯の如く强し。故に彼には腹心の子分あることなく、莫逆の友あることなし。これ彼が教育界有數の先輩たるにも拘らず、案外、名望勢力を有せざる所以なり。

伊澤が曾て國家教育社を提げて、大日本教育會に合同するや、多數に推されて新團體帝國教育會の會長となる。任期終りて改選となるや、伊澤は私かに再選せらるべ

きを以て期す。時に嘉納治五郎高等師範に校長たり。改選期間際に至りて部下の職員を全部帝國教育會に入會せしめ、投票權を得せしむ。改選の日、此等新會員を全部率ゐて自ら會場に臨席し、旨を含めて嘉納自身に投票せしむ。開票すれば嘉納卽ち大多數を以て會長に當選し、伊澤手際よく土俵外に放出せらる。

嘉納は自ら會長たらんことを希望したるが故に部下をして己れに投票せしめたるにはあらず。唯だ伊澤を再び會長たらざらしめんが爲に、一時の權宜として己れを選擧せしめたる者に外ならず。是を以て彼れ直ちに之を辭退して印綬を辻新次に讓る。辻が帝國教育會に會長たるは、此時を以て始となす。

伊澤にして若し名望を有する人ならば、嘉納に放逐を企てらるゝことなかるべく、假りに私怨によりて企謀せらるゝことありとするも、衆之に同ぜざるが故に、嘉納の陰謀を成功せしむること萬々あらじ。然るに事實は全然之に反して無雜作に放逐せらる。伊澤が人望に乏しきの證左とせずんばあらず。

(三)

惟ふに伊澤は頭腦明晰學者風の人なり。一事一物に對して己れの意見を立つること極めて迅速にして且つ正鵠を得ることも少しとせざるなり。然れども他人の意見を容れ、他と調和して事を共にすること能はず、偏俠孤立徒らに獨り自ら高うして、純御包容の德量智術を有せざるなり。是を以て彼は如何なる場合に於ても、他の參與畫策することを歡ばず、寧ろ己れ一個の意見によりて總てを處斷することを慾望す。彼は彼の自力のみによりて遂行し得る種類又は程度の職業若しくは地位にあれば、普通以上の仕業をなして功績を遺すこともなし得べしと雖も、將に將として多くの部下を統率し、適材を適處に置いて各々其才能を發揮せしめ、內外に樽俎折衝して交讓の中に、自己の總括的意見を實行せざるべからざる職業又は地位にありては、彼は到底有爲優秀の人たること能はざるなり。換言すれば彼は自ら爲すべきの適材にして、他をして爲さしむるの器物にあらず。彼の如き明治教育有數の先輩を以てして、未だ曾て文相たりしことなく、又終に未來永劫其事なからんと信ぜらるゝも、畢竟彼に此性格あるに因る。

彼は大將にも適せず、兵卒にも適せざる厄介人物にして、行政家たるよりも寧ろ學者たるに大に適すといふを得ん。彼が哲學的一大系統を創出し得るほどの大頭腦

を有すべしとは、我輩固より之を信ぜずと雖も、兎も角彼が相當の學者的資質を有し相當の創見を有し、一家の見識によりて事理を觀察、分類、建設し得るだけの頭腦を有することを認めずんばあらざるなり。彼をして壯時より學問に專らならしめば、彼れ或は今日有數の學者となりて學界の重鎭たるやも未だ知るべからず。然るに惜しい哉、事茲に出でず、一生の大部分を行政部面に捧げて碌々今日に至る。今日となりては時既に遲く、學者たらんとするも亦遂に如何ともすべからざるなり。斯くいへばとて、我輩は伊澤を以て行政家として失敗したりとなすには非ず。我輩は寧ろ彼を以て異數の成功者となし、彼の行政家的手腕と彼が明治教育に貢獻せる事蹟とは十分に之を識認す。我輩は唯だ彼をして終始學者たらしめしならば、彼が行政官となりて贏ち得たる今日の地位よりも、更に大なる成功を收め得たるに相違なしといふに過ぎずとす。

彼が國字改良に反對し、羅馬字採用論を反駁する議論の如き、之を政治論として見れば、殆んど顧みるの價値なき迂論たるを免れずと雖も、之を若し學者論として見れば、論陣堂々として所說憑據あり。世の雷同者流をして一氣に沈默せしむる威力を具ふ。少くとも彼は國字非改訂派の最强の最大戰士といふを憚らざるなり。而して是れ一に彼が學者的素養を有するに因る。

彼が近年熱心に從事する吃音矯正の如きも、世は未だ十分に其價値を知らずと雖も、方法、治術に學問的根據あり。之を西洋のそれに比するも、或は暗合するものあり、或は優るとも劣らざるほどの新意創案ありといふ。而して是れ皆伊澤の發明に係る。飜譯輸入したるにあらず、他より傳授せられたるにあらざるなり。我等は彼を見る毎に、彼が純乎たる學者として立たざりしことを惜しんで已まざるなり。

四、三土忠造

(一) 彼の出身經歷

三土忠造、香川縣の人、明治四年六月を以て、大川郡譽水村に生る。本姓宮脇、後ち三土家に入りて養子となる。

彼は幼時より聰明穎悟、天禀の才能、早くも鄕黨の少年を凌駕したれども、亦甚だ亂暴者にして、『無鐵砲』なる渾名をつけられたる程なりき。嘗て惡戲をなし倉の中に

閉ぢ籠められしも、味噌樽を叩きて、却て家人を困らしめたりといふほどなれば、彼の亂暴と聰敏とは一通りのものにあらざりしを知るに足る。

彼の愛媛縣師範學校にあるや、今の雜誌『教育界』の主筆曾根金僊と同級たり。曾根は全級中の第二位を占め、三土は第三位に居りき。曾根及三土が首席を占め能はざりしは、彼等の頭腦が、當時の首席者某に劣りしが爲にはあらず。數學其他の主要學科に於ては、曾根も三土も首席者某に優りしと雖も、音樂、圖畫、體操等の如き技能學科に於て首席者某に劣りしが故に、平均點に於て、いつも二席又は三席に下りしなりといふ。曾根は首席者たらんとして、技術科にも人知れず勉勵したることありしも、三土は師範學校時代の席順の如きは、全然之を眼中に置かざりしものゝ如く、機械體操や習字、圖畫の成績は如何に劣等なるも之を顧みずして、一途英語、數學の如き學科の研究にのみ身を委ねたりと聞く。蓋し彼は卒業後直ちに高等師範學校に入學せんとする野心を有したるが爲に外ならず。彼が少にして大志を懷きしことは、此一事によるも想察するに餘りあるを知る。

既にして彼が高等師範學校に入るや。天賦の才能漸く現はれ、終始優等の成績を

以て校内に鳴る。卒業後同校附屬中學校の教諭に任ぜられたるも之が爲めなり。彼が中等國文典の一書を著はし、文典教科書に一新紀元を畫したるも此時なり。彼の中等國文典は、在來學者の著はしたる文典書の缺陷を補ひて教育的に編纂したるもの、其内容善良にして新機軸に富みしことは、此書の發行高が四十版の多きに達したる一事に徴するも明なり。國語讀本、女子國文典、親の罪、西史美談等の書も亦此時代の著述にかゝる。

かくするうちに、偶々伯爵小笠原長幹の英國に留學せんとするに際す。彼れ乃ち末松謙澄、小澤武雄の兩者に推薦せられて、小笠原の監督者となり、同行して英國に行く。伯小笠原は久留米の舊藩主、彼を擢いて監督者となしたるは、小笠原が附屬中學校に生徒たりし時、最も偉らき先生として三土を大に尊敬し居たるが爲にして、單に末松、小澤の推薦ありしが爲のみにはあらず。校長嘉納治五郎亦た此時彼に向ひて、『今一年も教諭の任にあれば、文部省より海外留學生を命ぜらるゝなんも、今小笠原の監督者となりて海外に赴き、貴族の監督をなしつゝ學問を研究するは、寧ろ君の爲によろしかるべく、且かくの如き監督者に推薦せられたるは名譽の事なれば、進んで之

を受けんことを望む』と勸めたる由。以て彼が當時既に諸方面の有力者より受けたる信認の薄からざりしを知るに足る。

彼の英國に行くや、三年間ケムブリッヂ大學にありて、政治史及政治學を研究し、歸朝間際獨逸に行き、伯林大學教授プラウト氏について、教育學、文學を研究す。彼が後來政治家として世に立つの基礎此時に於て成る。

歸朝後彼は出版事業を經營せんとして着々計劃する所ありしも、偶々幣原坦の韓國學部顧問を辭するに際し、彼れ其後任に招聘せられて渡韓す。かくて彼は歸朝後僅に四箇月にして、韓國學部の參與官となり、或は教科書編纂の任に當り、或は教育行政に鞅掌し、或は外國語學校長となり、非凡の手腕を揮つて韓國の教育に貢獻す。彼が統監伊藤の知遇を得たるは此時にあり。

在韓二年、職を辭して歸り、明治四十一年香川縣より推されて衆議院議員となる。彼が官職を辭して候補者に立たんとするや、統監伊藤、彼の大膽なるに一驚し、在官の儘候補者に立つとの得策なるを諭す。蓋し萬一落選したる時を慮りての厚意に外ならず。然れども彼は斷じて之に從はず、遂に辭す。彼の胸中自ら十分の成算ありしを知るべきなり。

(二) 彼の思想人物

彼は多才多策なれども世の所謂策士に非ず。又隱謀家にも非ず。彼の行動は甚だ質實にして華麗に乏しく、人氣取の彌次馬騷をなすこと亳もなし。彼は議會にあるも、演說に浮身を窶さず、所謂お土產的建議案や請願を提出すること更になし。これ彼が香川縣選出の代議士を以て任ぜず、初めより國家の代議士を以て任ずる抱負を有するが爲に外ならず。彼は議政壇上の人として未だ大向より喝采せられず、衆愚より寵愛せられず、新聞紙より賞讃せられずと雖も、然かも着々として政界に地歩を占め、識者有力者より年と共に重用せらる。思ふに彼は舞臺の人に非ずして寧ろ樂屋の人也。出でゝ戰場の勇將たらんよりは、寧ろ入つて帷幄の謀將たるに適し、民黨的壯士風の政治家たるよりも、寧ろ官僚的役人風の政治家たるに適すべし。

凡そ政治家、新聞記者には二種の模型あり。一は常に政府を攻擊し、權門富貴を罵倒して、弱者貧民に加擔同情をなすもの是れなり。此種の人は大言壯語を弄し、衆愚を煽動し、彌次馬の隊長となりて新聞紙に花を咲かすが故に、忽ちにして名を天下に

知られ、早く所謂名士の階級に入りて俗衆の人氣を集め、一時非常の流行兒たるを得べしと雖も、然かも言動無責任にして往々常軌を失し、識者有力者の同情後援を有せざるが故に、名のみ徒らに高けれども遂に大事業をなし得る力なし。二は全然これの反對にして、言論を愼み、責任を重んじ、衆愚を煽動するよりも寧ろ鎭定慰撫するとに力を盡くし、廣く天下に未見の崇拜者を作らんとするよりも、寧ろ少數の識者階級に同情後援者を求めて、中流以下の國民は唯だ之を指導追從せしめんとする者是れなり。此種の人は時に政府者と妥協し、權門富貴と調和するのみならず、假りに之を攻擊する時と雖も、言辭を優麗にして、態度を紳士的になすが故に、俗受け甚だ乏しく、群衆崇拜の偶像たること能はざるも、年と共に識者階級の信用を增して、自己の抱負を實行し、天下の經綸を行ひ得るに至る。而して三士は前者の模型にあらずして、後者の標本なり。

彼は滿々たる覇氣と勇往邁進の蠻力とに於て所謂民黨の野武士に劣らず。然れども彼は之を現はすに直情露骨の態度を以てせず、陰忍自重して圓轉老熟の表現をなす。これ彼が新聞雜誌の寵兒とならざるにも拘らず、老人階級の信用を得て、今日迄順境に發展し來れる所以にして、又彼が第二種模型の政治家たる證左なり。

彼は公人としての進退動作に於て、斯の如く老成なるのみならず、私的生活に於ても亦甚だ老熟なるを見る。其一例をいへば、彼が金錢の收支に巧慧なること是れなり。彼は世の常の代議士の如く、微少の金額に眩惑して節操を賣ることなく、衆議院議員の肩書を利用して、商事會社に關係し、以て權利株を貪るが如きこと毫もなし。商事會社に關係すること、必らずしも不德なりといふにはあらざれど、將來に大望を有するものは、關係せざるに若くはなし。斯くて彼は所得少きに甘んじて簡易生活をなし、豪遊奢侈を愼みて支出を緊縮す。時に遊興する事なきにあらずと雖も、そは多く將來の利害打算より來るものにして、世の所謂蝦で鯛を釣らんとするものに外ならず。此點往々潰々者流より誤解を受け、三士は吝嗇なりと非難せらるゝを聞くと雖も、此ケチなる點が却つて三士の聰明なることを證するものにして、將來大事業をなし得る所以たり。

彼は調査力に富むといふとも、未だ曾て一度も自己の名に於て其調査を利用せず、黨若しくは先輩政治家に提供して、其利用に便す。彼が代議士となりたる初めより、

毎議會必らず豫算委員となり、既に一度政友會幹事となりたる如きも、畢竟彼の此の有志家的性格及態度が、先輩政治家の愛好する所となりたるに因らずんばあらず。

彼は自己の賣名にあせらず、他をして功名をなさしめて欣ぶ有志家的態度を有するのみならず、又、衆議院第一の教育通たるの聲望を有す。此一事亦彼が先輩政治家に識認せられて、衆議院に早く頭角を拔ける所以たり。

現今の衆議院議員中、教育の事情に通じたる人、固より尠しとせず。其一二をあぐるも、例の戸水寛人あり、鵜澤聰明あり、根本正あり、藏原惟郭あり、荒川五郎あり、山田禎三郎あり。然りと雖も、此等の數者は教育の知識經驗に於て、固より三士の比敵にあらず。

戸水、鵜澤の如きは、教育に關係を有すといふ迄にて、教育の專門的知識を有するにはあらず。根本正は屢々議會に教育問題を論ずれども、彼も亦教育を專門的に研究したることなきが故に、特別知識を有せず、常に帝國教育會より供給せられたる材料を其儘議院に持ち行きて、機械的に喋々するに過ぎざれば、到底三士と比較すべきにあらず。

荒川五郎は師範學校の出身にして、小學校教員たりし事もあり。多少教育上に趣味を有せざるにあらずと雖も、專門的何等の知識を有せざるとは、根本と相伯仲せり。彼が屢々議會に於て教育問題を喋々するは、背後に前讀賣新聞副社長足立北鴎ある による。足立の荒川に於けるは、猶ほ帝國教育會の根本に於けるに均し。

藏原惟郭は嘗て中學校長たりし經驗もあり。帝國教育會の幹事たりしこともあり。且つ心理學、哲學に多少の修養ある故を以て、私立大學の講師たるが故に、教育のことに全く無關係なりといふを得ざれども、三士に比すれば素人の鋭々たる者にして、畢竟根本、荒川等と同列に位するに過ぎず。殊に藏原は頭腦粗雜にして、論理的判斷力に乏しく、徒に大言壯語を弄して、衆愚の人氣を博せんとする輕佻浮薄の缺點を有す。彌次と煽動とに長じ、青年會館や錦輝館の流行兒たるは難きにあらざるべしと雖も、其行動甚だ着實を缺き、人物の節操亦疑はしくして、識者有力家の信用殆んどゼロなり。三士に比すれば總てに於て段違ひたるを免れず。

山田禎三郎は高師出身にして、人物の規模、輪廓の大なる、固より以上數者の比にあらず。彼は一種の豪傑にして、稍々政治家の素質を有す。然れども、彼は政治家の修

練に乏しく、又學問の素養にも乏し。其度胸のすわりて手腕の惡辣なる點に於ては恐らく三土も及ぶ所にあらざらん。若し彼をして三土と同一の信用と金とを持たしむれば、仕事をなす點に於て、或は三土の上に出づるやも計られず。

彼は自己の有する金と社會より受くる信用とを基準限度として事業を經營すれば、必ず成功すべき人なれども、生來稍々着實の思想に乏しきが故に、常に自己の信用以上財産以上の大計畫を立てゝたえず失敗す。政治界に於ける彼の將來は、全然未知數にして三土の如く確的に有望ならず。殊に彼が三土程に學問なく、節操なく、着實眞摯、誠實なき點を最も遺憾とす。

かく論じ來れば、三土は教育に精通し居れる點に於て、衆議院の第一流たるのみならず、其人物に於て教育議員中の第一流なり。高等師範は近頃珍らしき人物を出したりといふを妨げず。

高師出身者中には、一科の學問に於て、三土に優るもの少しとせず。教育學、教授法の知識に於ては、三土に優るもの比々皆然り。然れども多策多才にして常識に富み、政治家としても、行政家としても、將た又實業家としても、立派に世に立ち得る才幹素

質を有する點に於ては、彼は恐らく高師出身者中の第一流ならん。人或は樋口勘治郎を以て彼に比するものありと雖も、斯の如きは素人評の甚だしきものにして、樋口と三土とは總ての點に於て雲壤の差あるを免れず。

(三) 彼の將來如何

思ふに三土は幸運多祥の寵兒也。彼の經歷を吟味するに、些の波瀾を有せず、恰かも順風に帆をあげたる船の如く、平和と光明と中に進歩發展して今日に至れり。其高等師範學校附屬中學校に教諭たるや、嘉納治五郎、芳賀矢一等の信認庇護を受け、海外に遊ぶや、伯小笠原、富豪岩崎等の援助を受く。而して韓國にあるや統監伊藤の信認を受け、代議士となりて政友會に入るや、原敬の信認を受けて幹事となり、今や既に陣笠階級を脱出す。彼れ未だ齡若く、甚だ春秋に富むのみならず、勉勵努力衆に超ゆるものあるが故に、彼れにして若し今日の儘を以て進まば、將來必らず嶄然として政界に頭角を抜くに至らん。今後の十年間に於て、各種の委員長となり、本部幹事長となり、院内總務輔佐となるを得ば、其次の十年間には院内總務となり、議長となり、或は大に發展して臺閣に座するに至るやも未だ知るべからざるなり。

第三篇　教育思想界

甲、明治の七大教育家

一、福澤諭吉

(一)　思想家及批評家としての福澤諭吉

明治維新早創の隊、開國進取、實學尊重の思想、滔々として時代の二大潮流となる。此時に當りて、時代の急先鋒となり、洋學を輸入し、實學を尊重し、國民の開拓に異數の貢獻をなしたる者、之を福澤諭吉となす。彼は豐前の人、初め緒方洪庵に就いて蘭學を學び、安政五年江戸に來るに及んで、英學を研究す。安政六年幕府の使節に隨つて亞米利加に渡り、次で又文久二年使節に從つて歐米を漫遊し、更に慶應三年に至りて、再び米國に遊び、精しく彼の地の文物を視察して歸朝せり。

時恰かも西洋にありては、佛蘭西革命の結果として起れる、民權、自由、平等の思想と

個人的功利思想との盛んなる時にてありければ、福澤は單に泰西文明の物質的方面を觀察するのみに止まらず、更に深く精神的文明思想をも感受し、文明開化の一大化身となりて、本邦に歸り來れり。

幕府の將に亡びんとするや、彼は病に藉口して、其御使番を辭せり。蓋し幕府の運命既に其終焉に近けるの時、空名の官職は彼に取つて何等の價値も存せざればなり。明治新政府の建設成るや、彼は又神田孝平、柳川春之等と共に新政府に召さる。孝平、春之等之に應召したりと雖も、福澤又獨り從はず、彼が最も尊しとする天職に向つて其後半生を獻げんと決心したりき。彼が官途に仕へざりし理由は、彼れ自からが其傳記に錄せる所に依りて明なり。曰く、「幕府は門閥壓制鎖國主義を懷抱する所なり。勤王家なる一類は、幕府よりも尚一層甚だしき攘夷論者なり。故に余は何れにも左袒することを好まず」と。蓋し斯の如き思想は、今日より見れば毫も之を珍とするに足らずと雖ども、今より約六十年前、勤王佐幕の爭、紛々たる時に當り、能く時勢の趨く所を洞察し、唯だ己れ自らの信ずる所に從つて進退し、卓然時流を拔いて、別乾坤を作り、大膽に自己の所信を公言して憚らざる所、凡俗庸儒の到底能くする所にあらざる

なり。

斯の如くして、官邊との關係を絶てる福澤諭吉は、爾來專心後進の誘導と國民思想の開拓とに從事せり。彼が米國より歸るや、直ちに「西洋旅行案内」を刊行し、明治二年に至りて「世界國盡」及び「西洋事情」等の著書を公表す。

中に就いて、最も強く人心に影響したるは「西洋事情」にして、其開卷第一には、「四海一家、五族兄弟、蒸汽濟入、電氣傳信」の文字あり。更に進んで其の内容を檢するに、銀行法、郵便法、徴兵法、選擧法等の制度を敍說せるあり、或は國民の權利義務に對する觀念や、國家と人民との間に成立すべき契約等を論じたる所もあり、或は義務教育の制度を說いて、子女一定の年齡に達すれば、貴賤、貧富、男女の區別なく、皆平等に就學しつゝあることを論じたる所もあり。整然たる西洋諸國の文物典章は、極めて概略ながらも皆擧げて悉く此一書に收められたるやの觀あり。

此に於てか、「西洋事情」は、廣く國民の愛讀する所となり、初編のみにても十五萬部を出し、僞版を合すれば二十五萬餘部に上れりと云ふ。「洛陽の紙價を高からしむ」との諺も、此の書の形容としては、稍々物足らざるを覺えずんばあらず。

此小冊子を讀める我國民は、世界列國の光景を親しく實地に目擊するの思をなし今更の如く、西洋諸國の制度の整へるを感嘆し、一國最高の位(大統領)を以て、卑賤なる一市人に與ふるが如きは、泰西にては敢て珍しからざる制度なることを初めて知れる我國の政論家は、殆んど自失せんばかり驚駭せり。げに福澤の「西洋事情」一卷は、單に一般の國民に對して、通俗の說法書たりしに止まらず、在朝在野の所謂大政事家に對してすらも、尙ほ且つ堂々たる政事學者たる價値を有し、維新早創の際に於ける、萬般の施設に對して、尠からざる參考資料を與へたり。

斯の如くして、我が國民が、或は感嘆し、或は驚駭して、日增しに西洋接近の風潮を昂むるや、福澤は又「學問のすゝめ」一卷を著はし、更に再び時潮に棹して出で來れり。「學問のすゝめ」は彼の高弟小幡篤次郎の助力を得たる所ありと云ふと雖も、全體の思想文章より云へば、素より福澤獨得の著書たるを失はざるなり。本書は、明治五年二月第一編を出し、同九年十一月出せる第十七編を以て終り、發兌の全數は、凡そ七十萬冊にして僞版を合すれば、初編のみにて、約二十二萬冊を出せりと云ふ。以て本書が如何に我が國民に歡迎せられたるかを知るべし。

彼は又之に次いで「權論」と云ふを說き、楠正成は我が國にては古今に並びなき忠臣の鑑と稱せらるれども、湊川にて死なでもよきに死したるは、是れ權兵衞が揮にて首を縊れると同じ事なり」と論じ、苟も事の實際に益なくば、其行爲は毫も賞するに足らずとの意を述べ、更らに進んで、「忠臣二君に事へ、甲州武士が德川其他に事へて働きたるも天理人道に悖りたるにあらず。年若き寡婦が落髮して尼寺に入り、亡夫の菩提を弔ふも天理人道なり、再緣して子を生み能く其の子を敎育するも天理人道なり。今の世に兄弟同胞が夫婦たらば、天理人道に悖るならんと云へども、アダムとイブとの子供等は誰と緣組したるや、又日本書記に仁德天皇八田の皇女を皇后とすとあり。然るに皇女は天皇の妹なり。今より思へば不思議なれども其の時代には矢張り天理人道に基きしなり」云々と說きて、本邦古來の固陋なる道德を根本より覆へさんと企てたり。

「學問のすゝめ」及び上來引例せる數論文は、之を要するに天賦人權、萬民平等、功利實用の思想を最も平易なる文章を以て說述したるものにして、彼が如何なる思想を有し、又如何なる態度を以て當時の社會に對向したるかを知るに足るべく、維新早創の際に於て、斯る說を唱道して、聊かも忌憚する所なかりし其の識見と膽勇とは、眞に敬服すべき事なりと謂ふべし。

彼は眞個、獨立自尊の一平民にして、眼中政府なく又貴族なし。常に峻烈なる氣慨と雄健なる思想とを以て、終始人民を啓發する事に努めたり。彼の態度は飽く迄懷疑的破壞的にして、往々奇矯の譏ありしと雖も、當時の時世に對する應病與藥の言論としては、最も機宜に適へる態度なりしと謂ふべし。

西洋事情、學問のすゝめ、文明論の概略、分權論、民情一新、時事小言、會議辯、學者安心論、民間經濟錄、通貨論、通俗民權論、時事大勢論、帝室論、德育如何、兵論、學問の獨立、全國徵兵論、通俗外交論、日本婦人論、品行論、士人處世論、男女交際論、日本男子論、尊王論、國會の前途、國會難局の由來、治安小言、修業立志論、福翁百話、同百餘話、女大學評論、瘦我慢の說等に至るまで、仔細に之を點檢し來らば、其論旨一貫せず、自家撞着に陷れる點も少しとせざるなり。然りと雖も、懷疑的、破壞的、啓蒙改進的の彼の態度は、終始一貫して毫も渝らざりし所なり。彼の本領は、早く時世の趨く所を察し、速かに之に應ずる義論を立て、之に依つて能く天下を指導し得たる點にあり。彼は學者に非ざるが故に、一科

の學問に對して、專門的深き造詣を有したるにあらず。隨つて或る一事に對して終始一貫せる學理的主張を有せざりしは、素より當然の事にして、之を以て彼を評するの準繩となすことを得ざるなり。彼は徹頭徹尾經世家なり、社會改良論者なり。政治、經濟、道德、風俗、習慣、社會制度等、凡そ國民生活に關する總ての事項に對する凱切なる批評家なり。斯かるが故に、彼の論旨の一貫せざりしは、毫も咎むるに足らずと雖も、彼の態度の一貫して、淪らざりしは、玆に敢て稱揚せずんばあらざるなり。彼をして若し今日の世に在らしめば、或は破壞的態度を緩めて、建設的方面に力を注げるやも亦知るべからざるなり。

要するに、彼は臨機應變の才能に富み、時勢に應じて變化し、瞬時も一所に安定せざりし人と謂ふべし。

(二) 教育家としての福澤諭吉

福澤の教育上に於ける第一の功績は、言ふまでもなく、彼が慶應義塾を創設經營したる點に存せずんばあらず。

慶應義塾は實に彼が事業中の最大なるものにして、之を通じて社會に遺せる彼の功績は、又極めて多大なるものありて存す。彼が始めて鐵砲洲の奥平邸内に、私塾を開きたる當時にありては、唯蘭書を講ずるのみなりしが、安政六年五ヶ國條約の事成り、外人の出入繁くなるに從ひて、蘭書の到底時世に適せざるを察し、一轉して英文の教授を爲すに至れり。後ち芝區三田に移轉してよりは、入學の生徒、日毎に增加し來りければ、彼は塾中の生徒を大人、中年、童兒の三部に區分して之を寄宿舍に收容せり。蓋し教授上にありては、年齡の不同は敢て問ふ所にあらざれども、寄宿舍にありては、之を嚴別せざれば、大人は童兒の戲遊喧騷の爲めに其勉學を妨げられ、童兒は年長者の風を學びて、言語動作共に早熟の弊に陷り、甚だしきに至りては、飲酒喫煙の惡習にさへ感染するの恐れありと信じたるが故なり。寄宿舍には三部共に監督者を置き、之をして朝夕生徒の動靜を視察せしめたりき。是れ我が國に於ける寄宿舍制度の創始にして、福澤が卓見の一端を示す者なり。創立當時にありては原書の數不充分にてありければ、生徒は之を模寫して教授を受けたれども、慶應三年英國より原書數百部を得るに至りて、其面目遽かに一新し、物理、數學、地理、歷史、政治、經濟等、凡べて原書に依りて、教授する事を得るに至れり。

斯くて塾運年と共に發展し、廿三年には大學を設けて、理財、法律、文學の三科を置き、後更に政治科をも新設し、從來の正科は廿九年に、別科は卅一年に廢止し、廿九年新設したる高等科は卅年に廢止して、普通科を設置し、斯くて幼稚舍、普通部、大學部の連絡を整へ、大學部を以て其首腦となすに至れり。而して其傍系としては、廿三年以來簡易なる商業夜學校並に甲種程度の商工學校を設け、以て低度の實業教育を施せり。

現時に於ける慶應義塾は、創立以來六十餘年を經過し、本邦に於ける最も舊き學校の一にして、學風嚴立し、聲望他校を壓し、嶄然として私學界に頭角を露はすのみならず、亦同時に我が邦教育界の一異彩たるを失はざるなり。然も斯の如きは、皆實に福澤諭吉が遺せる功績の賜にして、國民の感謝措く能はざる所なり。

現時にありては、帝國大學あり、其他官立の實業專門學校等あり。實業界に人材を供給する所、決して一二にして止まらず。然りと雖も、今より數年前にありては、新知識を有する實業家を出す所は、殆んど全く一の慶應義塾あるのみにて、同塾が斯界に貢獻したる事の多大なるは、何人と雖も、非認する事を得ざるなり。曾て中上川彦次郎が、三井家の大立物となりて、內部の大改革を斷行し、慶應出身の俊才を拔擢して其要部に當て、爾來三井をして益々其大を致さしめたるが如き、或は三菱會社に莊田平五郎、豐川良平の巨頭ありて、部下に多くの慶應出身者を用ゐ、以て三菱をして愈々大ならしめたるが如き、皆共に福澤が斯界に遺せる賜の一たるに外ならず。

然して教育界にありても、亦實業界に相次いで、多くの人材を受けたるを知るべし。久しく帝國大學總長たりし渡邊洪基の如き、或は故の東京女子高等師範學校長たる高嶺秀夫の如き、或は曾て東京師範學校長たりし秋山恆太郎の如き、或は那珂通世、箕作佳吉、後藤牧太、三宅米吉、鎌田榮吉等の如き、皆共に既往若しくは現在に於て、教育界の重鎭となり、又は多大の貢獻を爲せる人々にして、これ亦福澤が賜の一たるに外ならざるなり。げにも福澤が慶應義塾を通じて、社會に遺せる功績は、至大至高なりと云はざるを得ざるなり。

福澤が明治の日本に遺せる第二の功績は、彼が社會教育者として、國民の開拓に從事したる事是なり。彼が西洋事情、學問のすゝめ、明六社に於ける講演等に依りて、當時の社會を指導したる事は、前述せる所に依りて明かなり。爾來彼は數十の著書に依りて、或は時事新報に據りて、常に啓蒙改進の精神を鼓吹し、我が國民をして、能く今

日の進歩あらしめたる大導師たりし一事は、彼が慶應義塾に於ける功績と相竝んで大書せらるべき事に屬す。天子樣を拜んでも眼の玉の飛び出る者にあらざる事を敎へたるは彼なり。官吏とて神樣にもあらず、穢多とて畜生にもあらず、人間は凡べて平等なる事を第一番に敎へたるも彼なり。金錢を得るは貴き仕事にして、金は世界の大勢力なる事を識認せしめ、實業の尊貴なる所以を敎へたるも彼なり。官位勳爵よりも、天爵の尊き所以を諭し、誠心誠意、己れの天職と、信ずる所に向つて其全力を盡す人の極めて尊き所以を敎へ、自ら模範者となりて、大博士の學位授與を固辭し、死に臨みて授爵の恩命をも辭退したるは彼なり。他人の世話を燒くよりも、先づ己れの一身を立つること、至當の順序なれとて、獨立自尊、自營自活の尊貴を敎へたるは彼なり。詩を作るより先づ畑を作れと喝破し、徒らに氣位のみ高くして、生活の何物たるを解せざる人の頗る卑しむべきを敎へたるは彼なり。人は主義信念を以て進退を終始し、權勢富貴の爲めに、其節操を枉ぐ可らざる事を敎へ、自ら率先して其模範者となり、權門に阿らず、富貴に淫まず、終生一途、市井の一平民を以て、其身を終れるは彼なり。實に彼は明治年間、最大の社會指導者なりき。

彼の第三の功績は、明治の初年に於て、多くの敎科書を供給したる點にあり。例へば彼の著たる童蒙敎草(五冊)、學問のすゝめ、窮理圖解(三冊)、西洋事情(十冊)、啓蒙手習の文等は、當時最も廣く諸學校の敎科書に用ゐられたるものなりとす。斯の如きは敢て彼の功績中に數ふに足らざるが如しと雖も、深く當時の事情に顧みれば、又之を看過すべきにあらざるなり。蓋し當時にありては、適當なる敎科書未だなく、新知識を藏める書籍、幾んど皆無の狀態にありければ、彼の此等の著が、當時完全に近きものとして社會に迎へられ、新敎育の振興に、多大の貢獻ありしや固より論を俟たざるなり。

二、中村正直

中村正直は江戸の人なり。初め漢學を修め、又桂川甫周に就いて蘭學を學び、次いて幕府の儒者となる。慶應三年英國に留學を命ぜられ、明治元年歸朝して英人スマイルスの著書の飜譯に從ふ。爾來西國立志編、西洋品行論等を公表し、以て大に個人的功利思想の普及に力む。其言ふ所、其說く所、嶄然として時流を擢き、眞個、福澤諭吉に對峙せる思想界の大立物にてありたりき。彼は十四年、大學敎授となりて漢學を

擔任し、其造詣深きの故を以て、後ち文學博士の學位を授けらる。彼れ本來の專門は漢學にありしと雖も、然かも彼の識見や頗る卓越、固より淺學頑蒙なる世俗の腐儒の類にあらざるなり。彼が明治五年飜譯公表したりし、ミルの「自由の理」は、卽ち彼の識見の一端を示せるものにして、又如何なる態度を以て彼が當時の我思想界に對ひたるを推知せしむるに足る。彼は開卷第一に「此の書はシヴイル、リバテー(人民の自由)卽ちソシヤル、リバテー(人倫交際上の自由)の理を論ず。卽ち仲間連中(卽ち政府)にて、各箇の人の上に施し行ふべき權勢は、如何なるものと云ふ本性を講明し、幷びに其權勢の限界を講明するもの也。」と冒頭して、旺んに民主思想の鼓吹に努めたり。

明治の初め、明六社に於て、「人民の精神を改造するの要を論ず」と題して、滔々數萬言の大演說をなし、我が邦家をして、眞の文明の域に進ましめんと欲せば、必ず先づ國民の精神を根本より改造し、道德心を敎養して、精神的基礎を据ゑざるべからずと喝破したるは、實に中村敬宇にてありき。一世滔々として、皮相的西洋文明に心醉し、唯有形上の開化に眩惑して模倣是れ努めんとする時に當り、「西洋の文明は、一朝一夕に湧き出でたるものにあらず、彼の地の今日あるは、人民の凡てが勞働を貴び、忍耐に富み、品行を謹み、業務に勉勵し、自由を貴び、獨立自助の精神を持し、以て社會の進步、民福の增進に努めたる結果に外ならず」と說破して、福澤の物質的文明論に相對し、飽く迄精神的文明論を主張したるも彼なりき。人心奔逸、權謀是れ事とし、一生吸々として僥倖を希ふの時に當り、「天下の事、固より多樣なりと雖も、成敗得失の機微を察すれば、皆な悉く誠僞の二字に決せざるはなし。此の根本の精神、政事上に發すれば公私の別となり、人格上に現はるれば善惡の別となり、知識上に現はるれば正邪の別となり、工藝に現はるれば巧拙の別となるなり」と論じて、僥倖射利の惡むべきを諭し、着實、誠實、規律、獨立是れ成功の祕法なりと敎へたるも彼なりき。徒らに大言壯語を吐き、一世擧つて勞働を卑むの時に當り、「眞正の學士は職業をなすを恥ぢず。之を恥づるは、眞正の學士にあらず。眞正の文人は、俗務をなすを嫌はず、之れを嫌ふは眞正の文人にあらず」と說きて、勞働自助の精神を鼓吹したるも彼なりき。

彼は斯の如き思想方針を以て、人心を開拓したるのみならず、又學校經營者として敎師として多大の貢獻をなしたりき。乃ち彼は五年六月、東京小石川の江戸川に同人社を開き、英語を以て泰西の新學を敎へたり。來り投ずる學生、一時數百の多きに

達し、終に東都三塾の一に敎へられたり。東都の三塾とは、福澤の慶應義塾、近藤の攻玉舍、中村の同人社を併稱したるものにして、當時泰西の學術を講ずる學校中、此三塾に及ぶもの殆んどなく、聲望正さに官學を壓倒するの慨ありき。

中村敬宇は、斯くの如くして學校敎育に熱心し、福澤諭吉と共に在野の二大先生と敬稱せらるゝに至れりき。然りと雖も、中村敬宇と福澤諭吉とは、其性格上より云へば大いに趣の異れるを知らずんばあらず。平民的道德を愛好し、之を鼓吹したる點に於ては、兩者酷く相似たりと雖も、其他の言行に至りては、概ね其方向を異にしたるを知らざるべからず。德富蘇峯嘗て此兩者を比較論評して曰く、「福澤君は奮鬪家なり、敬宇翁は然らず。福澤君半生の事業は破壞的にあり、則ち迷信、陋習、弊俗を罵倒、笑殺したるは其功業の重なる者たり、翁は然らず、福澤君は其片足を俗界に其片足を想界に投ぜり、翁は然らず。翁を以て福澤君に比すれば、宛かも岐阜提燈を以て、洋燈に對するの趣きあり。翁の同人社は慶應義塾の敵にあらず、翁の立志編、品行論は西洋事情、文明論の概略程直接に天下を動したるにはあらず、翁の同人社文學雜誌は、以て學問のすゝめに對すべくもあらず。翁は決して福澤君の好敵手にあらず、翁亦之れを願はず、翁は何人とも爭ふ所なし、何んぞ福澤君と爭はんや」と。是れ洵に至言なるべく、我輩亦然か信ぜざるを得ざるなり。福澤諭吉を以て、覇者なりとすれば、中村敬宇は王者なり。其奇拔にして嶄斷剛毅、警々諤々の論調を用ゐて、縱横無盡に天下を論ずることに至りては、福澤は幾んど天下一品の逸才にして、中村敬宇の及ぶ所にあらず。然りと雖も、雍容溫雅、泰然自若、言行一致、宛然聖賢の面影を有せる點に於ては、福澤又到底中村に及ぶべくもあらざるなり。是を以て同人社の出身者は、慶應義塾のそれの如く、融通豁達、奇才縱横、時世と共に變轉するの妙を有せずと雖も、深き自信を以て事に當り、常に內心の和平を保ちて、己れを處理する點に於ては、中村の門下また福澤門下の上にあり。是れ兩者の人格が、其門下に反映したるに外ならざる也。

學校敎育者としての福澤は、曾て一度も慶應義塾を離れたる事なしと雖も、彼が社會に與へる影響は、千變萬樣、殆んど端睨すべからざる者あり。中村敬宇の一生は、福澤の如く單一なる者にあらず。彼は始め德川氏の儒者たり、次いで英國留學生取締たり。同人社の先生たり。女子高等師範學校の攝理たり。帝國大學の敎授たり。元老院議官たり。東京市參事會員たり。貴族院議員たり。之を福澤に比すれば、進

退の複雜なること因より同日の談にあらず。然れども其社會に與へたる影響に至りては福澤に比して遙かに平々坦々たり。特に記すべき赫々の功なきと共に、又人より指摘せらるゝ程の過失あらざるなり。福澤の學は廣くして淺く、敬宇の學は狹くして深し。福澤は卓識なる文明の批評家にして、侃々諤々の警世家なり。然して敬宇は、溫厚篤實、純美の君子なり。彼は大哲學者にもあらず。唯だ一個の高潔なる善人なり。親切なる先生なり。福澤の思想は時々刻々に變化して、毫も一所に安定したる事なく、敬宇の思想は、數十年間大なる變化なく、又大なる波瀾あることなし。世人が支那を輕蔑したる時に於ても、彼は支那を侮るべからずと云へり。一世擧つて西洋に心醉し、羅馬字を以て國字に代へ、漢字漢學、全廢すべしと唱へたる時に於ても、彼は漢字不可廢論を唱へて、其の時潮に反對し、生徒の單に英書を學ぶ者は、其識力自ら限界ありて、其上に進む事能はず、漢籍に通ずる者に至りては、卽ち英書を讀むに方り、更に向上一路の工夫あり」と諭して、漢學の研究を慫慂したり。世人が保守的反動の大波に捲込まれたる時に於ても、彼は「漫りに杞憂を懷く勿れ」と說きて、基督敎を辯護せり。明治初年より二十年頃に至る我思想界には、潮流に幾多の干滿ありしに拘はらず、敬宇に於ては、風穩かに、潮平かに、常に一碧洋々たるを見たり。一度びは基督敎に入らんとせしも、遂に其敎會に籌を置かず、一度びは其敎外に出でたるも、全く其側を離るゝには至らざりき。彼は儒敎を以て頭腦の基礎を造り、基督敎を以て之を潤色し、遂に和平、醇粹、眞摯の君子となりたる者と謂ふべし。德富蘇峯、敬宇を評して曰く、「唯だ學んで倦まず、善を爲すを樂んで怠らず、言ふところ之を身に行ひ、行ふ所之を心に會し、心口一致、仰いで天に怍らず、俯して地に愧ぢず、萬人の朋友ありて、一人の敵なく、萬懷の和樂ありて、寸毫の咒詛なく、天を敬し、人を愛し、淸き生活を以て、一生を終始したるに至りては、翁の翁たる所以夫れ玆にある乎」と。蓋し敬宇に對する適評の言なりと謂ふべし。

之を要するに、福澤の胸中には、多少の策略あり。其言論には多少の掛引あり、方便あり。敬宇の言行には、其踉跡微塵も存せざるなり。福澤の慶應義塾は、年月とともに繁榮し、福澤死したる後に於ても、尙且つ益々發展の昌運を有するに反し、敬宇の同人社は、彼の生存中にありても、晩年頗る振はず、遂に終を全ふせずして閉鎖の厄運に際會す。これ全く兩者の性格が、事業の上に反映したるに外ならざるなり。蓋し福

澤は機略縱橫、事業經營の才幹を有すれども、中村は眞摯方正の一點張りにして、俗流に棹すの才能を有せざればなり。然りと雖も、未だ國家の敎育制度整はず、泰西の新學を授くる學校、極めて稀有なるの時に方り、中村の同人社が東都三塾の聲望を擔ひて、多くの青年子弟を收容し、幾多の新人材を社會に供給したる功績と、國民に對して向學自助の大精神を敎へたる功績とは、後世國民の感謝措く能はざる所なり。

三、新島襄

(一) 宗敎的道德敎育の開拓者

新島襄は上州安中の藩士にして、江戸の藩邸に生る。元治元治六月、二十一歲の時、國禁を犯して函館より外國船に搭乘して、米國に脫走し、ボストンに到りて、ハルディー(新島の乘船したる船の持主なり)の知遇を受け、約十年間其家庭に於て薰陶を受く。其間アムハルスト大學敎授シーリー及ウイリヤムス大學のマークホッキンス等に從ひて、神學を修め、最も新らしき思想と知識とを有する文明的宣敎師となりて、明治七年十二月歸朝す。彼が我が國に歸り來るや、先づ青年を集めて基督敎の精神を注入するの必要を感じ、遠大なる抱負の下に、同志社英學校を京都に起す。是れ我國に於ける基督敎的精神敎育の嚆矢にして明治敎育史上特筆大書すべきことに屬す。然れども當時本邦の狀態、尙ほ頑冥幼稚にてありければ、其設立許可を得るにも、少からず困難を感じたりと云ふ。是れ明治八年十一月のことなり。勿論是より以前に於ても、個人として宗敎的敎育に盡瘁し、若くは普通學校の一部に於て、宗敎的學科を授けたるものありしは二三にして止まらざりしと雖も、此等は固より宗敎主義の學校と稱することを得ず。

爾來彼の熱誠と努力とは、漸く世人の認むる所となり、世も亦日に月に進步開明に赴きければ、基督敎の何物たるかを領解し、新島の事業に對して、多大の同情を拂ふもの漸次增加し來り、九年九月には、既に同志社神學校を設くる迄に至れり。併かも此の年熊本洋學校の閉校せらるゝに際會しければ、デエンスの感化を受けたる横井、浮田、海老名、小崎等の一團來りて、同志社學校に投じたり。茲に於て同志社は多大の聲援を得、爾來長足の發展を遂げ、忽焉として我が敎育界に於ける、一方の大勢力たるに至れり。

新島が同志社に成功して漸次盛大に赴かんとするや、時恰かも歐米崇拜の氣風蕩然として一世を傾動する際にてありければ、基督教主義の學校は之れを好機として續々設立せらるゝに至れり。明治十二年メソヂスト教會の監督マクレー博士は、横濱に神學校を起し、十五年之を東京築地に移し、前年設置されたる東京英和學校と合併し、十六年更に赤坂青山に移轉す。嘗つて弘前の東奥義塾に教師たりし本多庸一を聘して、之が總理に任ぜしむ。今の青山學院是なり。東洋英和學校は、十七年米人カクラン博士の設立に係り、基督教主義の教育を施し來りしが、未だ十年を經ずして之を閉校す。明治學院は十九年六月、芝區白金に設置せられ、井深梶之助其校長となる。東北學は明治十九年、押川方義、米人ホーイ等相謀り、仙臺市に神學豫備校を設立したるにはじまり、二十三年始めて神學校を起し、翌年豫備校と合して、東北學院と改稱せり。關西學院は十九年米人ランバスが夜學校を神戸に開設したるに起因し、二十一年アトレー之を畫間學校となし、二十二年神學部を設けて關西學院と名く。鎮西學院は初めコブライ學校と稱し、長崎に設立せらる。此の外十八年九月には、東京に明治女學校、十九年には仙臺に宮城女學校及廣島に英和女學校、二十年には名古屋に清流女學校、二十二年には函館に清和女學校の設立せられたる等は、皆何れも此の機運に乘じて勃興したるものに外ならざるなり。而して新島は、實に此等の先覺者として、其の機運を助成せしめたる者なり。

新島の教育主義は、一言にして之を云へば、宗教的信仰に富み、高尚なる品性を有する文明的紳士を養成せんとするにてありたりき。素より彼は物質的生活を忘るゝには非ず。されど精神生活の高尚なるに比すれば、其價値遙かに輕く、之を以て教育の目的となすべきにあらずと思惟せり。德富蘇峯曾て新島を詳して曰く、『彼は宗教の神聖なる事を教へ、深く之を信仰せんことを諭したりと雖も、然も之が爲めに國家を忘れ、國體の精華を傷くるが如き人物を養成せざらんことに努力せり。是を以て彼は宗教家としては、啻に祈禱讃美を爲す宗教家たるのみならず、併せて上帝の眼中に於て、正義、人道とせらるゝ所を堅持する宗教家たらしめんと欲し、之れを政治家としては獨り利口なる政治家たるに止まらず、併せて民を愛し、國を愛するの政治家たらしめんと欲し、之を文學者としては、獨り能文雄筆なる文學者たるに止まらず、併せて正義を愛し、眞理を敬する誠實眞摯なる文學者たらしめんと欲し、之を事業家と

したては、獨り經營勞作の事業家たるのみならず、併せて公共の福祉を增進する事業家たらしめんと欲し、之を人民としては、獨り其衣食住に汲々たるのみならず、併せて其思想、精神、品行、氣風の上に於て、最も文明化せられたる高尙醇美の生活を得せしめんことを欲したり』と。彼既に斯の如き敎育上の大方針を有す。彼の門下より出づるもの、皆な彼が感化を受けざることを得んや。彼は實に明治の一大精神家にして福澤諭吉と共に我が新日本に於ける敎育界の大恩人なり。卽ち福澤は物質的、知識的泰西の文明を輸入し、之を愛好する多くの新人と滔々たる風潮とを誘成し、新島襄は精神的、內面的西洋の文明を輸入し、之を愛好する多くの紳士と、眞摯恭虔の國民的氣風を養ひたるなり。夫れ文明とは、物質的事物と精神的事象と渾然融和して、進步發展したる狀態の謂に外ならず。假しや獨り福澤諭吉のみありて、物質上の文明を輸入したりとするも、そは唯文明の外花のみ。如何に美麗なりと雖も、如何に便利なりと雖も、苟も其根幹を移し來つて之が涵養を爲さずんば、到底長へに榮ゆることを得ざるなり。又假しや獨り新島襄のみありて、精神的の文明を移植したりとするも、そは單に文明の根幹のみ。如何に强固なりとするも、苟も外木の善美なる枝を折り來つて、之に接木せずんば、到底速かに美化を開かしむること能はざるなり。然らば則ち福澤と新島とは、我が國文明の雙親にして國民の永久に忘る能はざる所なり。

新島襄の敎育上に於ける第一の功績は、言ふ迄もなく、同志社を創設して、精神的道德敎育を施したる點にあり。彼の生存期は、短かりしと雖も、彼が明治八年已來、約十五年の間に敎育養成したる有爲の人材は、其數決して尠しとせざるなり。彼は單に英語を敎授したるにはあらず。又單に傳道師のみを養成したるにあらず。如何なる社會、如何なる職業に從事するも、そは各人の勝手たるべく、彼に於て毫も干涉せざる所なり。彼の敎育の本旨とする所は、靑年に對して職業的知識技能を授けんとするにはあらで、人間としての基本的人格を陶冶せんとしたるにあり。是を以て彼の門下より出でたるもの、或は新聞記者となり、或は政治家となり、或は學者、敎育家となり、或は基督敎の傳道師となり、乃至は實業家となり、其響ふ所、二三にして止まらずと雖も、優麗なる品性と、高潔なる德操とを保たんと期する點に於ては、萬人殆んど一途に出で、我執迷妄、廉恥を顧みざる人物は、比較的少きを思はずんばあらず。彼の敎育方針は、彼れ自らが論じたる所によりて明かなり。其要に曰く、『試みに見よ、彼の歐

洲諸國の文運を煥發せし所以のものは他なし、要するに自由の擴張と、學問の發達と、政治の進歩と、道德の能力とに歸せずんば非ず。而して此四者を致す所以は何ぞや。乃ち基督敎の道德を主本として、日新の學術を攻究するに由るなり。今や我國專ら泰西の學風を振作し、新たに自由の天地を開拓せんと欲して、獨り其敎育を模倣に止まり、曾て其根柢たる純然の道德を收用せざるに於ては、吾人は決して其得べからざるを信ずるなり。……吾人曾て此に感ずる所あり、明治八年を以て同志の友と謀り、地を京都に卜し、同志社英學校を設立し、專ら泰西の學を修め、知德兩全の敎育を授くるを以て大旨とし、醇正有望なる人物を養成し、且つ以て世の惡習、弊風を矯正せんことを努めしに、未だ幾回の星霜を更めざるに、生徒の業は斐然として精進し、卒業の證を受くるもの頻々輩出するに至れり。然れども吾人の目的は、初めより大學專門部を設立し、學徒をして各々其長ずる所、其好む所に從ひて專門の學科を修めしめ、以て世運を補益せんとするにあり。……今や吾人は既に舊日本を出發して開進の海に浮べり。是より天下の公衆と自由の港に安着し、眞理の鄕を開拓し、以て新日本を經營せざるべからず。……今や我邦に於ては、歐米の文化を輸入するに際し、獨り物質上の文明を輸入し、理論上の文明を輸入し、衣食住を輸入し、鐵道を輸入し、汽船を輸入し、法律を輸入し、制度を輸入し、文學科學の思想を輸入し來れりと雖も、要するに其文明の由つて來る大本大體に至つては、未だ着手する所のものあらざるが如し。故に人心自から歸向する所を失ひ、唯だ智を翫び能を挾み、藝を衒うて世を渡らんとするに至り、而して此弊風を矯めんとする者なきにあらざれども、唯だ國民文弱の氣風を矯むるに汲々とし、所謂角を矯めて牛を殺し、枝を折りて幹を枯らすが如く、文明の弊風を矯めんと欲し、却つて敎育の目的は、人爲脅迫的に陷り、天眞爛漫として自由の中、自ら秩序を得、不羈の中、自ら制裁あり、卽ち獨自一己の見識を備へ、仰いで天に愧ぢず、俯して地に愧ぢず、自ら自個の手腕を勞して自個の運命を作爲するが如き、人物を敎養するに至つては、聊か缺くる所のものなきにあらず、是れ實に吾人が遺憾とする所なり。吾人の見る所を以てすれば、歐洲文明の現象繁多なりと雖も、概して之れを論ずれば、基督敎の文明にして、基督敎の主義は、血液の如く、萬事萬物に皆注入せざるはなし。而して我國に於ては、唯だ外形の文明を取つて之れを取らざるは、是れ猶ほ皮肉を取つて血液を遺すものにあらずや。今や我國の靑年は、皆泰西の文學を修

め、泰西の科學を修め、我國を扶植する第二の國民とならんとせり。然れども其教育たるや、歸着する所なく、皆其岐路に彷徨するものあるに似たり。吾人は之れを見て、實に我國將來の爲めに浩嘆に堪へざるものあり。吾人の不肖、決して爲す所なしと雖も、皇天若し吾人に幸を下し、世上の君子吾が志を助くるあらば、吾人不肖と雖も、必ず今日に於て、此不肖を忘れ此の大任に當らんと欲す。之れを要するに、吾人は敢て科學文學の知識を學習せしむるに止まらず、之を學習せしむるに加へて、更に此事の知識を運用するの品行と精神とを養成するは、決して區々たる理論、區々たる檢束法の能く爲す所にあらず。實に活ける力ある基督教主義にあらざれば能はざるを信ず』と。

是れに由りて之れを觀れば、新島は、新日本の新事業を大成するものは、純全の道德を主本とし、日新の學術を攻究する人に外ならずとし、之れを歐米の歴史に鑑み、基督教的道德を注入するは卽ち日本をして、歐米列國の伍伴に列せしむる所以なりと信じ居たるなり。彼は實利實用を輕んじたるにはあらず。されど是れ以上更に尊貴なるものゝ存在するを諭すに勉めたりき。彼は金錢の極めて大切なることを熟知せり。されど、決して貴き物なりとは信ぜざるなり。『金錢は忠實なる奴隷なれども、然も亦危險なる主人なり』とは、彼が門生を諭せる寸鐵の格言なりしと謂ふ。彼や實に本邦道德教育の率先者にして、明治教育に遺せる功績の主要點も亦此に存せずんばあらざるなり。

彼の第二の功績は、率先女學校を創設し、女子に泰西の新教育を施したる點にあり。同志社女學校は、明治九年の創立にして、襄の夫人及びスタークウエザア女史、先づ之れが教授の任に當りたり。新島は我日本をして、根柢鞏固なる文明の域に進ましめんには、先づ各人の家庭を改善し、女子をして家庭の醱酵素たらしむるの要ありと信じ、終に之れが設立を斷行したるなり。其炯眼にして熱心なる、眞に敬服に堪へざるなり。後來徐々として勃興し來りし女子教育が、新島の刺戟に基けるもの少なからざるを憶へば、彼の此方面に於ける功も、また特筆大書に價ひすべしと謂ふべし。

彼は以上の如くにして、學校教育に大なる功績を遺したり。されど、彼の全生涯は單に此學校教育のみを以て終りたるにはあらず。彼の他面の功績は、基督教を傳道して、道德の伸張、風教の振興に盡瘁したるにあり。然りと雖も此方面に於ける彼の

功績は、教育家として、之れを見るよりも、寧ろ宗教家として之れを論ずるの適當なるが故に、殊更茲に之れが陳述を省くべし。

(二) 新島、福澤、中村の人物比較

斯の如く大功ありし新島は、抑も如何なる人物にてありたるか。一言にて彼を評せば、彼は眞箇『熱』の化身にてありたりき。彼を評する形容詞にして、苟も『熱』の一字の附加せざるものあらず。是れ彼が福澤諭吉、中村敬宇等と、明かに區別し得らるる性格上の著明なる標幟なり。福澤は『活』を以て說明し、中村は『平』を以て說明し、新島は『熱』を以て說明す。是れ恐らく何人も異存を有せざる所ならん。若し夫れ思想上の區別に至りては、福澤は物質的實利主義の人にして、中村は功利說に儒教主義を打ち混じたる道德主義の人、而して新島は武士道的精神を以て、基督教的博愛主義に醇化せられたる人なり。既に然るが故に、思想上より見て此三者を區別するは敢て難しとせざるなり。然りと雖も、其性格上の區別に至りては、之れを明確に描寫することは頗る困難なり。唯僅かに『活』、『平』、『熱』の三字が稍々其大體を描し得て、大過なきを信じ得るのみ。若し亦別語を用ゐて此の三者を區別せば、福澤は知の人にして、中村は意の人、而して新島は情の人なりといふを以て適當なりとせん。然れども終に『活』、『平』、『熱』の區分法の適當なるには若かざるなり。

新島は精神的道德を鼓吹し、人心の改良に盡瘁したる點に於て、中村敬宇に酷似する所少しとせず。然りと雖も、中村は凡てに於て平靜なる性格と態度とを有す。彼の感化は健全にして醇美なれども、其影響する所思ひの外深刻ならず。何となれば彼は平和の人にして、進擊的、奮鬪的の人にあらざればなり。彼は一世の大導師たる日蓮の氣魄なく、時俗を薫倒する福澤の博辯なく、人を說伏せしむる新島の熱心なし。其人に接するや、春風駘蕩、草木の薫ずるが如く、其文章亦明晰暢達、雍々として大雅の趣きあり。然れども未だ氣焰萬丈、懦夫をして起たしむるの慨あらず。深遠の學理を諄々として反覆說明すれども、氣慨縱橫、風雲を叱咤するの趣きを缺げり。

新島は全く之に反す。彼の人に接するや、常に熱情を以て之に對し、彼の文章を草するや、言々句々、至誠の反映にあらざるはなし。此の故に、彼に於ては福澤諭吉の雄辯達文なく、中村敬宇の學識なしと雖も、人を感動せしめ、人を心服せしむる點に於ては、敢て前兩者に劣らざるなり。

新島の學識は、世の頗る疑問とする所なり。彼は海外にあること十餘年、其の間文明の新空氣を吸ひ、大學に神學を研究したりと雖も、其造詣の程度に至りては、必ずしも深刻なるにあらず。又必ずしも嶄新なるにあらず。彼は三位一體を信じ、又贖罪、死者の甦生、最後の審判等を信じたりき。是れ寧ろ正統派の信條に屬する者、組合派牧師の信奉せざる所なり。然りと雖も人は神學より勝れり。よしや舊き神學なりとするも、簡明純一、生命ある信仰を有する人によりて稱へらるゝに於ては、熱誠に乏しき人の口より說かるゝ新らしき神學よりも、人を感化し、感動せしむる事の幾倍なるを知らざるなり。是れ新島が、神學者としての造詣、餘りに深からざりしと言はるるにも拘はらず、多くの宣教師を統御し、多くの青年子弟を感化して、至誠ある人材を養成し得たる所以なり。

新島を追懷する者の言ふ所を聞くに、先づ其心に浮ぶ所の者は、彼の眼が常に涙を含み、彼の語調が常に少しく打顫ひたる點にありと云ふ。彼は決して雄辯家にはあらざりき。されど彼の演說するや、常に打顫ひたる語調と涙を含める眼とを以て、多くの人を感動せしめたり。彼は決して達辯の人にはあらざりき。されど彼が一たび口を開くや、一言一句、熱情を吐露し、其情調極に達するや、屢々流涕歔欷して、殆んど一語を發し能はざりき。所詮彼の演說は辯口の演說にあらずして、心の演說なり。『至誠は雄辯なり』との格言は、彼の演說に於て最も能く體現されたるを見るべし。彼の文章は、雄健懦夫を起たしむる點に於て、福澤の文章に如かず、雍々典雅の趣ある點に於て、亦敬宇の文章に及ばざるなり。然りと雖も、內に情火燃えて、外能く人の心奥に感ぜしむる點に於ては、彼亦前者に劣らざるなり。是れ彼の文章が、往々冗長の嫌ひあるにも拘らず、能く他をして感奮せしめたる所以なり。

彼の人物は人に依りて、其評必ずしも一ならず、內村鑑三は嘗て彼を評して

> 新島先生が忠實なる事業家たり、深く愛國心を懷いて、切に日本を思ひたる事、且つ基督教に深く歸依せし事等は、何人と雖も異議なかるべしし。唯だ一の疑ふべき點は、先生が宗教家たりしや否や是なり。先生と相會ふこと稀ならざりしが、神靈上の問題に關して、先生は常に緘默を守れり。樹は其果に依つて知らるとかや、然して先生の事業たる同志社が出せし人物には眞の宗教家を見る事稀なり。蓋し傳道者にして、政治家たる者はあれど、眞の宗教家に乏しきは事實なり。約言するに新島先生は誠實の士なり。愛國者なり。自己の事業に熱心なる人なりき。然も宗教家にてはあらざりき。

と言へり。横井時雄亦彼を評して曰く、

先生は或る意味に於て、宗教上の高山彦九郎なりき。主として感化を與へられたるは、其熱心たり、至誠たり、又先生が人格たりしに由る。先生は實踐躬行家なりき。而も高山の如く奇行家に非ず。文明的の紳士として又極めて平民的なりき。自己を重んずること強く、教義にも自説を執りて、動かざること固かりき。而も他の説を尊敬すること大にしてさながら自信と謙遜とを打つて一丸となしたる人格を有したりき。要するに、偉大なる人格にてありしなり。

と。而して海老名彈正は彼を評して言ふ、

先生逝いて先生を崇拜する者多きを加へたるは慶ぶべし。されど、先生は決して神には非ざりき。世に同志社の事業を目して、悉く新島先生の功と爲す者あるは過まてり。寧ろ多くの實務は、年長の門弟に依つて作され、又た計畫されたるもの、先生は我等に擁せられて、常に高く其の名を輝かしたるなりき。極言すれば、先生は爾く偉大ならず、たゞ至誠と熱涙とを以て、絶えず人心を收攬し得たる一箇愛國の士のみ。同志社當初の根柢を作りたるは、多く熊本バンド一派の貢獻せる所なり。

と。陸奥宗光は亦謂ふ、

新島氏は宗教家たり、殊に博愛主義の基督教徒たり。又夙に米國に學びし讀書家として且つ教育者として世に識らる。然れども其根本の性質は熱烈なる愛國者なり。一見熱烈なる宗教家の如きも、是と同時に、非常なる愛國者なり。人を愛すると共に國を愛するの情に燃ゆるの人なり。學才の秀でたるに非ず、世才の長けたるに非ず、唯だ此の一誠心一誠意を以て人格の基礎と爲せり。余は一個の政事家に過ぎずと雖も、新島氏の精神に動かされて幾分の助力を爲さゞるを得ざるに至れり。蓋し氏はポールの宗教家を以て、靖獻遺言の作者に加味したるものか。

と。夫れ然り、諸家の評必ずしも適中せざるにあらず。されど亦悉く適中したるにもあらず。内村が新島を評して誠實の士なり、愛國者なり、自己の事業に熱心なる人なりと言へるは、最も能く其眞を穿てる者なりと雖も、彼が新島を以て宗教家にあらずとなせるの一事は、其評敢て當らざるが如し。蓋し内村の意は、新島が神學上の造詣に乏しく、同志社が純粋の宗教者を出す事稀なりしを訝かりしものならん。然りと雖も、既に前にも述べたるが如く、新島が神學上の造詣に乏しかりし一事は、未だ以つて彼を宗教家ならざりしと言ふの理由とならず。然して又同志社が純粋なる宗教者を出さゞりし一事も、深く彼の宗教心を揣摩するの理由とはならざるなり。蓋し同志社に對する彼の教育方針を穿鑿せば、釋然として首肯せしむるものゝ存すればなり。彼嘗て同志者卒業生に餞して曰く、『日本の爲めに死し、日本の蒼生を救ふ

べき重任を負へる者は、實に諸君に外ならず。諸君幸に日本國の爲めに、日本蒼生の爲めに、一死を惜む勿れ……今や我國に智者あり、學者あり、官吏あり、新聞記者あり。然れども彼等は未だ以て天下を經營するに足らざるなり。諸君は自ら進んで天下を經營する任に當らざるべからず。諸君願くは天下の爲めに死せよ、是れ襄の切に望み偏に希ふ所なり』と。此の數語や寔に能く彼の敎育方針を吐露したる者と謂ふべし。彼れは日本國家の爲めに死し、自ら進んで天下を經營せよとは諭したれ、未だ某種の職業に從事して、其職責を果せよとは勸めざりしなり。宣敎師となるも可なり。學校敎師となるも可なり。實業家となるも可なり。新聞記者、政治家となるも可なり。學者、官吏となるも亦可なり。斯の如きは各人の任意選擇すべき事に屬し、彼の敢へて希望的干涉を試みざりし所なり。彼が同志社を設けたるは、單に宣敎師を養成せんが爲めには非ず。眼中殆んど國家を置かざる極端なる宗敎家を養成せんが爲めにはあらざるなり。彼は唯だ新知識と誠實なる精神とを具へて、社會の文明、人類の幸福に貢獻する人物を養成せんと欲したるなり。內村未だ十分新島の心事を解する者にあらざるなり。橫井時雄の評言中、『先生は實踐躬行家なりき。

文明的の紳士にして又極めて平民的なりき。自信と謙遜とを打つて一丸と爲したる人格を有したりき』の數語や、海老名の評言中、『先生は唯だ至誠と熱淚とを以て、絕えず人心を收攬し得たる一個愛國の士のみ』と云へる數句や、或は又陸奧宗光の評言中、『新島氏は宗敎家たり。殊に博愛主義の基督敎徒たり。然れども其根本の性質は、熱烈なる愛國者なり。學才の秀でたるにあらず、世才の長けたるにあらず、唯だ一誠心、一誠意を以て、人格の基礎となせり』と謂へるが如きは、恐らくは皆新島を知れる者の言辭なりとせん。新島は眞に熱烈なる愛國者にてありたりき。彼は日本國を愛し、天子を敬愛する點に於て、高山彦九郎、林子平、蒲生君平、佐久間象山、吉田松陰の數者に比するも、毫も後へに瞠若たる者にはあらざりき。然りと雖も、彼は此等數者の如く、單に妄情狂火に富める所謂愛國者にはあらず。內外の文明を比較々量し、彼此の長短を察知し、敎育的、精神的方策を用ゐて、我が國家を隆榮せしめんとする愛國者にてありき。

彼は畢竟するに宗敎家にして、愛國者を兼ねたる者なり。武士的精神に基督敎的感化を加へたる者なり。世の所謂愛國者にも、宗敎家にも似ざる所の多きや素より

知るべきのみ。之を要するに、福澤諭吉は豆を嚙んで英雄を罵る物徂徠の如く、中村敬宇は平靜伊藤仁齋の如く、而して新島襄は情熱に富める山崎闇齋の如し。獨立自由を敎へ、政府の力を借らずして、別に一個の私學を起し、己れの主義方針に基いて、有爲の人材を養成したる點に於ては三者共に一なり。然れども三者死して其後を顧みれば、福澤の慶應義塾は隆々として榮え、中村の同人社は夙に絕えて其影もなく、然して新島の同志社は、今尙ほ存在すと雖も、新島在生中の如く多大の聲望を有するに非ず。卒業生も亦往時の如く有爲の人材たるもの漸く少し。此點に於ては、三者が國家社會に及ぼせる影響の大小深淺、必ずしも同一ならざるを認めずんばあらざるなり。

若し夫れ、社會的敎化、國民精神の開拓に至りては、三者各々其嚮ふ所の異れるを見る。尤も中村と新島とは、其方向相似たる點少しとせざれども、中村が嘗て、老牛車に駕して急坂を上るの圖に題し、『進歩難兮進歩遲、遂不退兮遂不息、不問千里更萬里、能自極南達極北』と書して、人間立身の大法を諭したるに反し、新島が『一戰して已む勿れ、再戰して已む勿れ、刀折れ矢盡きて已む勿れ、骨挫け血枯れて已むべきのみ、眞理の爲めに抛つにあらずんば、吾人の生命も亦無用にあらずや』と說きて、人が人生に處するの覺悟を諭したるに徵せば、此兩者も亦其根本の思想に於て、殆んど全く反對の方針を以て、人を導きたるを見るべし。福澤、中村、新島の思想人物、夫れ斯の如く異れり。然りと雖も、彼等が明治文明に遺せる功績は、共に等しく偉大にして、之を追頌すべき大敎育家となすに於て、天下殆んど一人の異議者あらざるべきなり。

四、近藤眞琴

(一) 航海土木敎育の開拓者

近藤眞琴は、志摩國鳥羽の藩士にして、天保二年九月、江戸麴町の藩邸に生る。四歲にして父を喪ひ、始め母の膝下にありて、大學論語の素讀を學ぶ。嘉永年間、米艦浦賀に來るに及んで蘭學に志し、次いで大村益次郎の塾に入りて兵學を修む。既にして窃に感ずる所あり、文久三年、矢田堀景藏、荒井郁之助に從ひて航海術を研究し、同年更に幕府の軍艦操練所に通學す。當時航海術を研究せんには、先づ蘭學を修むるの必要ありければ、近藤と共に軍艦操練所に通學する者にして、近藤につきて蘭學の敎へ、

を乞ふもの多かりき。是を以て近藤は餘暇を以て、蘭學を敎授し、兼ねて數學航海術をも授くるに至れりき。是れ攻玉舍の起原なりとす。明治元年、藩主に從ひて鳥羽に歸るに及んで、一旦家塾を解散したりしと雖も、同二年兵部省に徵されて上京し、海軍操練所出仕を命ぜらるゝに至りて、彼れ則ち家塾を再興し、蘭學及び航海術を敎授したりけるに、門下日を追うて增加し、自宅にては漸く狹隘を告ぐるに至りたりき。兵部省之を聞きて築地海軍操練所要地に官宅を下賜し、特に生徒の授業及び寄宿に充つべき濶大の連房を附設せり。蓋し當時は海員養成に關する國家の施設未だ整はざりければ、兵部省は彼をして其の缺を補はしめんと欲したるなり。明治四年芝新錢座町の校舍を福澤諭吉より購求し、此所に移轉するに及んで舍運漸く榮え、爾來駸々として其隆昌を來すに至れり。

海軍兵學校は、明治三年築地に設立せられたりと雖も、當時は未だ其卒業生寡少なりしを以て、攻玉舍より海軍將校を採用したるもの少しとせず。而して海軍以外の海員に至りては、幾んど全く攻玉舍出身者を以て其全部を占めたるは言を俟たざる所なり。近藤が攻玉舍を再興し、降つて八年航海測量練習所を設立したる當時にありては、三菱會社が政府の補助によりて經營せる唯だ一つの商船學校ありしのみにて、他に海員を養成する所一もあらざりしなり。朝野の海事思想、斯の如く幼稚なる時に當り、彼は私費を以て、海員養成に力を盡す、其眼識の高きを認むると共に、彼の功績の大なるを認めずんばあらざるなり。彼は航海練習所の開所式に於て、其趣旨を述べて左の如く言へり。

國勢の隆替は物力の豐歉に由り、物力の豐歉は、財路の通塞に由り、而して財路の通塞は、航海の興廢に由る。然らば則ち航海は國勢を隆盛にする所以の基なり。之を史冊に徵するに、神代に在りて、既に素盞嗚尊の船を稱して浮寶と爲し、大に船材を培植せしめ給ふの擧あり。人皇に至るに及んで、歷世に造船の詔あり、以て海運を興して斯民に便す、古先聖王の其務に勤め給ふや、以て見るべし。師を三韓に出し使を隋唐に遣はし、皇威を海外に伸べて、四隣を震懾せしむるも寔に所以あるなり。若し夫れ歐洲に在りて、非尼西亞の上世に富盛なりしは、航海通商に長じて、地中海の利を占めたればなり。諸耳曼の中世に强大なりしは、海王の名を負へばなり。自是厥後、葡萄牙の始めて喜望峰を廻過し、印度洋の水路を開き、西班牙の始め

て亞米利加を檢出し、又岬角より轉じて太平洋に入るが如き、多く新地を得て皆其の威力を張れり。和蘭の豪斯多剌里を發見し及び東印度公司を立つる如き、亦其名聲を著せり。之に次で英國あり、是れ其大勢なり。是に由て之を觀れば、航海の業は必ず勉めざるべからず、測量の科は先づ修めざるべからず。是れ僕が平常の所見にして、玆に此の塾を設くる所以なり。夫れ蒭と蘭とは互に先後ありと雖も、皆其業を保持すること能はずして、以て其の氣焰を斂縮す。而して英國は其勢に乘じて獨り洋海の利權を擅さゝにし、以て今日の炎々を致せり。航海の國勢に關する亦大ならずや。蓋し英の國たるや、西隅の島海のみ。土瘦せ民素と貧し、其初めや、大陸に交通して僅かに自ら瞻するに過ぎず。然れども漸々にして進み、竟に能く屬地を五洲に徧らし、物産の饒き、貿易の繁き、瘦土も沃壤に同じく、貧民も富庶を成す所以のものは、特に航海の業を特んでなり。今皇國の東洋に在るや、恰も英國の西洋に在るが如し、形勢髣髴として幅員伯仲し、而して土壤膏腴にして、人口繁殖するは則ち之れに過ぐるあり。第一に財路の尙塞がある、物力の尙ほ歉くるある、以て貧富强弱の相懸隔するを致す。若し我をして亦た鯨濤萬里を視て、比隣の如くするを得せしめば、則ち以て東西の貨を換へ、彼此の利を分つべし。乃ち國勢も何ぞ敢て若かく相軒輊せむ。是れ航海の業の勤めざるべからざる所以なり。

然り而して民間常用の海船は、僅かに沿海遭運の用に供して、固より遠大の圖ある に非ず。其の制たる矮少脆弱にして、之れを操縱するに無賴の賤民を以てす。學なく術なく徒に慣習を恃み、山容島形を以て針路を取るに過ぎず。或は風に遭ふて漂流し、水天一碧、浩渺無限の際に至らば茫乎として失措し、之れを奈何ともすること能はず、天象を測り經緯を推すの方の如きは、曾て夢想の到らざる所なり。所謂る航海の業を勤むるものは、豈此くの如くにして足らんや。又堅牢の大舶と老練の舵工と、之れなきに非ずと雖も、其數に限りあり、以て盡く環海の利權を收むる能はず。却つて遠來の歐米に制せらる、豈遺憾ならずや。是れ航海、測量の科の修めざるべからざる所以なり。僕の航海の業に從事するや年あり。而して測量の一科に於て力を用ふる最も多し。方今綱紀皇張し、遠洋航海も亦漸く盛なるに會す。是れ誠に吾輩の常に宿志を奮勵して、報效を圖るべきの秋なり。抑も國勢の隆替は、氣運に在らずして、而して人爲に在り、勢は自然と雖も、之れを制するものは

人なり。貧富强弱も偶然にして來らず。然らば卽ち今の勢を制するは當に如何にすべきや、吾輩の此に孜々たるも、其れ或は萬一に裨益せん。願くは諸君と夙夜に勉勵して以て愛國の實を傚されんことを。

と。以て彼の海軍敎育に關する抱負の遠大なるを見るべく、彼の功績の主要點も亦此に存するを知るべし。

明治六年三月、攻玉舍に女子科を起し、又幼稚園を設け、手工科、音樂等を加設したることも、彼が敎育界に遺せる功績の一なり、然れども尙是よりも更に大なる功績は、彼が蘭人ビラルの航海書を譯し、又航海敎授術、颶風論、英國海砲術全書、流潮論、便路航法、造船論略、天文航海術敎授書、彈道論等の著書を出して、最も熱心に海軍思想の普及と吹鼓とに盡瘁し、斯界に對して、多大の刺戟を與へたる點にあり。彼の功績の第二は、當さに此點に存するを知らずんばあらず。

晩年假名の會に盡力する所あり。則ち彼は、吉原重俊、高崎正風、西德次郎、福羽美靜、丸山作樂、大槻文彥等と共に、『かなのとも』と稱する團體を組織して假名專用論を主張し、十六年三月其主意書を發表したりき。彼が假名を以て著述せる『ことばのその』は、本邦に於ける國語字典の嚆矢にして、其功績敢て少なるにはあらざれども、彼が獨力を以て、土木科及數學專修科を設置し、鐵道、架橋、治水等に關する學科を授け、此方面に對して多數の人材を供給したるには若かざるなり。而して此點は卽かて彼が功績の第三點なり。

(二) 彼の思想人物

斯の如き功績を遺せる近藤眞琴は、果して如何なる人物にてありしか。彼は福澤の如く活動家にあらず、新島の如く熱情家にあらず。而してまた中村敬宇の如く學者的思想家にもあらざるなり。彼は徹頭徹尾靜思の人にして、沈默寡言の實行家なり。議論を好まざるが故に、人と衝突することも亦あらず。彼の門生嘗て福澤を罵りて曰く、『福澤先生は、天皇陛下も權兵衞も、其有する權利は均等なりと敎へ、金錢を得ることのみを受けて、人間を俗界に導かんとす。是れ甚だ奇怪の至りなり、先生以て如何となす』と。彼徐ろに之れに答へて謂ふ、『福澤先生の敎授さるゝ事柄は、日本國家に取つて最も緊要なることに屬す。あの方面の人に向ては、福澤先生の敎へ方を以て進まざるべからず。世の中は諸子が思ふが如き單純なるものにあらず。

多くの人が幾多の方面に向つて盡力し、茲に始めて社會の進歩を助くるなり。惟ふに福澤先生といひ、中村先生といひ、皆何れも時代の先覺者にして、諸子のいふが如き、淺見、狷介の人物にあらず。若し萬一にも諸子のいふ所適中し、余の思ふ所過ちたらんには、余は福澤先生を呼ぶに先生の二字を省き、爾後必ず福澤と呼び附けになすべし』と。而して又常に曰く、『福澤先生、中村先生等は、我等よりも學識深き人なり、從つて夫等先生の盡力せらるゝ方面は、我等安心して之を托するに足る。是れを以て、我等は別途の方面に向つて力を注ぐの要あり……熟ら惟ふに航海業、土木業に從事するものは、常に船頭、土方、馬方などゝ稱して、世俗は之れを賤み嫌ふの傾きあり。然りと雖も、此等の事業は、國家の上より見て、最も緊要なる事に屬す。名譽、利益等よりいへば、他の方面に入るに若かずと雖も、社會の爲めよりいへば、一日も勿諸に附すべき事務にあらず。我等同志が今後盡すべきは、宜しく此方面たるべし』と。是れ彼が終世航海及土木教育に力を盡したる所以なり。又以て彼の自信深く、志操の崇高堅實なるを想ふべし。

五、津田仙

（農業教育の開拓者）

津田仙は下總國佐倉の人、天保八年其鄉里に生まる。八歳にして藩の東西塾に入り、十五歳にして溫故堂に入る。時恰も維新前にして、國内騷擾の際なりければ、彼は十五歳にして江戸海岸衞戍隊の一員となれり。既にして二十歳に達し、洋學を研究するの急務を覺り、百事を抛ちて江戸に出で、手塚建藏の蘭學塾に入りて蘭學を研究し、後伊藤貫齋の塾に入りて英學を學べり。夫れより後彼は幕府の外國方となりて飜譯の事に從ひ、又使節に隨伴して米國に渡航したりしに、彼の地の農業大規模にて經營せられ、到底本邦農業の及ぶ所にあらざるを知り、歸朝後決然官を辭して、農界に身を投ずるに至れり。爾後彼は麻布古河に數段歩の地を求めて、西洋の蔬菜の栽培を試み、或は芝三田に地を卜して、蔬菜を作るの計劃を立て、大に種子の輸入、草木の注文等に熱中したりしが、明治六年に至り、墺國ウキンナーに世界大博覽會の開催ありければ、彼れ亦使節に從ひて渡航し、公務終了に及びて、蘭人ホーイブリングに就きて

農學を研究し、泰西の新知識を修めて歸朝せり。

斯くて後、間もなく彼は、『農業三事』なる著書を公にしたるに、忽ち世の大に歡迎する所となれり。蓋し本邦に於ける科學的農業書の嚆矢なり。彼は亦明治八年、麻布に『學農社』と稱する私塾を起し、農學に志ある後進青年を敎育して、數多知名の高弟を出せり。是れ本邦に於ける農業敎育の嚆矢にして、學校に於て農學を敎授することを始めて我國民に敎へたるものなり。然して明治九年には、農業雜誌(本邦農業雜誌の嚆矢也)を發行して、當業者を指導し、或は巡回敎師となりて、各地に新理を講演し、大に斯業の改良進歩を計れり。彼が一生を通じて、敎育的に我が農業界を裨益したる事は頗る多く、眞に明治農業界の大恩人にてありき。

然りと雖も彼の學者なりしや否やは、世の頗る疑問とする所なり。彼が一代の傑作たる『農業三事』の如きも、彼自らの獨創の著書にはあらずして、彼が師事せる蘭人ホーイブリングの學說を其儘邦字もて之を記述したるに過ぎずと謂ふ者あり。其眞僞は素より專門家にあらざる我輩の看破し得る所にあらず。若し世人の云ふ所にして眞なりとせば、津田の學識必ずしも深しと云ふ事を得ず。然りと雖も、彼の歷史上に遺せる功績は此一事の爲めに沒却せらるべきにあらざるなり。何となれば、泰西先輩の學說を體よく剽竊し、若しくは之に多少の潤色を施して、恰も自己の創見なるかの如く吹聽するもの、本邦學者中敢て珍らしとせず、若し嚴密の眼を以て、此等の事を穿鑿するに於ては、所謂津田仙の所爲に類する者、滔々として皆然るを常とすればなり。果して然らば、一の世評を以て、津田仙の功績を疑ふは餘りに沒道理にして、他の學者、識者の功績も、亦多少の疑を挿むの餘地あるや言を俟たざるなり。何ぞ獨り津田仙のみを貶する道理ありとせんや。況んや津田の剽竊云々も、未だ容易に眞を置き得ざるに於てをや。

由來本邦の農業は、在來の方式と經驗の力のみにて經營せられ、之が當業者は、一口に百姓と稱して輕侮せらるゝにてありければ、農業を學理的に研究し、之が經營に新の學理を應用するが如きは、邦人の夢にだも想到せざる所なり。此時に方りて、津田の『農業三事』なる科學的農業書出づ。其農界を裨益したるや勿論にして、本邦の農業が最近三十年間に大なる發展進歩を遂げたるも、其淵源を尋ぬれば、彼の『農業三事』が與つて大に力ありしを知らざるべからず。

彼が獨力を以て經營したる學農社は、其規模大なりしに非ず。學校としての設備等より言へば、慶應義塾、同志社及攻玉社等に比して、遙かに遜色ありしは素より論を俟たざるなり。然りと雖も、世人が未だ農業の何物たるを解せず、農業教育の機關未だ絶無なる時に當りて、彼は能く農業の緊要なるを知り、幾多の困難と戰ひて學農社を經營し、有爲の人材を養成したる功績は、後人の感謝敬服措き能はざる所なり。

本邦最初の農學校としては、先づ指を札幌農學校に屈せざるべからず。同校は明治五年四月、開拓使の設立する所にして、始め東京芝區增上寺内に假校舍を置けり。七年農學專門科を設け、八年八月北海道に移して、假學校を札幌學校と改稱し、九年七月米國マッサチユーセッツ州農學校の規模に倣ひ、大改正を施して修業年限を四ヶ年とし、農學及之に關聯する諸學科を教授する事となし、卒業生には農學士の稱號を授與するの制を定む。又豫備科を創設し、同年八月札幌農學校と改稱し、爾來幾多の變遷を經て、現時の東北帝國大學札幌農科大學となる。

駒場農學校は、札幌農學校に次いで創設せられたる官立學校なり。同校は明治七年四月、新宿勸業試驗場内に、農事修學場を設くる事を決議したるに濫觴し、其の十月農學校と改稱し、十九年四月山林學校を合併して、東京農林學校と稱し、二十三年六月、東京帝國大學の一分科大學となる。此等二個の官立農學校は、設備の點より云ふも、人材を出したる點よりり云ふも、津田仙の學農社に比して、優ると萬々なるは敢て論を俟たず。然りと雖も、此等の學校たる政府の創設する所にして、其の經營に難易の差ある、素より私人の設立せる者と同日に談じ能はざるなり。是を以て津田仙の學農社が前二校に比して、遙かに遜色を有すとするも、之が爲めに彼の功績の偉大なりしを非認する事由とはならざるなり。殊に札幌農學校の中心人物たりし米人クラークと、駒場農學校の中心人物たりし、船津傳次平とを以て、學農社の津田仙に比す、其の農學上の造詣に於ては、津田は當さに其首位に居るべき人物なり。彼が門下より農界の先覺者を出せる、亦怪しむに足らざるなり。

人或は曰く、彼の學農社が、慶應義塾、同志社、攻玉社の如く、終りを全ふするに至らざりしは、彼の聲望伎倆が福澤、近藤等に比して遙かに劣れる證なりと。夫れ或は然らん。然りと雖も彼の學農社が他塾の如く榮ゆること能はざりし所以のものは、世人が未だ農業の貴きを知らず、之を研究したりとて、一身上の榮達を圖る事能はざるが

故に、此に入學する者他塾の如く多數ならざりしに由るのみ。況んや學農社の後身は、獸醫學校として、今尚存在し嗣子津田次郎に依りて經營されつゝあるに於てをや。

六、西村茂樹

(一) 國粹道德教育の大恩人

明治初期、政治界に於ける自由黨一派が、急激なる革命思想を懷いて、自由民權の大運動を演ずるや、政府の御用黨たる帝政黨起り、保守主義を唱道して、野黨の運動に反抗したりしが、是と前後して、社會上にありても、亦極端なる歐化主義に反對する保守的團體起れり。是れを日本弘道會となす。弘道會は西村茂樹の創唱する所にして、明治九年の創立なり。

西村茂樹は下總佐倉の藩士にして、幼時藩校に入りて文武を修め、長じて安井息軒、大塚同庵、佐久間象山等に從ひて學を修め、明治五年五月東京に出で、深川に家塾を開きて青年を教育し、傍ら著述に從へり。時恰も大木喬任に依りて、學制は頒布せられたりしが、其言ふ所を聞くに、專ら治產昌業の事のみにして、一も忠孝仁義の道德を說示しあらざりければ、西村は大に之を憂ひ、斯の如くして國民を教育せば、後來必ず弊害を生ずべしと慨嘆せり。次いで六年には福澤諭吉、加藤弘之等と共に、森有禮が創唱せる明六社に入りて、人心風俗の改良に盡瘁し、九年三月には、日本橋吳服町相濟社に、有志と會合して、道德振興の事を謀り、次で銀座二丁目の幸福安全社の樓上を其集會所と定め、每月一回會合して、修身の道を講究する事となし、社名を東京修身學社と稱へたり。爾來彼は道德書を飜譯出版し、(智氏家訓最も有名なり)、十年會場を神田美土代町の共學社講堂に移し、十三年春に至つて雜誌『修身學社叢說』を出し(每月一回發行、三十八號に至り廢刊)、十四年三月よりは、每回道德の講筵を開き、廣く公衆の聽講を許したり。十七年三月從來の東京修身學社を、日本講道會と改め、翌月役員選擧に際して、彼れ自ら會長に擧げられ、南摩綱紀之が副會長となれり。斯くて同年六月には、東京大學講義室に於て、道德を講演する事となり、西村、南摩の外木村一步、嘉納治五郎等も其講師の任に當れり。又同時に雜誌を『弘道會叢說』と改め六冊を以て一編とし、第三編迄發行せり。

斯くの如くして、彼は終始一貫道德の振作に盡瘁し、日本固有の民情と國體の精粹

とを維持せんと努めたり。其思想の系統より云へば、素より保守派に屬し、講道會は恰も政治界に於ける帝政黨と略ぼ同一の思想を鼓吹したる者にてありたりき。

然れども十八年後に至り、條約改正の事に原因して、改府自ら進んで歐化主義を鼓吹するに及んでは、保守思想を標傍する講道會は、爲めに一大頓挫を來し、會勢甚だ振はずなりければ、西村は十九年十二月二十七日より、三日間に渉り、大學講堂に於て道德に關する大演說をなせり。其の演題は『日本道德論』と稱し、第一段に於て、道德の敎は現今本邦に於て如何ほど大切なるかを論じ、第二段に於て、現今本邦の道德の敎は世敎に據るべきか、世外敎に據るべきかを說き、第三段に於て世敎は何物を用ふるを宜しとすべきかを述べ、第四段に於て、道德を實行するは何れの方法に據るべきかを示し、第五段に於て、道德會にて主として行ふべきは何事ぞと冒頭して妄論を破り、陋俗を矯正し、防護の法を立て、善事を勸め、國民の品性を造るにありと結論せり。

次で二十年六月二十六日、本會の再興を企て、同九月十一日會名を『日本弘道會』と改め、十二月二十六日『弘道雜誌』を發行し、併せて通俗講談會を開く事となしけるが、雜誌十一號に於て、外人に土地所有權を與ふる事の不可なることを論じ、爲めに發行を禁止せられたれば、更に『日本弘道會叢記』を發刊し、其十二月十五日には、西村の著『日本弘道會大意』を刊行し、以て着々事業を進行せしむるに至れり。西村及び彼の主宰する弘道會が、國民思想を中正に導かんとして、斯の如く奮戰力鬪して廿一年に至れば、時勢漸く變轉して、國粹保存主義起り、茲に歐化思想の反動隆盛なるに至れり。

國粹保存主義の稱へられたる頃より、時代思想は漸く其方向を轉じ、國民的意識は、漸く其自覺の域に進まんとする傾向を現はし來れり。是を以て人動もすれば、雜誌『日本人』に依りて代表せられたる國粹保存主義の勃興を以て、歐化主義反動の最魁と爲すもの少からず。されど保守思想を唱道したる時の早晩より云へば、弘道會こそ最も其先驅をなせる者にして、國粹保存主義は、遙かに其後に生れたるものなり。

斯くて保守的思想の傾向は、著るしく頭角を現はし來り、二十餘年間、新時勢、新敎育を經驗して、窃かに其弊害を自覺したる者は奮然として起つに至れり。茲に於てか、暫く萎靡振はざりし弘道會も、遽然元氣を回復し、揚々として保守の大勢に鞭つて進み來れり。即ち二十三年一月には日本弘道會要領十條を定め、時の道德界に對して大に爲すあらんとする意氣を示せり。其全文は左の如くにして甲乙二號あり。甲

號は動的(積極的)道德を規定したるものにして、乙號は靜的(消極的)道德の準繩を示したるものなり。

大日本弘道會要領(甲號)

一 忠孝を重んずべし。神明を敬ふべし。
二 皇室を尊ぶべし。本國を大切にすべし。
三 國法を守るべし。國益を圖るべし。
四 學問を勉むべし。身體を强健にすべし。
五 家業を勵むべし。節儉を守るべし。
六 家內和睦すべし。同鄕相助くべし。
七 信義を守るべし。慈善を行ふべし。
八 人の害をなすべからず。非道の財を貪るべからず。
九 酒色に溺るべからず。惡き風俗に染るべからず。
十 宗敎を信ずるは自由なりと雖も本國の害となるべき宗敎は信ずべからず。

同要領(乙號)

一 世界の形勢を察する事。
二 國家の將來を慮る事。
三 政治の良否を觀る事。
四 國家の經濟を知る事。
五 敎育の適否を考ふる事。
六 無識の者を敎化する事。
七 道德の團結を固くする事。
八 正論を張り邪說を破る事。
九 國民の風俗を改善する事。
十 社會の制裁を作る事。

又同時に日本弘道會信者心得を定め、次で同年三月女子部を置き、隔月に常集會を

開くに決し、各地に八箇の支會を設けたり。二十四年一月以降、東京牛込區に道話會を開き、毎月一回會員の茶話會を開くの定めを設け、同三月より一ヶ年間、騎兵第一大隊の兵士に對し講師を派して忠君愛國の講話をなし、其四月より地方支會に巡回講師を出張せしむることゝなせり。爾來各地に多くの支會起り、二十五年五月には日本弘道叢記を發刊するに至り、爾後益々其勢力を增大することゝはなれり。

(二) 彼の思想人物

西村は明治七年十一月、文部省五等出仕に補任せられ、八年五月三等侍講を兼任し、從五位に敍せらる。九年一月文部大丞に任じ、其三月修身學社(日本弘道會の前身)を創設す。是れ彼が多年の宿望たる忠孝仁義の道德を振興せんとする計畫の第一步に着手したるに外ならず。次いで十年一月、文部省大書記官に任ぜられ、二十一年七月華族女學校長を兼任し、又宮中顧問官に親任せらる。二十三年九月更に貴族院議員に任ぜられ、在職二年にして之を辭し、爾來專ら力を日本弘道會に盡せり。三十三年、正三位勳一等に陞り同月十八日七十五歲を以て薨ず。

彼は斯の如く數多の官職を歷任したりと雖も、官吏としての功績は、一の日本弘道

會の會長としての功績に及ばず。我輩が彼を以て明治大敎育家の一人に加ふる所以も、亦主として此點に存せずんばあらず。彼は維新以來、我が風敎の年と共に頽敗するを慨嘆し、常に時代の傾向に着眼して、屢々之れを警醒する議論を公表せり。

彼は終始一貫、國民の道德の振作に盡瘁したるが故に、他の社會事業に關係したるものゝ如く、世人に持て囃やさるゝこと少く、其名聲の如きも、他の大敎育家數者に比すれば、稍々劣れるものゝあるを認めずんばあらず。然りと雖も、世に持て囃やさるゝもの、必ずしも大人物にはあらず。西村が他の敎育家に比して、其名聲の稍々劣れるには、種々の原因ありて存す。彼が福澤、中村、新島、近藤等の如く、一個の私立學校を有せざりしことは其一にして、彼が終始一貫、唯だ道德の振作のみに盡瘁したることは卽ち其二なり。蓋し自己經營の學校を有せざれば、直接に己の感化を及すことを得ず。既に其感化を及すことを得ざれば、其人物と功德とを世に吹聽するもの少く、廣く社會に表彰せらるべき機會稀れなり、是れ彼の名聲の揚らざりし第一因なり。而して道德は、世の所謂識者に於てこそ、最も憂慮、論評せらるべき大問題なれ、普通一般の國民にとつては、左迄念頭に置かざるものなれば、實利實益に關する言論や、物質的利害關係を有する諸事業の如く、平易く國民に識認せらるゝこと甚だ難し。是れ彼の名聲の揚らざりし第二因なり。時代に順應し、社會の風潮に迎合して、而かも其前きに一歩を進むる者は、事業に成功し、名聲を博することまた難しとせず。然れども之れに反對の態度を持するものは、其名をなすこと容易なりといふべからず。然るに西村の一生を通觀するに、彼は常に時代の潮流に反抗しつゝ一生を終れる人なり。明治初年以來、一世擧つて西洋を崇拜し、將さに自國の存在を忘却せんとする時に當りて、彼は修身學社を創設し、日本弘道會を起し、忠孝仁義の道德を鼓吹して、我國體の精華を覺れよと絶叫せり。世が如何なる程度迄、彼の主張に耳を傾けたりやは、必らずしも彼の顧慮する所にあらず。彼は飽く迄、世の極端に趣かんとする傾向を矯めて、之れを中正に導かんと努めたるなり。彼は徹頭徹尾、自己の立場を失はずして、一定の主義のもとに活動盡力せり。時代に順應し、社會の風潮に迎合することは、彼の微塵程も爲さゞる所、又斷じてなし能はざりし所なり。是れ彼の名聲の擧らざる第三因なり。

斯の如くして、彼の名聲は擧らざりしなり。されど彼の功績は、之が爲めに沒却せ

らるべきに非ず。彼の如きは、明治年間團體の力を以て、道德の振作に盡瘁したる唯一無二の先覺者なり。之を明治大敎育家の一人となすに何の不可かこれあらん。

七、乃木希典

(一) 敎育學及敎授法を超越せる大敎育家

嗚呼、稀世の大人物乃木將軍逝く。先帝に對する殉死か、時世に對する憤死か、將た又此兩者を兼ねたる自刄か。今に於て之を明にするは必ずしも易しとせざるべし。然れども其死因の何れにあるを問はず之を哀悼するの情に厚薄を來すことなし。何ぞ夫れ悲痛の極なるや。

我輩曾て英國にある時、雜誌『內外敎育評論』に『智兒の敎育家そしきを憂ふ』と題する一文を寄せて敎育の時弊を論じ、文中、將軍乃木に言及していへることあり、曰く

先年、乃木將軍が學習院長に任ぜられた時に、一般の敎育者は頗る不評を立てた。乃木將軍は軍人としては立派なるかも知れぬが、敎育家としては何等の知識經驗を持つた人ではない。アンな人を學習院長にするのは、敎育を玩弄した者である

と云ふのが、難者の要旨であつたやうに記憶して居る。此思想がイケないと僕は云ふのである。如何にも乃木將軍は敎育學や敎授法の知識經驗を持つた人ではないけれども、そんなものよりも、更に緊要たる敎育家の或資格を具へて居る。「乃木希典」といふ一個高潔なる人格がツクネンと生徒の前に立つた丈でも、敎育技師の千萬言にも勝る感化を與ふる事は請合である。此人格上の勢力は、迚も敎育學や敎授法の力で產み出し得るものではない。萬卷の敎育書を讀破して、魔法使ほど敎授術に熟達して居ても、乃木將軍が寡言無手段で授くる丈の感化を授くることは出來はせぬ。果して然らば、乃木將軍は立派な敎育家である。學習院長になつたがなぜ惡るい。之を非難する理由が何處にある。愚論も大抵にして置くがよい。乃木希典とか三宅雪嶺とかいふ樣な人は鐘や太鼓で探して廻つても、さう澤山はない筈だ。何れを見ても我利〳〵亡者のお揃で巾着切りの樣な人ばかり幅を利かせうとする現代に、よくもマアあんな立派な人格の人があつたものだと敬服するのが當然で、名を聞いた丈でも、襟を正すが至當である。從つて斯ういふ人達が敎育界に入つて來られたら、雙手を擧げて歡迎するといふよりも、寧ろ名譽

として感謝の意を表すべきである。ケチを附ける理由は斷じてない。然るに我教育界は愚にも乃木將軍に不評を立てた。教育の本體を知らぬ立派な證據ではないか。(四十四年四月號)

と。我輩の將軍乃木を崇尊するや既に久しく、其人格、志操、誠忠、修養の全部に就いて滿腔の敬意を拂ふや、當さに斯の如きものありしなり。然るに今や溘然として逝く。哀痛何ぞ之に如かん。

彼は教育學を知らず、教授法に通ぜず、教育の技術に關しては、何事も知らざりき。然れども教育學教授法を超越せる偉大なる教育家の資格は十分に之を具へたりき。智術を盡くして部下職員を操縱する長技は之を有せざりしと雖も、至誠を以て人を動かし、熱誠を以て人を服せしむるの美德は之を具へたりき。彼は人を教ふるの適材ならざりしも、人を感化するの偉材たるを失はざりき。是れ彼が偉大なる教育家、稀覯なる良校長たりし所以なり。

(二) 精神氣魄の結晶人格

將軍乃木は至誠純忠、古武士の典型なりき。彼は軍略に於て兒玉源太郎に及ばず、戰術に於て奥保鞏に及ばず、勇猛に於て山路獨眼龍に優らざりしと雖も、然かも尙ほ稀有の大將軍たるを失はざりき。彼は人格の人といふよりも、寧ろ精神氣魄の人にして、軍略戰術を超越せる大軍人なりき。

彼が明治十年、小倉の聯隊長として西南の役に參加したる時、彼は圍を衝きて城に入るの一隊を指揮し、奥保鞏の先發隊に續かんとせり。然れども奥の奏功目的を達せしに似ず、後隊の乃木は植木に敗戰して目的を達すること能はざりき。仍て彼は無念の涙を拭ひつゝ亂軍を纒めて山鹿方面に轉戰せしも、此處にても亦散々に打ち敗られ、南の關に引き揚げし頃は、支離滅裂慘憺たる有樣となりしが故に、彼は心外悲痛の情に堪へざりけん、餘程思ひ詰めたる樣子ありしといふ。彼が聯隊旗を奪はれしも此時にして、今回殉死の決意をなせし動機も亦遠く此時にきざせしこと彼の遺言に明記する所の如し。

勝敗は兵家の常なれば、乃木が西南役に再度敗れたりとて、直ちに彼は戰術に拙しといふを得ず。奥が美事に成功したればとて、直ちに彼が戰術に長けたりといふを得ざるべし。然れども奥は爾來戰術家を以て黙人間に名聲を增し、日露戰爭當時の

如きも、始終善戰善勝し、戰後に至つて終に參謀總長となりし事實に徵せば、奥が西南役に成功したる事必らずしも偶然なりといふを得ず。然るに乃木は西南役に失敗し、日露戰役に旅順を攻めて多くの人命を損し、兒玉源太郎の奉天より南下して、乃木の作戰計畫を監督するに及んで、始めて漸く開城せしむるを得たる等、甚だ面白からざる戰歷を有す。時運の非なるものありしに因るは勿論ならんと雖も、亦以て彼が軍略戰術に長ぜざりしの致す所なり。

彼は外國語を解し、武人には珍らしき程の讀書家たりし雖も、其は多く人格の修養、精神の鍛錬に關する物にして、軍略戰術に關するものにはあらざりしといふ。故に彼は最新の科學的戰術に就いて甚深の造詣を有せず、戰場にあつて善謀善斷、多々益辨ずる謀將の機略を有せず、唯だ高潔無比にして燃ゆるが如き一片の丹心のみを有したり。彼の戰場に臨むや智を以て鬪はずして勇を以て鬪ひ、彼の部下將卒に臨むや、上官の威を以て率ゐずして赤誠、熱血、同情を以て率ゐたり。彼は知識を尊ばずして精神氣魄を尊び、意志と感情との醇分を攝取して適當に之を調和したる人なりき。

乃木は謹嚴一徹にして稍々偏狹の武士なりき。此點に於て、彼は大山巖と大に其性格を異にしたり。大山も軍略戰術に就て造詣を有せず、寧ろ軍略戰術を超越せる大軍人たる點に於て、乃木と酷だ相似たるものありと雖も、大山は乃木に比すれば、人物の規模甚だ大にして、清濁併呑、包容濶大なり。故に彼は深く兵事を知らずと雖も、尙ほ且つ百萬の大軍に將として微動だもなさしめざる大量を有す。乃木は全く之に反す。彼は精神家なるが故に己を持すること極端に恭儉なりしも、其代り他に對して嚴格峻烈にして一歩も假借する所あらざりき。從つて彼は清濁併呑なること能はず、包容濶大なること能はず、彼に接近する比較的少數の後輩者を感化する力は之を有したれども、幾多の猛將宿將を統率して三軍を指揮し、徵動(ヒク)ともせしめざる廣大の人物量は之を有せざりき。大山は謀將たること能はず、勇將たること能はず、一軍團、一師團の良指揮官たること能はず。更に下つて聯隊長となれば殆んどゼロたるを免れず。然れども唯だ將に將としてゼロたるを失はず。乃木は全然これの反對にして、下に行くほど益々可なり。彼は將に將として全軍の總司令官となるよりも、寧ろ一軍團、一師團を指揮する部將たるに好適すべく、更に下つて聯隊長とならば、一層理想的良軍人たるを得たるべし。總司令官

は唯だ茫漠として人物規模の大なるを理想とすべく、戰列團隊長は、部下をして死生を共にすることを誓はしむる底の人たるを理想とすべし。大山は垢脫して包容濶大なれども、部下をして死生を誓はしむる程の至誠と熱情とに乏しく、乃木は部下をして感泣崇拜せしむる人格美を有すれども、狷介狹量にして包容大ならず。大山を拔いて滿洲軍總司令官たらしめ、乃木を選んで肉彈連發、死傷算なき旅順攻圍軍の司令官たらしめ玉ひし明治天皇の御鑑識は、流石に御非凡なりと謂はざるを得ず。

大山は人物量の人、乃木は人物美の人。一は人物の輪廓漠然として捕捉すべからず、他は個性の色彩燦然として鮮明なり。故に大山は他より極愛せらるゝことなく、極憎せらるゝことなく、平々凡々の中に、如何なる種類の人をも包容して餘裕あるを得ると雖も、其代り唯の一人だも精神的に感化することを得ず。乃木は他より極愛せらるゝことあるべき代りに、極憎せらるゝこともあるべきが故に、多數者を包容すれば、必らず德化の及ばざるものありて不平者を生ぜしむべしと雖も、少數者を率ゆれば必らず精神的に感化して己の色彩に染ましむ。大山は軍人として實戰隊の將軍たるべからず、良參謀の上に必らず總司令官たるべし。而して若し政治家となれば、良次官の上に大臣たるを得べく、良副總理の上に政黨總裁たるを得べく、良民政長官の上に殖民地總督たるを得べし。若し亦下つて庶業に就かば、良技師の上に大農となつて小作人の親分たるに適すべし。彼は部下に智囊をさへ從はしむれば、如何なる地位、如何なる職業にも向かざることなし。唯だ彼は如何なる場合にも、人の長たるに適するのみにして、人の部下として殆んど絕對無能の人たるを免れざるのみ。乃木は軍人として總司令官たるべからず、必らず實戰隊の將軍たるべし。而して軍人以外に於ては、如何なる良智囊を附くるも、大臣たるべからず、總裁たるべからず、總督たるべからず、大農たるべからず。唯だ一の大敎育家たるを得べきのみ。彼を擧げて學習院長となし玉ひし　先帝の御鑑識は、流石に御非凡の御眼光なりと謂はざるを得ず。

乃木は徹頭徹尾精神氣魄の結晶にして、青年感化の偶像なり。彼を擧げて帝國大學、各種專門學校に校長たらしむれば、或は最善適處を得たるものにあらざらん。然れども陸軍大學、士官學校、學習院、高等學校等に校長たらしめば、眞に理想的最善の校長たるを疑はず。

(三) 武士道の權化、古武士の典型

將軍乃木は、日本武士道の權化にして、古武士の典型なりき。西洋の書籍を讀みたれども西洋のハイカラ軍人の弊風に染まらず、現代式の軍隊中に生活したれども、現代軍人の俗習に化せず、何處迄も毅然として侵すべからざる謹嚴にして恭謙なる心事を保持したり。

彼は世の常の所謂磊落無頓着なる軍人氣質なるものを寸分も有せざりき。日清戰爭に際して、諸將は戰勝の威に乘じて分捕功名を逞しうしたれども、彼れは獨り旅順の寒夜に兵士と同樣の外套を纏ひ、同一の食物を攝り、苦艱を共にして志氣を鼓舞することに努めたり。斯の如きは東西古今に稀なる名將の心掛にて、乃木の面目躍如たるを認めずんばあらず。

日清戰爭終るや、間もなく彼は臺灣總督に任ぜられたりと雖も、行政は彼の長處にあらざるのみならず、性格嚴肅端正にして苟も所謂融通ゐるを容さゞりしが故に、俗流の氣受け甚だ惡しく、見るべき效果を擧ぐること能はずして閑に就けり。爾來彼は快々として頗る樂まず、唯だ讀書と修養とに專念したりしが、日露戰爭起るに及んで、身を以て國に殉するの期至れりとなし、勇躍して軍に從へり。

彼の率ゐし第三軍は、他の軍團に比して遙かに勇しく戰ひたれども、世界無雙と迄稱せられし旅順の要塞は容易に拔けざりき。是に於てか矢猛心の一徹に堅壘に向つて連續殺倒し、遂に空前の悲慘なる攻城戰を開始して、彼の豫ねて愛撫せし幾多の軍兵を殺したり。彼は寒夜に兵卒と露營を共にする程の優しき心を有する人なりしが故に、此際定めし堪へ難き心中の悲哀を感じたるに相違なく、彼が『愧づ我れ何の顏か父老を看ん。凱旋今日幾人か還る』と吟ぜしも、畢竟彼の僞らざる哀情を告白したる凱旋當時の感想なりしといふべし。彼は實に戰勝の功を誇るに暇なく、却つて子弟を殺せしを以て父老に耻づる程眞摯の人にして、二人の愛兒が幾多の子弟と共に皇國の爲に命を捧げしを以て、聊か顧みて自ら慰めし程至誠の人にてありしなり。

彼の至誠は啻に是れのみに止まらず、凱旋伏奏の日に於て先帝に對して最も遺憾なく之を奉示せり。卽ち彼が闕下に復命して、特に優渥なる御沙汰を拜せし時、彼が鞠躬如として御前に拜伏し

臣希典不肖にして　陛下の忠良なる將校士卒を旅順に於て多く失ひたり。此上は唯だ割腹して罪を　陛下に謝せんのみ

と奏上したること是れ也。先帝には唯々御傾聽遊ばされたるのみにて何とも御仰せあらせられざりしが、軈て乃木の拜辭して御前を退下せんとする後姿を御覽あらせらるゝや、乃木を御呼び止めの上、御氣色を改めさせられ

卿が割腹して朕に謝せんとする哀情は、朕よく之を諒察す。然れども今は卿の死すべき秋にあらず。卿若し强ひて死せんとならば宜しく朕が世を去りたる後に於てせよ。

との意味を以て御沙汰あらせられたり。流石に勇將乃木も此渥き君恩には、甚く感泣したるものと見え、顏色蒼然流汗背に洽く、一言御答申上ぐる勇氣もなく、其儘御前を拜辭したりしに、先帝は乃木の後姿を眺めさせ玉ひ、暫時は何とも御仰せ遊ばされざりしといふ。

謹んで聖意を奉察するに、先帝の御明察神の如く、乃木の態度を容易ならずと鑑はせられ、畏くも右の御沙汰を降されし者なるべし。乃木は先帝の御知遇に感激して身も心も先帝に捧ぐべく決心を固めたるべきと共に、先帝の御在世中は正しく己れの生命を御預り下されしものなれば、先帝の崩御あらせらるれば、己れも同時に殉死すべきものと決心したるに相違なし。然れども、先帝の聖慮は甚だ深遠たらざるを得ず。『卿若し强ひて死せんとならば、宜しく朕が世を去りたる後に於てせよ』と仰せられたるは、決して乃木に崩御の後殉死せよとの御思召にはあらず。畏れ乍ら想ふに　先帝は頗る御强健、乃木より先きに登遐し玉ふこと萬々あるまじきを期し玉ひしが故に、斯くは御仰せ玉はれしものにして、聖意は結局天壽を全うせよとの御意味に外ならず。將軍乃木率直なりと雖も、御沙汰の本旨を拜察し得ざりしにあらず。然れども、一片抑へ難き古武士の精神の宿るあり。加ふるに、西南役中や日露役後に於て、再三自殺の決意をなしたる等の行掛りもあることなれば、責任を重んずる武士道の權化として、先帝に殉死せざれば、何となく申譯なきやう感じたるものに外ならざらん。是れ彼が從容死に就きたる所以にして、利慾名聞を超脱し、唯だ節操忠誠のみを念慮とせる古武士の典型たりしことの證左なり。

(四)　智仁勇完備の自刄

然れども、將軍乃木は、決して感情一點張りを以て、前後の思慮なく、事茲に至りしにはあらず。彼は讀書人として相當の識見を有し、一面世界の事情にも通じたりしが故に、世間一般の想像したるが如き偏見の武辨にはあらざりき。何れかといへば當識も發達し、思慮も緻密なる方の人にてありしなり。其れ故に今回の自刄の如きも其覺悟を定める以前に於て、少くも左記の諸項に就て十分の思慮考察を盡くしたるに違はざらん。

一、殉死其物の善惡如何

二、自己の殉死が日本の世道人心に及ぼすべき影響如何。

三、自己の殉死が世界各國に及ぼすべき影響如何——卽ち西洋諸國は自己の殉死を聞いて日本の道德及文明に對し如何なる評言を爲すべきか。

四、自己が生き永へて　新帝に忠節を盡くす事と、先帝に殉死して世人に何事かを反省せしむる事と、二者の中何れが君國に忠なる所以となすべきか。

彼は熟慮して遂に殉死を擇べり。殉死以外に於て彼の爲すべき最善を發見し得ざりしなり。彼は匹夫にあらず、庶人にあらず。唯だ彼れ今日の地位のみよりいふも一面國家の干城にして皇室の藩屏たり、他面皇國の重臣にして國民の師表たり。

其任や極めて重く、其責や極めて大なること多言を要せずして明かなり。然かも彼れ此責任を知りつゝ尙ほ遂に死を決す。熟慮の結果たるや疑を容れざるなり。

彼が西南役の時、死すべくして死せず。日露役後の時も亦死すべくして死せざりしは、一に彼が情に驅られず、自己の良心滿足に專らならず、深く君國に對する責務を思慮する所ありしが爲に外ならず。彼は又戰死せる軍人の爲には、一兵卒の墓誌と雖も進んで之を揮毫したれども、其他は貴顯富豪の懇請と雖も斷乎として之を拒絕したりといふ。此等は虛榮に得々たる思慮なき輩の企て得ざる所にして特に乃木の思慮深き人たりしことを證示するものに外ならず。然らば今回の殉死に對してのみ獨り熟慮を遂げざるべき理道なし。想ふに彼は、前述の諸點に就て、十分に熟慮し考究し、彼の有する知識智見の全部を傾注し、然る後殉死のなすべきを知得したるものに相違あらざらん。

近時、相當の地位名望を有する者にして射利事業に關係し或は身分に任せて豪奢に耽る者社會の上下に充滿す。乃木は之を見て憤慨すること一方ならず、曾て鹽谷方圓といふ豫備中將が、水產會社に關係して汚名を流したる時の如きも、乃木は以て

の外に憤慨し、既に切腹を勸告する迄に決心したりしも、後ち思ふ所あつて中止したりと確聞す。加之、彼は近年、大官などゝ云はるゝ人達の公私に無責任にして、奉公の誠意に乏しきを深憂し、又た學習院長として屢々宮中に出入して　先帝の御質素なる御起居を目擊するにつけても、臣下どもの豪奢不謹愼の身持が癪に障り、學習院に在學する貴族富豪の子弟の薄志弱行なるを憂ひて長大息を漏らしたることも一再ならざりしと確聞す。然らば彼は現代の風潮に不平不安を懷きしこと少からざりしに疑ひなく、如何にかして之を救はんとする情熱の頗る切なるものありしに違ひなし。然れども之を救ふは到底區々たる言論文章の克くする所にあらずと思惟して、決然今回の擧に出でたるものならんと推察せらる。果して然らば、彼や實に身を殺して仁をなしたる賢者なり。

匹夫は窮すれば、褌にて首を縊るを常とすれども、伯爵陸軍大將、勳一等功一級、學習院長といふが如き、顯榮の身にあつて生命を棄つるは、事決して容易にあらず。少くとも常人の爲し得る所にあらざるなり。否な眞の大勇者にあらざればなし得る所にあらざるなり。看よ、口に忠孝を說きつゝも、行に內帑の金を盜んで富貴を謀り、或は君寵に馴れて君恩の難有さを知らず、却つて衰龍の袖に隱れて一身の榮達を謀らんとするに汲々たる人のみ如何に多く宮中府中に喞集し居れるかを。此等奴輩に比すれば、乃木の心事、行動や眞に月鼈も啻ならずと謂ふべし。

乃木が殉死の影響を考究打算したるは大智なり、身を殺して世を救はんとしたるは大仁なり。愈々殉死を決行したるは大勇なり。智仁勇兼備の自及を遂げたるものは將軍乃木なり。我輩は斯る名忠臣の明治の代にありしことを後世子孫に對して誇りとし、且つ彼と時代を同じうしたることを以て光榮となす。

乙、大學派の教育學的系統

一、日高眞實

大學派の教育學者中、最も古きものを日高眞實となす。日高は日向の人、元治元年九月十七日を以て其鄕里に生る。明治十九年文科大學卒業後、直ちに大學院に入り、教育に關する事項を研究す。在學二年にして、二十一年獨逸に留學し、二十五年三月歸朝して高等師範學校教授となり、間もなく病魔に冒されて、二十七年八月三十一

歳にして長逝す。

彼は帝國大學卒業生の中、教育學を研究したるものゝ嚆矢にして、此點のみにても特筆して世に傳ふべき人物なり。勿論教育學を專攻して大學を出でたるものゝ嚆矢にはあらずと雖も、教育に甚深の興味をもつて、自ら教育學を研究したるものゝ嚆矢也。

彼が二十四年四月公表せる『日本教育論』は、本邦に於ける社會的教育學說の先驅をなせるものにして、中に見る可き所甚だ多し。『日本教育論』は上下二篇に分つ。前篇は『教育の想念』と題して教育の根本原理を說き、後篇は、本邦教育上の實際問題に關する彼の意見を陳述したるものなり。前篇の『教育の想念』は、彼が大學院に學生たる時、大學に提出したる教育論文にして、教育の意義、教育と社會との關係、教育と國家との關係、一個人の教育等の諸項目に亙りて、稍々詳細に論評を下したるものなり。今日より見れば、其所說の淺薄なる、固より言を俟たず。學者の學說として、之を見るべき價値ありや否やは頗る疑はしきもの也。然りと雖も、當時未だ一人の教育學者あらざりし時に當りて、兎も角も是れだけの意見を發表し得たる事は、彼が凡庸の材にあらざりしことの證左たらずんばあらず。殊に其着眼の穩健中正なることは、我輩の最も敬服に堪えざる所、個人的教育說と社會的教育說とを調和して、何れにも偏すべからずとなせる如きは、今日に於ても尙且つ堂々たる卓論なりといふことを得べし。

彼は頭腦明晰、學才に長じ、語學を能くし、篤學眞面目にして、當さに大學者たるべき有爲の人物たりき。唯だ惜しむらくは、歸朝以來間もなく病魔に侵され、大學及高等師範學校に教鞭を取ること僅に一年、而かも未だ系統ある一の著書をも出すに至らず、又學生々徒に對して多くの感化を與ふるにも至らずして終に逝けり。是れ彼が大學者たり得べき資質を具へたるにも關はらず、廣く我教育界に其名を知られざりし所以なり。

二、大瀨甚太郎

(一)

日高の次の教育學者は大瀨甚太郎也。大瀨は金澤の人、明治十五年、十八歳を以て

東京に來り、本郷の進文學舍に入りて普通學を修め、後ち大學豫備門を經て、帝國大學文科に進み、哲學科を專攻して二十二年卒業す。直ちに大學院に入りたれども、幾許もなく此處を出で、第五高等學校教授となり、次で教育學研究の目的を以て、歐洲に留學す。初め伯林大學に入りて、教育學、倫理學、及び心理學を學び、夫れよりライプチヒ大學、巴里大學、オックスフォード大學、ケンブリッチ大學等に歴遊し、三十年十二月本邦に歸る。爾來東京高等師範學校教授兼東京帝國大學講師となり、教育學を講述す。

彼は辭書的學者にして、概括力に乏しく、創見發明の天分を缺ぐ。彼は、大學派、教育學者の故參にして、吉田熊次等に對しては、師弟の關係を有する程の先輩なるが故に、讀書の量に於ては、新進學者の容易に企及し得ざる程のものを有すと雖も、讀んだ書籍の知識に就て、考察、研究、分類、建設をなすの智見を缺ぐが故に、多量の讀書は、彼の學者的識見を高むる所以とならずして、却つて彼の學問的聰明を損するの原因となる。

彼は多く讀み、能く知れり。然れども一家の見識によりて、諸學を概括し、教育學に新らしき一大系統を附與するが如き創才は遂に之を有せざるなり。彼は口に筆に永年教育學を說くと雖も、其說く所に些の明快なく、流暢なく、殆んど彼の思想知識となり居らざるものを說きつゝあるにあらずやと想はしむることなきにあらずとす。

彼は講義に於ても、著書に於ても、廻り遠き冗語を用ひ、難解生硬の西洋語調を常用す。例へば、『然しながら多く：併しながら少く：』『れねばならぬ』『最初の一發は愼まれねばならぬ』といふが如き類是れなり。『何事に拘はらず、最初は十分愼重にするを要す』といへば、日本語調にして理解し易けれども、『最初の一發は愼まれねばならぬ』といへば、飜譯語調にして生硬未熟たるを免れず。然るに彼の著書及び講義中には、頻々として此種の生硬語續出す。彼の知識の渾然として一家をなさゞるの證左なり。

（二）

曾て內外教育評論誌上に『吉田熊次論』と題する一文を寄せたる人あり。『K、W生』との匿名を用ゐ居れるが故に、筆者の何人なるやを知るに由なしと雖も、恐らく相當消息に通じたる人ならん。其觀察の精到にして、文章の暢達なる固より素人の能くする所にあらず。然れども唯だ一の首肯し難き所あるを認めずんばあらず。そは卽ち評者が、吉田の早く博士となれる事由に就て揣摩し、大瀨甚太郎、吉田靜致、藤井健

治郎の三者を引合に出せる一事とす。評者は『倫理學の方面に吉田靜致、藤井健治郎の如きあり。何れも彼(吉田熊次)の先輩にして共に歐洲に學び、斯界稀れに見るの生氣ある學者也。吾人彼等に博士を授くるを學界の誇りなるべしと信ずと雖も、彼等の博士論文は却つて次回に迄保留せられたりときく。而して彼(吉田熊次)は獨り是等多數の先輩を凌いで博士たるを得たり。これ如何なる事由の存ずるか』と論じて皮肉らしき疑問を提出し、暗に吉田熊次の早く博士となれるには、一種情實の幇助あらんと思はしむるが如き口吻を漏らせり。これ見當違の甚だしきものにして、吾輩の絶對に取らざる所也。如何にも吉田靜致、藤井健治郎の兩者が、吉田熊次よりも古き卒業生なるは事實也。而して吉田靜致も藤井健治郎も、共に博士たるべき學識を有することも、亦た疑なき所也。然れども兩者が未だ博士とならざるは、大學の教授會議に於て此兩者の學識を是認せざるが爲にはあらず。兩人者の博士論文が次回迄保留せられたりといふが如きは、全く事實無根の風説なることを我輩は確信するに躊躇せざる也。我輩の確聞する處によれば、吉田靜致も藤井健治郎も、未だ論文を提出し居らずといふ。論文を提出せざるものに、博士授與を決定することも、次回に保留することも出來得べき道理なし。尤も藤井健治郎に對しては、論文提出を俟たずして、博士會の推薦を以て博士を授與せんかとの議もありたれど、推薦により て博士となるは、藤井の屑しとせざる所なるべきが故に、本人より論文を提出する迄、授與を見合すべしと唱ふるものあり、爲に今日迄實現を見るに至らざる也。藤井は既刊の『主觀的道德學』のみを論文として提出するも、優に合格し得るは明かにして、先輩中彼に彼書の提出を勸告するものあれども、藤井は今一冊『客觀的道德學』を完成し、自家の倫理學の大系を組織したる後、徐ろに其審査を請はんとの意望にて、敢て勸告に應せざる也。されば、藤井の未だ博士とならざるは、自信の强きと自重心に富めるとの結果にして、却つて彼の人物を推賞すべき所以たり。これを是れ思はず、唯だ杜撰なる新聞記事を論材として、吉田熊次と吉田靜致、藤井健治郎との先後を揣摩し、其處に何等かの情實の蟠れるものゝ如く臆測するは、啻に吉田熊次の名譽を毀損するのみならず、又吉田靜致、藤井健治郎に對しても最負の引き倒しをなすものに外ならず。

然れども、斯の如きは眞らしき嘘として尙一笑に附するを得べし。されど、大瀨甚

太郎との比較に至つては、徹頭徹尾、具眼者の首肯し得ざる所也。評者は『彼(吉田熊次)の先輩たる教育學者に大瀬學士の如きあり。夙に歐洲に學び歸來十數年、高師教授の要職にあり、或は大學に講師たりし等我國教育學界一方の雄たり。勿論、彼と此とは其學者として態度活動等に於て異るものあれども、教育學上の造詣に至つては一籌を輸するものあるを見ず、然れども大瀬は未だ嘗つて文科教授會の推薦ありしを聞かざる也』といへり。我輩は評者が如何なる根據によつて此言をなしたるやを知らずと雖も、教育學上の造詣に關して、斯くも容易すく兩者を比較論斷したるこの大膽なるに驚かずんばあらず。如何にも『教育學』と名のつける書籍を多く讀み、教育の傳習的知識に富める點に於ては、大瀬必らずしも吉田に劣らず。從つて此意味に於て、大瀬を『我國教育學界一方の雄』となし、『教育學上の造詣に至つては一籌を輸するものあるを見ず』となすも不可あらず。然れども唯多く讀み、多く知れるものを直ちに眞の學者といひ得るや否やは大なる疑問たらずんばあらず。學者の學者として尊き所以は、諸書を渉獵してそれを概括し、前人の知識を統一して今人の指針となし、前代に現はれざりし眞理を現代に闡明して後代に遺すべき點にあり。然るに大瀬は此等の智力に乏し。一家の見を立つる才能に於て谷本富に及ばず、總合大觀して學問の大綱を捕捉する力に於て吉田熊次に及ばざるなり。これ彼が有數の先輩たるにも拘らず、未だ博士ともならず、學者的に十分なる活動の出來ざる所以なり。

とはいふものゝ、大瀬も一廉の學者たるを失はず。谷本に博士を授けて差支なきものならば、大瀬に之を授くる素より不可あらず。

(三)

惟ふに彼は一個の好々先生なり。其風彩は溫雅にして貴公子然たる所あり。其性格も溫良にして柔和なり。潑溂氣鋭の處なしと雖も、調和的圓滿なる紳士の素質あり。警々諤々の論調を用ゐて縱横無盡に學術思想を論評するが如き識見膽略を有せずと雖ども、諄々として傳來の學說を祖述し、訖々として洋書にある所を紹介するだけの能力を有す。學者の雄を以て目すべからず、人格の大を以て稱すべからずと雖も、兎も角、中等教員のお師匠さんたるだけの資格に缺ぐる所あるを見ず。

彼は大西祝、渡邊董之助等と同期の卒業にして、澤柳政太郎と略ぼ年輩を等しうす

る程の先輩なれども、今日迄に博士となり得ざりしのみならず、將來も亦恐らく博士となること永久あらざらん。大學教授に榮轉する事は、固より絶對の不可能事たるを免れず。さればとて、彼は行政家となるべき資質を有せず、高等學校長等になるべき才幹をも有せざるが故に、先づ今日を以て出世の頂上に達したるものと認むるを至當とすべし。

彼の等輩が、今日多く顯要の地位に居り、彼の敎へ子たる吉田熊次が博士となり、小西重直が高等學校長となりしに比すれば、彼の發展の甚だ振はざるものあるを認めずんばあらずと雖も、彼の性格及才能よりいへば、今日の地位を以て最善の適所を得たるものといはざるを得ざるなり。

三、溝淵進馬

溝淵進馬は高知の人、廿八年文科大學を卒業し、千葉中學校長となる。後ち高等師範學校敎授谷本富の京都大學に轉ずるに際して、彼れ其後任に擬せられ、文部省より留學を命ぜらる。歸朝後高等師範學校敎授を經て、東北大學札幌農科大學敎授となり、次で現任第四高等學校長に榮轉す。

彼は大學時代、熊谷五郎と同期にして、彼は首席、熊谷は次席を以て卒業す。然れども我學界に名を知られたる點に於ては、熊谷は溝淵よりも早くして且つ廣し。

彼は眞摯の人なれども、世間的の知識に乏しく、處世の通才を缺ぐ。嘗て彼が高師の敎授たりし時、同僚櫻井寅之助、新聞『日本』に於て攻擊せらる。櫻井の友人、之を以て新聞記者の誤解に出づとなし、神田明神の開花樓に集合し、新聞記者を招きて相互の意見を交換せんとの相談會を開く。溝淵も友人の一人として之に出席したれ共、彼は新聞記者の如き者と同席するを屑しとせずと稱して、獨り其議に贊成せざりしといふ。如何にも、新聞記者の中には、紳士の同席するを屑しとせざる人物なきを保し難し。然りと雖も人格に於て、學識に於て、高等師範學校の敎授位に劣らざるものも尠なからざる也。然るに彼は、例外と原則とを混同して、唯だ新聞記者たるの故を以て一般的に排斥し去れり。斯の如きは、彼に世間的知識の乏しき證左にして、非常識の甚だしきものなり。

彼の氣質は所謂土佐風にして、一面豪放なる所あれども、他面細心小膽にして、甚だ

窮屈なる性格を有するが故に、人の長となつて部下を統率するは適任ならず。寧ろ專門學校の平教授として、自己の研究したる所を專念に講述する技術家の任に適すべし。彼が第四高等學校長となりしは、恐らく文部省の田所瀨戸の推薦ありしによるならん。若し彼にして何等の後援にかりせば、或は高等師範學校の平教授にて終りしやも知るべからず。少くとも今日の地位を得ることは難かりしに違ひなし。しかりと雖も、我輩は決して彼を以て全然學校長の無能力者なりといふにはあらず。彼は相當事務的才幹を具へ、立言立案をなす能力にも、相應長け居るが故に、一專門學校を經營するぐらいに手古摺るとはあらざらん。唯我輩は彼の細心小膽にして、事物にこせづく性癖あるを見て、學校長よりも寧ろ平教授の適材ならんといふに過ぎずとす。然りと雖も學者としての彼の造詣は未だ十分に認められず。著書に『教育學講義』ありと雖も、そは寧ろ西洋教育の實際事情を忠實に紹介したるものにして、學說原理を說きたるものにはあらず。之によつて彼の教育學上に於ける造詣を知るは甚だ難しとす。

彼の匹儔を高等師範出身者中に求めば、恐らく森岡常藏を擧ぐべきものならん。

然れども彼は森岡よりも人物の規模稍大にして、意見を立つる力にも亦富めり。

四、熊谷五郎

(一)

熊谷五郎、山口縣の人、鄕里の中學校及び高等學校を經て、教育學專攻の文學士となる。後、文部省より西洋に留學を命ぜられ、歸朝後間もなく狂亂の人となりて死す。

彼は初めて社會的教育學を本邦に紹介したる人也。勿論これより以前に、これに類似の思想を主張したるものも絕無にはあらず。日高眞實の『教育の想念』、谷本富の『將來の教育學』等の如き卽ち是れ也。然りと雖も、此等の書たる、何れも教育を社會的に觀察するの必要あることを仄めかしたるに過ぎず。嚴格なる意義に於て社會的教育學を主張したるにはあらざるなり。是れ我輩が此等の人を以て社會的教育學の創唱者となさゞる所以也。

熊谷が本邦に紹介したる社會的教育學說は、ベルケマン派の教育說なりしこと、世人の今尙ほ熟知する所也。

當時本邦に於ては、ヘルバルト派の教育說が全盛を極はめ居たるのみならず、大瀨甚太郎が歐州より歸りて、嘖々の名聲を博したる時にてありければ、後身無名の熊谷が出せる論文の如きは、さまで世の注意を惹くに至らず、世は尙ほ依然としてヘルバルト派に隨喜するか、然らずんば大瀨の教育學を謳歌したるにてありき。然りと雖も、時勢は遂に一所に止まらず、時々刻々に推移して安定せざるなり。彼れ當時如何に後身無名の學徒たりしとするも、彼が大聲叱呼して新說を唱導する所、何時かは世の注意を惹かずして止む可きにあらざるなり。果せるかな、世は徐々として彼の所說に聽かんとするに至れり。三十五年七月彼が處女作として公表せる『社會的教育學』なる一書は、谷本富がヘルバルトの學說を唱導したる時の如く、異數の歡迎を受くるに至らざりしと雖も、然も我が教育思想界の沈滯を破りて、少からざる刺戟を與へたる一事は、彼の功績として、明治教育史上に特筆大書せらるべきものたらずんばあらず。

彼の『社會的教育學』は、種々の雜誌に公表したるものを蒐錄して之れを多少改竄し、更に新篇數種を加へて、一書としたるものにして、一の科學書としての組織と系統とを有せず。いはゞ彼の論文集とも見るべき者なり。然りと雖も、既に前にも述べたる如く、彼が此書を出す頃に至りては、社會的教育學に關する論爭漸く勃興し、彼の學風に對して反對を唱ふるもの少からざりしのみならず、動もすれば誤解妄想を傳播して、幾多の錯亂を生じたる時にてありければ、此一書が反對論者に對する最良の答文たると共に、又世人の誤解妄想を排除して、一般に社會的教育學の問題を明かにしたるの功ありしは、我輩の固く信じて疑はざる所也。

然も彼は之れに續いて『教育學』及び『最近大教育學』を刊行し、愈々盛んに社會的教育學を提唱せり。前者はトイセルの教育學を飜譯したる者にして、後者はベルゲマンの學說を和譯したるものなり。二書共によく原意を紹介したる點に於ては、多く遺漏を有せざれども、忠實に原文の妙味を傳へたるは、後書よりも寧ろ前書に於て勝る所ありと傳へらる。而も本邦に於ける社會的教育學勃興の機運を助けたる點に於ては、兩者全く同一にして、是より漸く教育學研究の新傾向を生じたり。

(二)

彼は學才に於て、大に見る可きものあり。將來の大學教授となすも、決して不足

ある人にあらざりしと評せらる。然りと雖も、彼や生來偏狹にして、一事に熱中する僻あり。其性向頗る主觀的にして、想像力に富めり。其思想は餘りに一徹にして、心に餘裕を有せざるなり。既に然るが故に、彼れ若し自ら『かくあるべし』と推斷する時は、他より如何なる注意勸告を受くるも、之を聽き入れ能はざる也。彼は一口に之を評せば、俗にいふ『坊ヂャン』にして、人間界の事情を解せず、社會の實際に適應する途を知らず、唯だ自己の偏狹なる主觀一片を以て世事の凡てを律せんとせり。是れ彼が有爲の前途をもちつゝ、終に雄飛するに至らずして、狂猾の人となり終れる所以也。

彼れ嘗て文部留學生として獨逸にある時、會ま小西重直と共に、隣邦諸國の教育視察に赴かんとす。是を以て彼れ文部省に向ひ、留學指定地以外の旅行許可を申請し、直に其許可命令と旅費若干とを受く。然も不幸にして彼は其時宛も病魔に冒され、小西と相携へて旅程に上ることを得ずして終に止む。勿論文部省に對して視察延期の申請をもなさず、獨斷にて中止したるなり。然りと雖も、彼や既に本省の命令と旅費若干とを受け居れり。形式ながらも何等かの視察報告書を提出せざる可らず。

茲に於てか、彼れ則ち一策を案出し、小西重直の視察報告書を借りて之を謄寫し、一字一句を訂正せずして其儘文部省に提出す。文部省之を受けて甚だ奇怪とし、屢々電報を以て彼に其理由を糾問す。されど彼れ容易に答へず、糾問愈々急なるに及んで、漸く之れに答へていふ、『文部省留學生として外國にあるもの、視察旅行をなすと稱して本省より旅費を受け、而も何等の視察をもなさずして、其國の書籍雜誌に現はれたる報告文を飜譯し、宛も己れ自ら視察したるかの如く裝ひて本省に提出する者、比々として概ね然らざるはなし。余の所爲の如き固より余の創めたる所にあらざるなり』と。由是觀之、彼は己れの所爲を以て、毫も不正なりとせず、却て他人も亦然りと稱して、其所爲の當然なるが如く辯解したるなり。文部省は行政廳也。熊谷の事情を察せざるにあらずと雖も、本人自らに於て、かゝる大膽不敵の理由書を提出せば、事情の如何に拘はらず、之を不問に附すること能はざるなり。是を以て熊谷に對して、留學生を免ずるの辭令を發す。此辭令を受けたる熊谷は、憤慨すること一方ならず、殆んど失神せんばかりに恐愕したりと雖も、而も直ちに歸朝せんとはせず。尚ほ暫らく止まりて、教育學を研究し、四年餘にして歸朝せり。

留學生を免ぜられたる以後の熊谷は、常に快々として樂まず、『余が留學生を免ぜられたるは、田所美治が歸朝して、余の事を惡し樣に本省に報告したるに基くならん』と邪推して、一圖に此事のみを念頭に置く。而して初めは『恐らくは田所が……ならん』と思惟したるに過ぎざれども、次には進んで『必ず田所が……』と推定し、終りには『確かに田所が……なり』と斷定して深く田所を恨む。斯くの如きは熊谷が特有の性格にして、不圖思へば愈々深く其事のみに想像を逞うし、飜つて廣く他の事情に想到し、若くは思ひを他に轉ぜしむること能はざるなり。斯の如くにして彼は此事のみを苦にして本邦に歸り、如何にせば文部省の怒りを解いて、光明の生涯に進むべきや煩悶せり。而かも一方文部省に於ては、熊谷自身が思ふ如く、彼を憎み居らざるなり。是を以て歸朝後の熊谷に對しては、未だ直轄學校教授の職を與ふるに至らざりしと雖も、然かも種々の取調、若くは飜譯事務等を委囑して、特に彼の爲に職業を作り與へたり。然りと雖も彼自身に於ては、毫も之が爲に先きの邪推を解かず、始終留學生被免の事のみを氣にして懊惱苦楚す。其心事寧ろ憐む可き事なりといふべし。

かくて彼は煩悶に煩悶を重ね、あたら有爲の學才を抱いて、狂亂の人となり、全く我が學界より其名を沒して遂に死せり。彼れ一身の爲には憐れむべく、我教育界の爲には惜むべし。

五、下田次郎

(一)

下田次郎は廣島の人、明治五年三月を以て其鄉里に生る。廣島中學校、第三高等學校を經て、廿九年大學文科を卒業し、直ちに大學院に入り、教育の心理的基礎を攻究し、卅一年文部屬に任命せらる。後ち幾何もなく高等師範學校附屬音樂學校囑託教授となり、更に女子高等師範學校囑託に轉ず。三十二年八月教育學及び女子教育研究の目的を以て、獨、英、米三箇國に留學を命ぜられ、在留三年にして、三十五年十二月本邦に歸れり。留學中女子高等師範學校教授となり、以て現今に至る。

彼れ著書として、『西洋教育事情』外數種を有すと雖も、純乎たる教育學者としては有名ならず。我輩又其造詣を云爲するだけの材料を有せざるなり。然りと雖も、

女子教育に關する研究の深きことに於ては、恐らく本邦の第一流ならん。女子教育家として明治年間に名を揚げたるもの、先きには巖本善治あり。後には跡見瀧野(花蹊)、下田歌子、三輪田眞佐子、柵橋絢子、津田梅子、櫻井ちか子、山脇房子、嘉悅孝子、成瀨仁藏、三輪田元道、宮田脩、西澤之助等の數者あり。されど此れ等の者は、唯だ三輪田、宮田を除く外、他は悉く實際教育家なるか、又は女子教育の事業家たり。未だ以て女子教育に關する理論と世界の趨勢とに造詣ある人と稱することを得ざるなり。然るに下田次郎は全く之に反す。彼は其職務としては、僅に女子高等師範學校に於ける後進の平教授に過ぎず。然りと雖も其學識に至りては、固より以上の多數女子教育家に超越し、宛然として斯界のオーソリチーたり。又以て壯なりとせざらんや。

(二)

彼は文學に趣味を有し、斷へず研究す。教育社會の文學通といふも過言にあらず。其風采も態度も、性格も亦殆んど文學者風たるを失はず。演說に於ても文章に於ても、常に文學的色彩あるを見る。彼は演說に於て冷靜に理義を解かんと試みず、熱誠なる語氣を以て、聽衆の感情に訴へんとすることに努む。又彼の文章は極めて通俗平易流暢なれども、其文字のよく洗練せられたる點に於ては、恐らく教育學者中の第一流ならん。一言半句の間にも、寸紙斷片の間にも、彼の藝術家的天分のあらはれざることあらず。所詮彼は所謂學者の範疇を脫したる教育者にして、常に人世を內面的に解釋せんとする文學者的教育家なり。從つて教壇上に立ちて傳習的に教育を講ずる教授の材としては、最上の種類にあらざるべしと雖も、溫情慈愛に富み、優雅の性行に富むが故に、情育を第一とする女子教育家としては、最も適任の人たるを疑はず。

彼は廿九年の文科出身なるが故に、桑木嚴翼、姉崎正治、高山林次郎、建部遯吾、松本孝次郎、村上俊江等と同期の出身也。等輩多く博士の學位を受け、各々特得の部面を開拓して、學界の一方に屹立す。而して彼は未だ博士とならず、將來に於ても亦恐らく之を受けざらん。蓋し彼は大學派の所謂學者のタイプに箝まる學者にあらずして、思想感情に活きんとする藝術家的讀書人たるを以て也。然りと雖も教育界の一方に旗を擧げて、兎も角方面の大家となる。學位を有せずとも、男子の本懷を遂げたるものといふべし。

思ふに、彼は女子教育界にありて、三輪田元道と相對する恰好の匹儔ならん。然れども三輪田は下田よりも覇氣に富み、膽勇に富み、且つ政治的趣味に富む。時代に接觸し、思潮を洞察し、ヤンガー、ゼネレーションを適正に指導せんとする教育家的態度に於ては、兩者略ぼ同一なりと雖も、三輪田はより多く政治的、社會的時潮に着眼し、下田はより多く文學的、內面的時潮に着眼す。故に三輪田は女子學校の長たるよりも男子學校の長たるに適し、男子學校の長たるよりも、教育行政家たり、教育政治家たるに一層適す。下田は之に反して純然たる女子教育家の模型たるに違はざらん。

六、吉田熊次

(一)

吉田熊次は山形縣の人、明治七年二月其郷里に生る。廿二年山形中學校に入り、進んで第一高等學校に入學し、卅三年優等の成績を以て、東京帝國大學哲學科を卒業し、更に大學院に入りて、道德教育に關する事項を研究し、卅七年二月教育學研究の爲め歐洲に留學す。四十年八月本邦に歸り、直に女子高等師範學校教授兼東京帝國大學文科大學助教授となり、四十五年文學博士の學位を受く。

彼の專門學科は教育學也。彼が大學を卒業して教育學界の人となりたる時は、一時我教育界を風靡したりしヘルバルト派の個人的教育學は、漸次其勢力を失ひ、社會的教育主義の提唱せられんとする過度時代にてありたりき。彼は此新學說を取りて自己の教育說となし、在來の教育思想を縱橫に論破せり。

彼の處女作『社會的教育學』は、卅六年の夏、帝國教育會の夏期講習會に於て講述したるものを更に訂正增補して出版したるもの、所說固より通俗的にして、彼の蘊奧を盡せるものにあらざりしは勿論なりと雖も、然も彼の教育學上に於ける立場と主張の大體とを窺はしめ、且つ當時にあらはれたる教育學書の白眉となすに足りたりき。

後、彼は歐洲留學より歸朝して、『系統的教育學』を著はせり。此書も亦彼の蘊蓄を傾倒したるものにあらざるが故に、之を以て彼が教育學に關する造詣の深淺を評隲すべきにあらずと雖も、彼の教育研究の態度及び近時懷抱する教育主義の如何なるものなるかを窺知せしむるに足る。卽ち多年の主張たる社會的教育主義を基礎

として、輓近の新思潮たる實驗的研究を加味し、以て個人を顧慮したる社會的實驗的色彩を帶べる教育學を建設したり。蓋し最も健全なる最新傾向を代表したる教育學說といふを妨げず。

其他尙ほ『實驗教育學の進步』、『訓練論』、『社會的倫理學』、『教育的倫理學』、『國民道德と教育』、等の數著あり。何れも皆彼が所信に基ける研究結果にして、出色ある著述として推奬するを妨げず。

彼の博士論文は、歐洲留學中に提出せるもの、『カント及カント以前の道德教授論』と題す。カント以前の道德教授に關する諸種の意見及カントの意見を叙述して、之を論評したるものなれば、教育に關したるものなるは言を俟たず。

（二）

彼は卅三年の卒業なるが故に、深作安文、速水滉、春山作樹、樋口秀雄、紀平正美等と同期の出身にして、彼は其首席者なりき。頭腦明晰にして、論理的判斷に富む。其性格は敢爲警拔、己の所信を發表するに、毫も他を憚らざるものゝ如し。阿諛迎合は彼の最も慊忌する所、說の正邪と事理の當否を爭ふ點に於ては、如何なる先輩大家に對するも尙ほ屈せざる色あり。彼の天職が學者たるにあると、現在の職務が教育者たるにある爲に、自重自愛して、大に其言論を愼しみつゝあるは勿論なりと雖も、彼にして若し現職を去り、假に新聞雜誌記者の如き職業に就きたりとせば、彼は必ず卓勵風發の筆法を用ゐて八方に當り、警々謔々、萬丈の氣焰を吐いて、窃に快哉を叫ぶべき人物たるや疑ひなし。

彼は帝國大學出身の教育學者中にありては、尙ほ後進者の一人にして、年齡未だ若し。彼が比較的早く學位を授與せられたるによりて、人或は種々の言をなすものなきにあらずと雖ども、是は畢竟岡燒きの愚評たるに過ぎずとす。彼の閱歷、性格、修養等に顧み、將た彼の學者としての態度、活動等に顧みれば、彼が博士として十全の眞價を有するは疑ふべくもあらざるなり。

彼れ博士となりて、我國の教育學界に又一博士を加ふ。他の一博士谷本は京都大學に據り、新博士吉田は東京大學に陣して兩々相對峙す。而して谷本は過去の教育界に獨步して、天下に聲名をはせたりと雖も、現今は稍衰頽に向ひつゝあり。吉田は新進有爲の教育學者にして洋々たる未來を有す。谷本は又從來屢々其說を變更し

たれども、吉田は社會的教育學を主張して以來、着實に科學的根柢を力說して動かざる美點を有す。而して谷本は傲慢にして狹量、屢々世の忌憚を受くれども、吉田は剛直にして德操堅固、性行上の非難を受くること甚だ稀れなり。知らず兩雄何れが未來の覇者たるべきや。今に於て之を斷ずるは甚だ難しと雖も、吉田にして努めてやまずんば、必ず將來我邦に於ける教育の學理的研究に大貢獻を寄すべきを疑はず。

彼今や齡不惑に近く、修養發表の時代は漸く去つて、當に練熟の時代に入らんとす。我輩は我學界の爲に彼の大成を望んで已まざるなり。

七、小西重直

小西重直は山形の人、吉田熊次に一年後れて三十四年大學を出づ。間もなく澤柳政太郎の推薦を得て歐洲に留學し、歸朝して廣島高等師範學校教授に任ず。更に文部省視學官となり、次で第七高等學校長に轉ず。

彼は三輪田元道と同期の出身にして、二十八名中の首席を以て卒業す。吉田熊次と共に前途最も有望を以て囑望せらるゝ新進學者也。彼の名聲は尙未だ十分に揚らずと雖も、こは彼の實力足らざるが爲に非ず。其理由は自ら他にありて存する也。卽ち彼が始より廣島にありて東京にあらざりしことは其一因なり。大學出身の教育學者中、彼と同列にある他の何れよりも後進なるは其二因也。而して未だ世の注目を牽くに足る程の大著述のあらざることは其三因也。然りと雖も、彼が明治四十年三月出版せる『學校教育』と題する一書は、今日より見て、確かに注目すべき價値あることは毫も疑ふ餘地を有せざる也。固より此一書たる、彼が地方二三の教育會に講演したるものを速記して出せるものなるが故に、始めより著書として執筆したるものとは稍其趣を異にすべきは論を俟たず。されど仔細に其內容を檢すれば、近年最も我教育界に囂しき實驗教育學を主張せる所多く、乙竹岩造の提唱前にありて、夙く既にライの學說を紹介したるを見るべし。此書が廣く世に行はるゝに至らざりしは、其內容の惡しきが爲にはあらで此書の題名が『學校教育』と云ふが如き陳腐なるが爲めなり。若し彼にして此書を『實驗教育學』と題して、世に出したらんには、乙竹岩造に先つて、其名聲を揚げたると共に、此書は羽翼を生じて、全國に飛翔したるやも亦知る可らず。蓋し本邦の教育家は、『實驗的』若くは『實際的』等の名稱を渴仰

し、苟も斯等の題名を有する書籍は、其内容の如何に拘はらず、之を購求繙讀する風習を有すれども、然らざるものに對しては、如何に其内容の豐富にして、學說の嶄新なるものにても、多く顧りみざらんする傾向を有すればなり。近業『現今教育の研究』は内容嶄新にして重みあり。廣く江湖に讀まれたるのみならず、識者專門家の注意をも惹けり。

彼は人格の人にして、青年感化の偶像也。學力、識見に於て、他の教育學者に劣るにあらずと雖ども、其一度彼に接するものは、彼を學者と云はんよりも、寧ろ人格の人と稱するの妥當なるを知るならん。彼は平素言論を弄せざれども何事に對しても相應の意見を有し、一家の見識を以て解釋す。資性忠忱、篤實篤行にして、教育家の最良典型也。現今の教育學者中には、教育學上の知識に於て、或は彼の上に出づるものもこれあらん。しかれども德操人格を以て、青年子弟を感化する教育者の最上資格に於て、能く彼の上に出づるものは恐らく少からん。彼は此點に於て教育社會近時の逸品なりといふを得べく、現今の高等學校長中にありても、學識人格に於て恐らく第一流なりといふを得ん。

八、爾餘の先進後進

(一) 野田義夫

彼は福岡縣の人、三十二年の大學出身にして、波多野精一、西晋一郎、遠藤隆吉、福來友吉、加藤玄智、十時彌、林博太郎、原龍豐、杉山富槌、村上辰午郎等と同期の卒業なり。文部省の留學生なりて、洋行し、頃日歸朝して、奈良女子高等師範學校の教授となる。風采優雅、貴公子然たる美男子也。

彼の等輩は今日既に多く博士となり、博士とならざる迄も、博士並の人として天下に著聞する人々のみといふを妨げず。彼は此間にありて、第三席の上位を以て卒業したるが故に、此一事よりいふも、天賦の頭腦の優秀なるを知るに足る。

彼の未だ教育社會に有名ならざるは、彼の蘊蓄を傾倒したる著書なきが爲に外ならず。一個の『明治教育史』ありと雖も、サイエンチフキックのものにあらざるが故に、固より彼の學識を揣摩する資料とならず。

彼は頭腦明晰、構成組織力に富み、分類概括の識量に富む。專攻學科に關し、稍岐道

に入りたる觀あるのみならず、大學の元老教授との折合にも多少面白からざるものあるが故に、彼が將來博士となり得るや否やは、少々疑問なりと雖も、英語及英語教授法の大家として、我教育界に雄飛すべきは、今より豫斷するに難からずとす。

彼は卒業年次に於て、吉田熊次よりも古きが故に、目するに新進學者を以てすべからず、當然の仕儀として彼の爲に一項を特設し、他の等輩學者と同列に論ずべきものなるを思ふと雖も、我輩不幸にして未だ彼と交遊を有せず、一項を特設して評論するだけの材料を有せざるなり。これ彼を本項内に收めて短評を加ふるに止めたる所以なり。

我輩の英國に在る時、彼も亦令閨同伴にて倫敦にあり。偶々小林照郎の倫敦に來るに及んで、小林我輩と共に野田の寓居を襲擊ぜんことを提議す。我輩初め快く承諾したれども、後ち令閨同伴なるを聞くに及んで、俄かに不承諾を唱へ、事中止となる。我輩も案外優しき男なりと知るべし。

(二) 田中義能

彼は三十六年の卒業、瀧村斐男、小山東助等と同期也。在學中、教育學を專攻したるにはあらざれども、卒業後教育學に興味を感じ、獨力研究して、一部の人々に知らるゝに至れり。

彼の著書『科學的教育學』、『系統的西洋教育史』は、初學者の指針となること多しと聞けども、未だ專門家の間に重んぜらるゝには至らずとす。然れども其人物は溫厚篤實の君子人にして、勉勵努力の熱心を有するが故に、學者としても教育家としても將來有望の人なりと聞く。彼の近業に『家庭教育學』ありと雖も、我輩未だ之を讀まざるが故に、茲に詳評すること難しとす。

彼れ今國學院大學に於て、國學及神道を講述し、日本大學に於て教育學を擔任し、錦城中學校に於て、矢野文雄の校長の下に、教頭の職を執りつゝあり。彼は縱横の才氣と潑溂たる手腕とに乏しければ、才幹の上より觀て私立學校の經營者として適任なりといふを得ざれども、溫良醇粹の美德を有するが故に、人をして彌次らしめずして、統率するだけの力を有す。

國學神道に關しては、專門家の間に好評あり。一家の見に見るべきものありと聞く。固より教育學に於けるよりも造詣深からん。

(三) 三澤糾

三澤は新進の教育學者にして、故木山熊次郎、大島正德、淀野耀淳、川島金五郎、石井波平、德谷豐之助等と同期出身の文學士なり。大學卒業後、亞米利加に渡りて教育學を研究し、後ち歐洲諸國を巡視して歸朝す。現在廣島高等師範學校教授たり。

著書としては、未だ特筆すべきものを有せず。『國民性と教育方針』『教育者の修養』等無きにあらずと雖ども、何れも皆系統を有する科學書にあらずして、斷片的感想を彙めたるものに過ぎず。從つて此等の書は何れも知識書として重きをなす程のものにあらざれども、思想の產物としては見るべき點少しとせず。思ふに彼は思想家的學者にして知識の學者にあらず。見識の學者にして、プワクトの學者にあらざらん。强ひて自勵して知識の學者になり得ざるにあらずと雖も、馬車馬的に一科の學問を狹く深く研究するよりも、廣く大勢を達觀して、綜合的に學問の大綱を論ずるに長處を有せん。

彼は教育學を專攻すと雖も、唯だペダゴヂーと名づけらるゝ本のみを讀んで滿足せず、廣く社會學、國家學、經濟學、歷史學、生物學等を讀んで、それ等の知識を統一融合し、よつて以て、自己獨得の見地より教育を總合的に論究せんとする態度を有す。彼は米國にあること六年の長きに及びしといふと雖も、其思想中には寸毫もハイカラ臭味を有せず、寧ろ却つて保守的國粹臭味に富む。此點往々青年教育家に喜ばれず、地方教育社會に觀迎せられざる原因たりと雖も、然かもこれ彼の人物の堅實にして思想の老熟なるの證左なり。所詮、彼は青年向きの人にあらずして、中年向の人なり。地方向の人にあらずして東京向の人なりといふを得ん。

去歲、彼が『教育者の修養』を出せる頃、我輩、讀賣新聞社に於て、主筆笹川潔に會ふ。笹川談次、我輩に向つて、『三澤糾とは如何なる人物なりや』と發問す。我輩乃ち上來述ぶるが如き意味を以て答辯す。笹川曰く、『教育者の修養』は教育者に讀まし度き本なれども、今の教育者は恐らく讀まざらんと。言簡なれども意味甚だ深長たり。讀賣社が同書の懸賞批評を募りたるは、これより後のことなりと覺ゆ。

其後、『教育學術界』、臨時增刊として、中學校號を出さんとする時、主筆豐原清作我輩の寓居を訪うて、『英國の中等教育』といふ題にて何事かを書けよといふ。我輩、談序、三澤を推奬し、何事かの執筆を依賴すべしと豐原に勸む。豐原は既に依賴し置

けりとて、我輩の三澤觀に同意を表す。

三澤が黑人筋に認めらるゝこと既に斯の如し。然れども其眞價の發揮せらるゝは、自ら之を將來に俟つを至當とすべく、過去及現在に於て十分に彼を論評するは甚だ妥當ならずとす。

(四) 過去の人、現在の人、未來の人

以上の外、大學出身者にして、敎育學の研究を試みたるもの又は試みつゝあるもの尠からず。

前には國府寺新作、澤柳政太郎、牧瀨五一郎、立花銑三郎等の數者あり。後には村上俊江、塚原政次、雀部顯宜、林博太郎、杉山富槌、春山作樹、木山熊次郎、大島正德、乙骨三郎、小林照郎等の數者あり。

國府寺新作は、數十年前、外國の敎育書を飜譯紹介したることあれども、其後外務省に入りて、敎育界と絶緣す。今杳として消息を聞かざるは固より其處なり。

澤柳政太郎は、『行政界』の欄に於て詳論したるが故に、茲に再び人物評を試むる必要なし。茲には唯だ彼の著書『實際的敎育學』と『我國の敎育』との二書が、相當注目

に價すべき著書なることを一言して筆を止むべし。固より此二書は所謂敎育學の原理原則を說きたるものにはあらざれども、然かも唯だ橫文字の敎育學のみを金科玉條として涉讀する人々の到底眞似し能はざる權威を有す。知識の書として尊重せらるべき價値多からずとするも、見識の書、智見の敎育學として、我輩之を推賞せざるを得ざるなり。

牧瀨五一郎は二十四年の卒業にして、大塚保治と同期なり。曾て心理學の著述をなしたることあり。今陸軍敎授にして、文部省參事官を兼ね、傍ら帝國敎育會理事として、民間敎育の爲にも盡瘁す。資性穩健順良にして、覇氣なく機略なしと雖も、至誠質實の好敎育家たるを失はず。目下西洋にありて、敎育事項を調査しつゝあり。

立花銑三郎は二十五年の出身なり。曾て澤柳政太郎と共著して敎育書を出したることあれども、洋行中病魔に犯され、歸朝の途次、印度洋航行中の船中にて歿す。今日迄生存したりせば、何事かをなし得る人物なりしに、惜しむべき極みなり。

村上俊江は二十九年の卒業にして下田次郎と同期の出身なり。曾てヘルバルト派の敎育說全盛を極めたる時、同派の敎育學を飜譯紹介したることあれども、爾來杳と

して消息を絶てり。今、何處に於て如何なる健闘をなしつゝありや、如何。

塚原政次は、三十年の出身にして、心理學を專攻す。純教育書の著述なしと雖ども、『教育的心理學』の著述あり。現在廣島高等師範學校に於て心理學を講述する傍ら、時折帝都の教育雜誌に論文を寄せて、最近の研究を發表しつゝあり。純正心理學の造詣に至りては、固より我輩門外漢の云爲し得る所にあらずと雖も、心理學の原則を教育に應用する方法に就ての彼の研究は、天下の教育家を裨益すること蓋し尠少ならずと信ぜらる。將來必らず博士たらん。

雀部顯宜（サヽベアキヨシ）は、塚原政次と同期の出身なり。東京女子高等師範學校より歐米に留學し、歸朝して現在奈良女子高等師範學校に教授たり。專攻は倫理學なれども教育にも興味を有し且つ之を研究す。資性嚴格にして、稍ピューリタニックの所あるが故に、人をして窮屈を感ぜしむる短所あれども、彼の主觀に於ては、絶えず内省して眞面目に修養しつゝある人なりと確聞す。世間的交遊少き人なれば、男子の學校に倫理科を擔任するよりも、女子の學校の倫理教授に一層適せん。お茶の水にては往年生徒間に人望ありしと聞く。未だ著書を出さゞるが故に、彼の學説も學識も之を知るに由なきを遺憾とす。恐らく未來の人ならん。

林博太郎は三十二年の出身にして伯爵界の少壯たり。彼は教育學を專攻し、久しく東大文科の講師を勤む。今尚ほ其職にありと覺ゆと雖も、そは唯だ名を留むるに過ぎず。身は既に政海に投じて、心は既に學界を離れたり。彼は吉田熊次の洋行中、大學の教育學講座を擔任したれども、門下に彼の感化を受けたる新進なく、學界に何等の貢獻をなすにも至らざりき。蓋し名門に生れたるが故に、學位を受けて家門を飾るべき必要もなく、學職に永就して衣食の料を得るべき必要もなく、唯だ道樂半分に學問を研究し、名譽職の如く心得て、大學講師を勤めたるに因るならん。

杉山富槌は林博太郎と同期の出身なり。曾て大瀨甚太郎と共著にて、教育書を出したるとあれども、其後全く消息を絶ち、今、如何なる方面に活動しつゝありや我輩之を詳にせず。切に健在を祈らずんばあらず。

春山作樹は、吉田熊次と同期の出身なり。曾て日本大學にて教育學を講述したるとあり。現在廣島高等師範學校にありて教育學を擔任す。洋行後學識大に進歩したりと聞くと雖も、未だ著書なきが故に、其造詣を知るに由なし。恐らく未來の人な

らん。

木山熊次郎は三十七年の出身なり。在學中、教育學を研究したるにあらずと雖も、卒業後、教育に趣味を感じ、雜誌『內外教育評論』を創刊して、獨力經營し、漸く基礎確立したる三年餘の後に於て、突然夭折す。著書に『黑住宗忠』、『社會主義運動史』、『理想の青年』、『國勢と教育』等の數種あり。

彼は人格の人、意氣の人、奮鬪の人、情熱の人にして、學問の人にあらず。思想甚だ豐富の人なりしと雖も、稍々主觀的、煽動的、挑發的、破壞的、反抗的にして、穩健着實老熟の經世家的態度に乏しく、時として著しく、軌道を外るゝことすらなきにあらざりき。

短き一生を筆舌に託したりと雖も、文章も演說も、精巧の域に達せず、寧ろ普通以下の拙劣を以て終れりき。然りと雖も、言ふ所に奇警あり、筆端に熱火あり。修理に一貫を缺ぐ所ありとするも、所論必らず青年讀者を感動せしめ、心胸の共鳴を感ぜしめ、心の琴線に觸れしむるの靈腕を具へたりき。而して言論文章の上に、著しく壯士的野性氣分の現はれ居たるにも拘らず、一度び面語すれば、人をして春風駘蕩草木の薰ずるが如き襟懷を感ぜしめたる一事、最も得難き長處美點となす。

彼は教育評論家を以て一生を終りしと雖も、教育の學說原理及實際に就ては、未だ通曉するに至らず、教育行政に就ても、未だ黑人評をなし得るに至らざりき。然りと雖も、常に身を高處に置いて成るべく大局を洞觀し、國勢の大傾向によりて教育の大綱を評論せんとする態度に於ては、當時教育言論界の第一人にして、彼の右に出づるもの一人もあらざりき。彼は教育の知識を修めずして、教育思想を直覺し、教育の技術を學ばずして、直ちに教育の根本を衝かんとせり。往々、見當違ひの批評をなすことあるを免れざりしと雖も、然かも亦所謂職業教育家の企及し能はざる着眼ありしことを否むべからず。

彼は體軀短小なりしと雖も、頗る覇氣に富み、氣概に富み、膽力に富み、他をして信賴せしむる大丈夫の眞骨頭を具へき。彼は權勢に屈伏せず、富貴に叩頭せず、毅然として犯すべからざる精神氣魄を具へたるが故に、國士として、獨立評論家として、教育界の革命兒として、十分の資格を具へたるのみならず、又甚だ友誼同情慈愛の念に富みしが故に、父として、良人として、友人として、交友間に卓出する日本人の典型なりき。而かも今や此人遂に亡し。惜しむべき哉。

大島正德は木山熊次郎と同期の出身にして、木山の歿後、『內外教育評論』を經營す。教育の專攻者にあらずと雖も、能く教育を解し、能く之を評論す。思想穩健、人物堅剛、木山ほどの熱なく、木山ほどの奇峭なしと雖も、其代り木山よりも老熟して、ドッシリしたる重みを有す。互に一長一短あるを免れずと雖も、大體に於て、最良の後繼適任者たるを疑はず。殊に彼が今日迄木山時代の態度を寸分も崩さゞる點に於て、彼に重厚の美德あるを想はしめ、木山の知友をして安堵せしむる一事最も可なりとす。然りと雖も、大島は一生教育評論家を以て立つべき覺悟を有すまじ。蓋し彼の本領は評論家たるにあらずして、學者たるにあれば也。

彼れ今東大文科の講師たり。遠からず、助教授となり、次で博士となり、終に正教授に進むことは、彼の野心中に含まるゝ第一の標的たらずんばあらず。而して此標的は彼に取つて、決して過大過當のものにあらざるはいふ迄もなし。

木山は情の人、熱を以て全部とす。大島は知の人、學の人、考究を以て全事を包む。一は機敏輕俊、情意の催する所に從つて、取り敢へず先づ爆裂彈を投じ、然る後、問題の發生及成行を觀望す。他は重厚沈着、容易に動かず、問題起るに及んで徐ろに內容を分解檢覈す。木山は着眼を貴び、事の結果如何よりも、問題其物に興味を有し、大島は立言の遲速よりも內容の吟味を重視して、問題の影響に想到す。一は思想家的若しくは觀察家的態度といふべく、他は學者的若しくは理論家的態度といふべし。

乙骨三郎も、木山、大島と同期の出身なり。今、東京音樂學校にありて、教育學を擔任す。曾て著書を出さず、雜誌にも書かざるが故に、未だ廣く名を知られずと雖も、有望の資質に富むと聞けば、將來必らず造詣あらん。

小林照郎（テルアキ）は三十八年の出身にして、江部淳夫と同期なり。在學中、社會學を專攻したれども、卒業後東京女子高等師範學校教授となるに及んで、教育學及教育史を兼學す。今、社會學及教育學研究の命を受けて歐洲に留學す。

彼は頭腦明晰、才人肌の新進なり。性、怜悧にして、處世にも巧みなれば、學者として も、教育家としても、將來必らず相當の地位まで發展せん。

我輩の英國を去らんとする時、彼れ突然倫敦に來りて我輩に書を致す。乃ち面晤して互に久濶を敍し、相携へて各處を巡覽す。彼れ當時未だ西洋に慣れず、頻りに日本食を要望し、日本に遺し置ける妻子に戀々す。其狀恰かも所謂ホーム、シックに罹